

一向その便りが無く、其上三晩續けて悪い夢をみた。その夢は何でも自分の子供の頭が見る／＼中に落ちてしまつた。「これは慥かに悪徴の夢だ」かう云つてAさんは物を食べる気がしないと、ふさいで居ます。ところがKさんの祖母さんがそれは慥に身二つに成ると云ふ、いゝ夢だと云つたので少し慰められて居ます、中々奥さん思ひで感心です。かう皆んなが、ほめそやしてこの乏しい船中の話をふやしたのだ。その奥さん孝行であるべきA將校、それがまあどうだらう！ まだ其美談？ から幾日も、たゞない今日、臆面無く大膽に我々一行と宿を同じくし、しかもこの斷髮美人を伴はんとは——例の私の潔癖は憤怒にまで私を、せずには置かなかつた。

「これだから飛行將校は駄目なんだ」奥さんを心配する様な事を云つたのも或は一つの宣傳に過ぎなかつたのだらう——「大嫌ひだ」——かう云ふ心事と知らず私は彼が船中の一日、飛行機について皆んなの前に演説を試みた。それは如何に飛行家の苦心の多い事か！ 常に死を覺悟して勇しく、其目的の爲邁進するか！ 我國が彼此して居る中に既にドイツでは最近飛行機を砲彈の如く發射して一氣に目的地に到達せしめ様とする計劃さへして居る。

獨逸などでは既に世界協定の條約を無視して倍も／＼大きい飛行機をさえ作製して、どし／＼非常時の戰鬥力を充實させて居る。そして私が今度海外に派遣されたのも主に此の飛行機發射の秘密を——特に英國に於て研究せん爲なのだ。何卒皆様方もどうゆう機会があつて、その秘密を知られた場合は御知らせ願ひたいと云ふ話があつた。私の例の感傷性は此話に依つて非常の熱度を加へた。そしてこれから英國へ行く時、ドーバー海峡は是非此機に乗つてみたいとさへ思つた。

「貴方の御講演が如何に私をして飛行機に興味を持たせ且つ大膽にしたかは、ドーバー海峡を飛び越へると越へないに由つて知れるでしょう」こんなに迄私は彼に對する信頼の念さへ起したのに——この圖々しさ——。日本海軍々

人としての體面の何物たるを知らざること——。

嗚呼惜しいことだ！

彼女に後で此事を話すと、「又何時もの御母様の憤慨か……、そんな事かまわずにおゝきなさい——」と云つた私は、かう云ふ時著しく彼女と見解を異にしてゐる事を遺憾に思ふ。そしてかゝる點に絶對、同感であつた彼の面影が涙ぐましい私の眼底に映じて去らない——。

さて此ノアイユと云ふホテルは馬港ではかなりの旅舎らしく、彼の船中の日本人一行も此所に来て居た。

我々の室は三つあつて、みんな續いた室なのは愉快だつた。一寸見た中所々廣い。

三十疊位あるだらう壁紙や其の他は東洋風の更紗模様を使ひ、ベット、スプレッド等もさすがに色彩の配合面白く薄い鶯色の麻に薄鼠色繻子の襲の細く取つたのを額ぶちにしてあり、スタンドシャンデリーの灯影も美しい。

彼の狭い船室に於ける四十餘日の明け暮れ——これも亦た狭い／＼天井の低い——裝飾とてもろくに無い寢室にのみ明け居た私は、初めて床の揺れない——天井の高い——そして色彩に富んだ此室に足を延ばした時、たとへ様も無い心の延びやかさと柔き——足腰の抜ける様なゆるみをさへ覺えた。

久し振りに彼女はU子さんとわかれて私のベットに横に成り乍ら四方八方の物語りに先だつものは只涙だつた。かの事も——この事も幾日幾夜かたり明し、かたり暮してもつきないのに——明朝九時の出發を思へば本當に彼の錦を斷つ様な名残惜しさの裡に彼女は壽江子と其寢室に歸つてしまつた——。

七月二日

感慨深い一夜は明けて、早くから巴里行の身仕度にかゝる。昨夜はまるで百合子を初めさ氏の厄介になりきつて居た。かねてあるじの渡歐時代、繪葉書で見たり、話にも聞いた通り自動車の二階つき——以前は馬車の——な的大眼睛のトランクが三つも乗るそれが、振動する度に私は知らず／＼首を縮めずに居られない。すつかり此多くの荷物が積みされる間、ひつきりなしに通る千熊萬状の人々の群——洋服こそ着て居れ、みじめに不揃ひな服装お辨當——ボール箱の中へ銘々子供達の食べものを詰めて——何處も同じやうに子供達は指ぐわへて、その箱のまわりを去らない——

紛然雜然としてゐる中に汽車の煤煙は、ばら／＼と音をたて、私達の衿元に落ちて来る。無帽の私の髪の上にはざら／＼するほど芥が溜り、バタ／＼拂ふ袖袂には煤煙の粕がばら／＼と落ちる——

「これはたまらない、成程旅行は洋装でなくては無理だ——」

戦後の歐洲各國は物資の窮乏聞くよりも甚だしく、此煤煙のひどいのも質の悪い石炭の爲だと百合子が云ふ。成程故國には見られらい煤煙の臭氣と塵埃のひどさ——二十五年前のあるじの英國崇拜の夢も追々さめる時が來るうだ——

扱、この汽車に我々以外の日本人一行は、みんな一等の汽車に乗つたらしいが、私達は百合子の指圖通り二等車に席をとらして置いて乗つたので、却つて一寸の不自由もない。ゆつくりした客車の中は卓を中央に二人づつ相對する席と矢張、卓を前にして一人づつ相對するものがあつた。私は、あるじと一人づつ相對し、他は、二人づつ相對してシートを満した。

マルセイユで百合子の呉れた花束——捨て難くて此車の中へまで持込んだ。ところが流石は佛人だけあつて、早

速汽車のメイドが、日本製の、あらゆる空罐の四角いのに水を満して此花を挿して呉れた。然し、これにもすぐチップがつくだけ興さめる心持はするが——。これも現實の生活には餘儀ないことだらうが到る處チップだらけで紙入を仕舞ふ間がないくらゐだ——

兎に角こんな風に餘裕ある座席には十二時間も餘り辛くなかつた。そして退屈すべく私は、あまり考へる事が多く涙が繁かつた。

途中、飛行場の傍を過ぎ、盛んに飛行機が遊戈して此汽車と競走するのがみえた。

事々物々私は彼在らばの感に一時間近く泣き通した。それは單なる追慕の涙のみではないが——。

かうしてかなり長い十二時間の旅程も恙なく巴里に着いた。車中で晝食及び夕食を食べたが、これは流石に佛蘭西だけあつてどれも／＼まづいものとはなかつたが、何處へ行つても、サワイエットには布を使はず、皆紙ばかりなのには驚いた。そして佛蘭西には夕食の外、バタがないのだ。水も直ぐには飲めない、ペリエといふ鑛泉が飲料水に代用されてゐる。——

七月三日

エツフェル塔を目の前にした此ホテルは、夜通し自動車の音を絶たない。然し船中から、いかなる騒音にもよく眠るべく慣された私は、不思議にも亦此雜踏の街路を下に見て十時頃まで熟睡した。心配したあるじの方も、異状なく起き且よく眠れたらしいのでほつとした。然し、餘り寝過ぎして朝食は——と心配する私にあるじは答へて

「此處では朝は、みんな寢室へ取寄せるのだよ、「カフェー、オレ」ときまつてゐてそれはパンとカフェーだけで

然し此處のカフェーは牛乳澤山でうまいものだよ」

かうきいてほつとした。何しろ船中では朝からもう身仕舞をしてオルゴールの音を會圖にみんな食堂に出描はなければならなかつたのだから——。

熱帯の酷暑の爲に私は床の上に寝た。そしてだるい身體をおこしてぐつしより濡れた寝巻を着更へてその時刻に間に合せる面倒さは、今考へてもぞつとするぐらゐだ。「あゝやつと氣樂になつた」かう云はずに居られなかつた勿論ホテルは同業者の中ではかなり貧弱なものらしく此東洋のお客様である我々をも驚かすべき何等の設備もない。否寧ろ私がかねてきいた物質文明の豊饒なこと——それを裏切られるやうな事實に驚かされるぐらゐだ。

然し佛人は感心だ。よく其自國の財政難に同感して國外に物質を求めようとしなないことだ。そこへゆくと我々は恥かしい。かうして此國へ来て見ると、其化粧品的大部分は皆此國の物ばかりなのだから——。

東海の一小島國外資を仰ぐこと過大に、其内實のいかに貧弱なるに比べて、いかにまた大膽に輸入超過を看過することよ——熟慮すべきことであると思ふ。

此國ではまた燐寸が國營で一箱の燐寸も輸入禁止なのだ。

夜、Sさんと共に上海といふ支那料理屋へ行く。

日本のそれと違ひ、見るから其本國を想像させる様な、否むしろ私の一瞥した上海より、しつかりした建物朱塗の圓柱が太く高く——細長い部屋だつた。

金魚の箱や盆栽が床の間に似た一段高い處に置かれ掛物などかなりのものらしい。料理も極、普通のものらしく鯉の煮たのも故國のより酸味がなく、餘りうまいと思はなかつた。

食卓も三列はかなく、一列は私達一行、中央と他の一つの卓子にはかなり外人が居て、しきりに此方を見つゝ何か密々私語して居る。百合子があれは何でも此我々一行を家族の一團と見て、それがみんなあの人達の子供かしらと煩悶してゐるらしいとの事、成程産兒制限の劇しいので有名な佛蘭西だもの、こんな事も不思議ではない。但し其天道に反するものか否かは別問題として——

S氏も此夕食に列して貰つたのだ。

何しろ一寸の間に何もかも大呑込、不自由なしの佛語には機敏な彼を思はしめる。アバートメントや何かの事も非常に委しく、色々そんな話があつたので我々の宿やDさんの宿も、いゝのがあつたら——とお世話を頼んだ。

彼の容姿はあまり氣どつた様子もなく堅實らしい風貌に見え、例の少し甘い様な口許で色々話をする——彼も中々世才にたけたところがある。

私は今度の此行に就いては、折角打揃つて彼女を迎への旅路にU女史の永らく看護の勞もあり、十分融和し上和やかな家族般的團氣の裡に彼女をも置きたいと心掛けてゐたのだ。それでつとめて私から開放的態度をとり、彼女の好きな酒、煙草——そんなものにも遠慮なく自由にさせたいとつとめてゐる。

前後したが此上海亭の料理は餘り私には感服出来なかつた。勿論、もつと上等の物ならいゝかも知れないが——夜に入りあるじは珍らしく夢に魘されて大聲をあげ、目を覺ますくらゐだつた、驚いて臭那劑を飲ませる。

七月五日 晴

やはり此バリは涼しい。一寸も汗が出ない。夜になると羽根蒲團を足の方へかける位だ。今日はどこか見物に行

きたいなど、云つてはみるもの、まだなか／＼疲れが取れない。

今朝あるしが顔を洗つてゐると、D氏から紹介の名刺を持つて、二人の客が来た。ちやうどまだあるじは、顔を剃つて居た所だったので、そのまゝそこでその人達と應對してゐる聲が聞える。日本ならいかに貧弱な家でも、風呂場や洗面所で、人と挨拶もすまい。おまけにそれが始めての人だもの——。私は呆然として主客の聲を聞いて居た。

なんでもD氏が行かれたアパートが大變氣持がよいから来てみてはどうかと、言ふことなのだそうだ。それでは夕食後行つて見ようとなつて、急に百合子や湯淺さん共々かなり遠い所まで行つて見る。場所は——入口にはかなり木蔭が作られその下で夕飯も食べられるように、食卓があちこちに置かれ、小さい色電球が處々つるされてある。

しかし私達が案内につれられ見た部屋は大嫌ひな最新式な——米國式のぎす／＼したファニーチュアと低い天井のおつかぶさるやうに感ずるほか他の微細な點も目に入らなかつた。いくら古くても損じてゐても、私は元の宿——ルイ式の部屋が好きだ。「こんなきりつめた部屋に居るのは向から金を出してもらつてもいやだ」かう云ひきつて私はもう他を云はうとしなかつた。

同行のみんなあまり感服しなかつたものとみえ、誰も異議がなかつた程私の趣味とは全然異つて居た。

それから夕飯は日本食をと、私が望んで常盤と云ふ家に行つた。前から電話も掛けなかつたが、しかし、鹽梅に一室明いてゐて、そこのあるじがかなり上手に客をあしらつた。焼魚に鱒が附いたのは一寸驚かされたが、サーデンと云へばなる程とうなづかれる。思ひのほか味も下卑てゐない。久しぶりで豆齋の味噌汁——定食だけにあと

はお刺身これは鯛で案外よかつた。煮物等二三品に、何より望ましかつた香の物——ばん茶のかほりも懐しい、とくに私とあるじには茶椀蒸がついた。よろこんで箸を運ぶ私に反して百合子はあまり喜びなかつた。

勞農ロシヤで貧食して居るだらうと心配したのは杞憂だつた。彼女の日常生活は、なか／＼豊かなものらしいことは、故國のこの夕食をよるこばない點でも知れる。——

### 七月七日 晴

もうかなりの日数をへたが、やはり私の疲労は休まらないとみえ足もむくみいかにも歩くとだるくてたまらない。それでこの疲れさへなほつたなら、亦元氣も出よう、大事にして居るにかぎると、今日も亦外出を止め、ホテルに國男と二人で居残つた。晝食も部屋に取つて、靜かに回復を待たうとしてゐる。これは海路の長かつた爲もあらうが、いろ／＼の心勞が、かうも私を疲れさせたのだらう。

幾千里の波頭の上にも尙彼の面影は浮んで、寸刻も忘れることが出来ない。そして又一面には彼女を迎へて心安く後事も託せようかと期待したが、これも亦、心の状態に夥しい間隔がある。私はこの重なる失望に心身の疲労倍加するのをおぼへる。

そしてかなり澤山の船からのお知合がふえ、このホテル、アンベリアルにも大部其時の人達が見える。それもこの頃急に非社交的になつてしまつたように見えるあるじの態度は、亦私のあたまをつかふ一端ともなり社交上にも私の心は休めなかつた。

しかし何が幸になるか、わからないもので、このホテルのエレベーターは、特にこんな私のような意氣地なしに

適應する程度の緩慢さで、ゆる／＼とあがる。それは丁度三尺四角位の中に据付けられたせまい箱のようなもので何か片隅にある紐を引張る。すると、のろ／＼とあがつて同時に電燈もつくのだ。恐らく故國ではこんなゆつくりした、エレベーターで上下して居ることなど夢想だもしないだらう。

七月八日 晴

今夜はこゝの名物魚料理ブルニエに、案内しようと夕方から百合子が来る、こゝで一番便利に感ずる事は、このタクシーの容易に乗り得ることだ、私のやうな足弱には何より有難い。

しかしこれに反比例するものは、こゝの水が鹽分の多い爲に、飲料水にならず、僅かにペリエルだのエピアンとか云ふ蒸溜水のやうな饅頭もので、わづかに口を濡らすことである。私のやうな水の多くを飲むことに愉快を感ずる者にとつては、いか程不自由千萬のことでもあり、又健康上にもよくない事だらうと思はれて、私はこの思ひがけない歐洲の眞只中、佛都、巴里の水の不自由に意外な感と共に、失望の大なるを感ぜずには居られない。なぜみんな佛國に遊學し、或は留學する人達はかう云ふ大なる缺陷について一言も不平を漏さないのだらうか。そして單に其美點ばかりを誇張し得るのだらう。水は生活の源泉だ。もしこんな事さへ氣にならず物質文明のみに没頭し得られる人達は幸福だが――

さて私達のは入つた所は一目して故國の料亭に模する所多いのに驚かされた。皮つきの柱に茶色の塗壁、床の間らしい所さへ有つた。電燈も故國のそのやうに、行燈に模したのがつるされてあつた。佛都巴里こゝでこんな料亭を見ようとは――(日本人でありながら故國のすべてを排斥するもの、少しは自國の特長を思ひしらないか――

!)心のなかでかう叫びつゝ、私は更に左右を見廻した。そしてこの四通八達の街路の中心にあつて、尙新緑の目に快く清涼の一角を作り得た。この國人の流石は美術國民であることを否めない事實だ。

偉大な體軀の持主であるクツク、或はボーイが立派な燕尾服の上に、腰巻のやうに裾をうつつやうな――日本の前掛の通りの――白い長いエプロン、いな腰巻と云ふ方が至當な物を巻いて居る。そして一々その原料、魚鳥などを最初に客に見せてから、料理にかゝるのだ。そして、出来上つてから、更に見せて後いよ／＼カーブする。

こゝの家で自慢の蝦のマイヨネズ――大きな／＼皿にやはり最初なまのまゝ見せてから茹で、それから見て居る所でカーブし、初めは眞中のいゝ所だけ、二度目には長く細いかざりのものを出して、足や何かの肉を出して食べる。マイヨネズも日本のそれよりも濃くてうまい。オードブルにメロンが出た事を書き落した。メロンは實に味がよくて其の上、形もなか／＼大きい。次に鳥の丸焼だつた。がこれもなか／＼美味しかつたが、何しろ日本に生れて米飯で育つた私には、こんな珍味も茶漬のうまさにおよばない事が残念だ。なにしろ此日本趣味の料亭で、この夜、絶対に洋風をまぢえない私が客として來た事は、いかにもふさはしいことだらう、と我ながら考へられる。かうして綠蔭繁きこの家も、大陸のならひで、八時過ぎてもまだ明るい。夜が更けるにつれて、おひ／＼込合つて來る客の中をわけて、此日本風の私は衆目の集る中をゆつくりと出口に進んだ。横合ひから黒い服に白いエプロンの女給が(メルシー)と云ひつゝ赤いバタを四五本束ねたのを差出した。私も亦、(メルシー)と答へつゝ受取つた見ると我々家族には一人々々かうしてくれたのだ。恐らく他國人に對する特別の好意らしい。なる程フランス人らしい事だと見た。其の小さな赤黒い花びらから、ほのかにかほる匂ひをかきながら、遙かに高く――遠い空を仰いだ。

前庭には更に高い／＼臺がだん／＼に——まるで日本の難段の様にして、上等の客か否かは、しらないが、多勢の群衆が杯をあげて居るのが見えた。

タクシーの、はせちがふ街路に立つて、瞬かにそれを物色して居ると、もう目の前に一臺近づいて来る。まだ疲労のとれ切れない物憂さにだるく成つて来たからだを託して、一同は宿に歸つた。

自分の部屋に歸ると、先づ私の目を射たのはシャンデリエ——の光ではなく、やさしい百合の花やフリージアの花の一束だつた、名刺には宮島幹之助博士の名が有つた。遙々こゝまでつれて来た彼の爲、何も手向ける事の出来ないのを悲しんで居た私の心は、何よりもこれが嬉しかつた、すぐ有合せの水呑みに挿して手向けた。

なにしろ連日足がだるくて重い、おしてみると穴のやうにへこむ。もし脚氣なのを知らないで居てはと、ちやうど泊合せの博士に見ていただく。なか／＼聰明らしいこの人は色々診察した上腎臓のやうなむくみもなし、やはりお疲れの爲でしょう。(私の母などもよく椅子に長くかけて居るとむくみますから)と更に話題を轉じて「實は私なども若い中は同じ診察するにしても知名の人やなにかに對して特別の待遇をする先輩達に對して非常に憤慨したものです。しかしおひ／＼其人達が世間に尊重され敬服される價値をみとめることが出来、むしろそう云ふ人ならやはり凡人とちがふ待遇も仕方がないだらう、と云ふところに落ちつきました」といふはなしも面白いと聞いた。

### 七月十日 暑し

今日又、どうした事か気分がはつきりしない。それで晝餐も、あるじと共に此食堂で攝り、午後四時過ぎから、ルーブルの裝飾美術館に、ナポレオンの遺品を見に行つた。

其頃 私はまだ十二三歳位であつたらうか、かの博文社——現在の博文館を凌ぐ様な東京唯一の大書店であつた——の歳末安賣があつた時此ナポレオン傳記を購ふ事が出来、彼が少年時代、其讀本中から *Chapitre* の文字を抹殺したほどの盛んなる意氣曰く何／＼といふ様な殆んど彼の蓋生の英氣に心服し憧憬した私だつた。

今、まのあたりに見る此燦爛たる軍服、白革の手袋——、胸には多くの勳章が更に光輝を増してゐた——。何とも云へない——肌に粟するやうな感激が、私の身體中に満ちた。そして彼がいかに小男であつた様に傳へられてゐたとは異り、かなりな體軀の持主であつた事は、其手澤の存する何物に依つても明かだつた。そうして私の見た當時のもの本に、晝かれた彼は、ナポレオン帽を横に被り金條のはいつた白いズボンの兩足を踏張つて、白馬に乗つてゐる勇姿であつた。けれど、今まのあたり見るそこには、其帽子もズボンもなく、只上衣のみで其色も亦、オリヅ色の黒ずんだのであつた。

彼が其戦勝の度々に分捕つた旗の多くは、皆此天井に掛けられてあるのだそうだが、時既に遅く薄暮の光は視界の明かでない私には残念にも見ることが出来なかつた。

「もう一度ゆつくり見やう、仕方がないから——」

あるじにかう慰められつつ私は名残惜しくも此館を出た。

歸路はかの有名なポアードプロームの大公園に車を馳せた。實にこの森林の様の中に建てられた其茶亭——其處には木蔭々々に鐵製のベンキ塗りの椅子、卓子が置かれ、三々五々相擁して来る男女の群は、入りかはり立ちかはりして居る。私共も亦一の木蔭に陣取つて靜かに其群衆を眺めて居た。どれも殆ど一人で来る人はないと云つていくらゐる。——ここで私の最も氣に入つたのは、そのサーヴィスする燕尾服の給仕が、いかにも悠々と靜かに行

交ふ様子が實に安らかな氣持を與へる事だつた。

殊に面白いのは鬱蒼たる此森の中に夥しく雀の居ることとそれを又その燕尾服の給仕人達が、いかにもどかな應揚な態度で、パンをやつて居ることと、中々其情景は故國の何處にも見られない氣がする。是は一には喧しいと定評ある、女給仕の一人も居ないことが原因してゐるかも知れない。これもまた意外の事だ。私は、かういふところに大國民らしい氣分を認め、故國にもどうかかういふのんびりした空圍氣を得たいものだと思はずにゐられなかつた。

それから夕餐をヴィクトルユーゴー街の「プティチュランレストラン」に攝り、一行五人、賑かに今日の思出を語り合ひながら、ホテルに歸つた。

七月十二日 晴 暑し

まだやつと目がさめたばかりの處へ、電話のベルが響く。

我々のベッドの側の小卓の上に、置かれた電話の音だ。然し、それが故國の様なベルの音ではない。たゞカタカタといふ木を敲く様な音ばかりする。音としては、いやな響だが、然しけたたましいベルの音より、寢耳には此方がおだやかだ。これも私の様に過敏な聴覺の持主には、決して悪い感じではない。

其電話では、今、玄關にM、N、兩博士が來られたといふ門番からの知らせなのだ。

「さあ、大變！」大納の寢間着姿で跳起きたあるじは、大急ぎで洗面もそこ／＼に洋服を着て降りて行つた。

「さあ、私も、若夫婦も——」

といふことで、壽江子が傳令使になつて、ギンギンいふやくざなベッドを飛下りる——

やがて間もなく、寢室兼居間の此部屋に導かれた兩博士、殊にN博士には一別以來の御禮やら何やら慌てた後の挨拶振りよろしくあつて、さて代る／＼種々の御話が出る——。日本と違ひ、かういふ時さあと云つて、もてなすべき何物もないこの佛蘭西では——驚く勿れ、歐洲文明の中心、この巴里では實にその文字通り時間外にはほんとうに何物もないのだ——よんどころなく、故國から持つて來た海苔や、お煎、あられなどが唯一のおもてなしで、ペリエルに葡萄酒をすゝめる。

さて、兩氏の用向は「今夕、みんなで會食したいからそのおつもりで——いづれ夕刻御迎ひに參ります、奥さんの御相手にはKさんといふ大使館の御夫婦も出ます」といふ鄭重なお迎へなのだ。

「こちらでこそ御馳走すべきなのに」と恐縮に思ふ。そして私が、無暗に疲勞したり、いろ／＼の容態をN博士に御話して「然し今夕はお醫者様がお附きだから安心して是非參上いたしませう」と答へて、兩博士は歸られた。

それから直ぐ朝餐に例の「カフェーオレ」に、私だけは紅茶を命じて簡単な朝食が済む。間もなく晝餐になつたが、外に出るよりはと下の食堂へ降りて行く。

このホテルの食堂——それは實に我々の夢想だもせざる晝尙暗き食堂なのだ。全く文字通り晝尙暗いのだ。かう云つたら、恐らく故國の人々は私がどうかしたのだらう——と思ふだらう。然し、それはもう殆んど此巴里の西側に面した窓を持つ何處の家でも、此經驗を知らない人はなからう。それは此佛蘭西では、ブライドンを下ろすことがなく、重い厚いカーテン、レースカーテン、次ぎに外部にはシャッター——、錠戸そればかりなのだ。それで此烈しい西日——それはもう午後一時頃から射して七時過ぎまで照りつける。それを防ぐべく、此錠戸がたてられる

のだ。煽風機のないことも我々東洋人の最も驚くべき事なのだ。

上海、香港、マルセイユ、數々の港に上陸した私は何處でも此煽風機の大きく、而も緩く天井に動く影に、暑さも餘り苦にならなかつた。ところがどうだらう、此歐洲屈指の華都巴里に煽風機なく、飲料水なく、おまけに此豈尙暗き陰氣な食堂——私一人ではとても此陰慘な食堂で食事をとる勇氣はあるまい。然し幸ひ、多勢——家族全部なので食慾までは妨げられないのは何より仕合せだ。

今日もこの暗い食堂に入つて、私は此佛國の革命當時を想起し、且つ想像せざるを得なかつた。革命又革命、朝まで戴いた王冠に人としての幸福を集めた其頭も、夕にはギロチン臺上の露と消えし過去、幾千回の榮枯盛衰、その戦亂の當時に於ける貴族或は富豪の幾百萬、皆其生命より脱せんが爲、かゝる豈尙暗き地下室に恐れてあへぐ咽喉に尙、其生を希ひつゝ、食を求めしか——。端なく起つた此追想は陰慘にして而も興味をさへ感ぜしめる人間性の矛盾を考へず居られない。

夕食には、かねての約をふんでM、Nの兩博士が迎へに來られた。丁度仕度の出來上つてゐた私は、すぐ下に降り、一番後になつたK夫人を待つて居た。やがて打揃つた一行は、シャンデリゼー公園内の料亭に着いた。此處は中々料理も凝つてゐるタブルドートも普通の物ではない。メロンも中々贅澤に其他の果物と共に、幾皿もく盛上げて出てゐた。アルモンドの生なのは殊に珍味で、N博士はしきりにそれを喜んで擲られた。

鬱蒼たる此森林中の噴水に映える電燈の影涼しく、提灯の様な形さへ見えた。庭前に散在してゐる食卓には、豪奢をてらふ婦人の影が去つては來り來つては去つた。すつかり肌を現はしてイヴニングドレスの婦人の傍には深々と毛皮を巻いた婦人、帽を被る者被らざる者は相對する男子は、胸も襟も甲冑の様なワイシャツに燕尾服——

いつもかういふ群集に感ずる様に、此處にも亦日本の友禪模様の佛蘭西縮緬に装はれた婦人服の多くを見た。

七月十三日 晴 やゝ涼し

今朝は勉強して早起し、ブルバードのアパートを見ようと丁度昨日から泊つて居る百合子と湯淺さん同道、其處へ行く。所はブルバード、ペレール四十七番のアパートなのだ。見たところ中々しつかりした石造の家造りで、落着いた門構へだ。入つて名を云ふと丁度其處に永年住んで居られる近藤さんといふ天才ピアノリスト——此人が、まだ起き立てか、或は案内によつて起きたのか——。

「かまひません、こちらへ」と、いかにも女性的な圓い艶のある聲で、上からしきりに聲をかける。そこで失禮して其お部屋へ上つて行く。大きなピアノの上に掛かつてゐる日本畫の掛物、大きなく佛蘭西人形が二つも置いてある——。日本趣味澤山の部屋の中に其人は、まだ若く女性らしく、而も少し甘い調子であつた。種々、此家主の因業な事や、メイドの事など、かなり細かに話される。そして我々の借りる部屋は、更に其上の四階であつた。五室を備へた此室は、古風に近代式でない古びさと、のびやかさを持つてゐる。何しろ、部屋敷が多いので、誠に好ましい。壽江子の居間になる様な部屋さへあつた。然し、あるじは餘り古くさく、且つ暗いと云つた。それに反して私は、かなり氣に入つた。百合子やなにかも大満足で直ぐ決める様にと云ふ。そこで、明日にも引越しすることを近藤さんに話し、種々手續きを頼んだ、同氏の談では此處の家主が非常に貪慾で三ヶ月極の前金でなければならぬ事、契約は油断なくする様にとさへ付け加へられた。免に角、我々大家族が住み得る程の室に、只獨り陣取つて好きなピアノに精進出來る近藤さんは幸福な人だ——と思はざるを得なかつた。



それにつけても——あゝ！

百合子と湯淺さんは、これもまた大乗氣、直ぐ引越せる様に此部屋に入用の品物を買ひ調へるといふので、デパートメント、プランタンに行く。眞先きに目に付いたのは山の様に積上げてある洋服地——一寸、ボイル風の物や或は木綿物の何れにも友禪模様が多分に配せられてある事で、目の悪い私にもモスリンかと思はれる程、似通つた模様なのだ。買ひに来て居る多くの客の服飾も、外套の下からのぞいてゐる胸元にも、やはり其配色が鮮かなのだ。例の通りエレベーターで上の食堂に昇る。一階毎に止められるのが一寸氣持が悪い。然し、流石にホテルの貧弱なそれに引替へ約二十人位入れて上下して居る——。

今度の此旅行で私の進歩の第一は、此エレベーターに乗れるやうになつたことで、これが若し出来なかつたら——と、つくづく考へる。

食堂へ行く——。此處は故國の三越の様に、無暗に廣くなく、こじんまりとして落着いて居る。丁度私の腰を掛けたテーブルの天井は高いドームになつてゐて、見上げた私の目には廣やかに愉快だつた。雪洞めいた、電燈が處々に取付けられ是にも亦、友禪模様の花鳥が畫かれてあつた。定食を命じて家族一同が畫餐を済した。此處にも亦故國に見られない物靜かな給仕振りを見た。此處は婦人のみだつたが——。

只、食後の水菓子は案外貧弱で、チェリーも酸味が多く、桃も案外固くてまづかつた。たゞ其盛られた籠が、故國でよく見るあの黒い手の附いた籠に、苺の葉をいつぱい敷いて、其上に盛られた色彩の快さと懐しさが、私の心をうつのみであつた——。

### 七月十四日 晴

早朝西野、宮島、鶴見三氏來訪の旨を、まだ床から出ない耳に聞いて、あはたゞしく起きたわれ／＼は、私は例の通り髪も結ばずも顔只マツサージしたぎりで——

眞先に、あるじが下へおり、次に私も、下の客間に下りて行つた。紹介によると、鶴見さんといふ方は、やはり醫博で、大使館附の方だそうだ。五十近い、がつしりした其人の風貌は、中々自我もつよく其代りやり手らしい人に見えた。來意を聞くと、「今日早く大統領先立ちで、この「エトアル」の下で大觀兵式が催されるといふ事で、皆早くから出かけて來たら、何か急に差支へが出来て、やめたといふんだ。あてが外れたわれ／＼は、とうとうこゝまでやつて來たんだよ」といはれる其人々の胸には成ほど勳章のはなやかな色彩がかゞやかしい——。

あるじも、昨今は、レジヨンドノールの略章をつけてゐた。私はふと此間からいろ／＼宮島さんにもおせはに成つてゐるし御飯でも——と思つてゐた矢先なので口を切つて見た。

「いかゞでしょうか かうして丁度御出で下さつた序につまらない御晝飯でも——」とあるじを顧みた。

「ウン、それはいゝだらう」と一同大賛成でそのまゝ——私は單に着物を代へたゞけであるじと共に公園内のレストラン、ブルニエルへ伴なつた。

此夕もかなりあついで庭前に卓を並べたタキシードの紳士や半裸體の婦人などが不相變酒盃をあげてゐた。こゝではオードブルより更に前の海老の鹽ゆでのを二つ割りにしたのが出て來た——故國の車海老位なのだ——淡泊なのを好む私の口には殊に美味かつた。しかし此頃節食により著しく健康を増した私は是も亦十分の量は取らなかつた。

引つゞいて海老のマイヨネズに例のクラッカーわりと鈎の手なりの細い金屬の棒が着いてゐた。何しろ日本人は皆食慾が少いと見え此海老を平らげる事は誰も六ヶしかつた。殊に私は僅かに海老の缺のついてゐる太い足の一つをたべただけでつた。

次に「ハム」が出たがこれは實に美味かつた。

フィンガーボールにこゝではレモンが浮いてゐないのが物足りなかつた——一寸した事にもかうして贅澤になる——恐ろしい事だ、——かうして食物の豊富な——珍らしいものゝある度々私は逝きし彼の面影を思ひ出さない事はな、——

彼あらば此海老もはた此肉も満ち足りぬとはいはてあらんを

歸る時小さい花の一束をメイドが私にだけくれた。宿につくとすぐそれを靈前に手向けただけで物足りない旅宿の不便さを思つた。

午後四時頃から更に草間夫人のお茶によべれ前約をふんで、かの三博士のお迎へを受けた。こんな事は故國ではあまりあり得ない事だ。何しろ斯界ではいづれもソウ／＼たる博士たちばかりだもの——私は此いかにも平等的な且同國人同志のなつかしい態度がうれしかつた。草間氏の家はかなり立派なアパートで宮島氏が其一室を領して總て一切のせわを草間夫人の手に一任されておられるらしい。特に應接間は中々よく整頓され、兼てはなしに聞いてゐた小さいブリマドンナの令嬢が出て來た——見た處八九歳位の——色の淺黒いが一寸目尻の下つたのが無邪氣にあどけなさを彼女の上に加へた。肉色の絹のドレスの裾みじかに薄い同じ色のスカーフをかけてゐた。

一巡あいつがすむといよ／＼此小さいピアニストを煩はす時が來た。最初は中々動きそうもなかつた彼女も皆

のすゝめに立ち上つた、——ざらりとスカーフをぬいで——何しろまだ足が届かないので故郷の家でつかふキヤタツのようにたけをのばしてピアノに對した。何しろ年こそ幼けれ既に公開の席上でさへ演ぜられただけあつて中々鮮かな手ぶりだつた。

三つの曲目の中最後のは私にはあまりわからなかつた、がしかし此小さい令嬢が音譜なしに彈奏する天才には驚歎せざるを得なかつた。嗚かし親ごさんたちは此一粒種の將來に多くの期待を持つておられる事だらう——どうか其慈愛を裏切る事なく此海外に我ら日本婦人の爲世界的のブリマドンナたれ——。

此席上で更に私は西野忠次郎博士の猷身的の尊いはなしを聞いた。それは同氏の教へ子で慶大醫學士に成り伊太利に留學した人がはからず其地に病ひを獲てそれが又不治の肺患なのだそうだ。

「伊太利には唯一人の日本人でしかもそつういふ大病人をおいてはどうしても歸朝出來ないように思へて私は船の旅行を決心しその人を伴ふ事にしました。」

「あゝ、それでこそほんとうのおいしやさまです。どんなに其人は難有かつたで御座いませう、ましてその親ごさんたちは——」

かういひつゝ私の胸は激しい感激にふるへた。

#### 七月十六日 暑熱烈し

早朝からあるじは西野博士へのお土産を買ひに出かける。この日の炎暑實に烈しく、大陸的の暑さはまるで船中の熱帯地方通過の時のとほり、故國に於ける暑氣と全然趣きを異にして、風にあたると却つて心持が悪く、戸毎皆

扉を閉して熱氣を防いでゐる。

やはりこゝへ来ると、何といつても四面海を繞らしてゐる我國の風は實に涼しい——薄暮、湯あみ後の涼風——實に涼しいのだ。けれどこゝでは只々焼けるやうだ。汗は出て直ぐ發散して水分は残らない。丸で大地は焼けるやうでむつ／＼といきれる。

お晝一寸過ぎ、あるじは、外から歸つて来てかう言つた。

「今日は自動車の方で斷られた——そんな近いところはお歩きなさいといはれて——こんな事は日本では聞いた事がない。車屋の方でお客を斷るなんて——然し、買物は大變良いのがあつた。それは古い／＼本當の昔の革表紙の立派な本に、うまく酒道具を入れて、一寸見には本とはか見えぬものだ——どうだい、いだらう」と開けて見せた。それは全く故國などには見られない精巧なものであつた。

「それぢやあ今夜、西野さんが立たれる時には、之を持つて家内總出でお見送りしませう」

私はかういつて、百合子にもそれを知らせ旁々國男と咲枝をやつた。それは一つには私共の住居を、いよくかのアパートに移さうとするには、どうしても別に若い者たちの居處が必要なのだ。この意味に於て百合子に彼等と相談をさせ、二つには西野博士を見送らんがため知らせのお使者でもあつた。

今日は何だが私も、昨夜の疲勞で歩き度くもなし、またあるじも用事が山積して見送りする時を得難かつた。然し私はかの病者を看護しつゝ、歸らうとされる博士の心情に同情したので。「何でも送らないでは——」かう思つたので、時刻を見計つて少し早目に行かうと、先づ日本人會で、夕食をすませ、それからまだ早目なので、トロカデイロ——之は博覽會の遺物——の一端を見たが、何しろこの日の暑さまるで昏倒しさうなのに、石畳を歩く私の足

は、重くだるく、草履を踏むにも尙、重さを感じる位だ。健康なあるじは齒痒ゆさうにつぶやいた。「折角こんなところへ来ながら——」と、然し私は全くこの景色の勝れたのより、體のたるさに堪へなかつた。あるじも結局私の健康を犠牲にする事の不可能な事を考へ、遂に割愛して西野氏の見送りのため停車場へ行つた。

なる程、彼女が注意した通り、東京驛の見送りなどはちがひ「社交服でも着ては——」と思つた私は餘り吞氣すぎた。宏大なこの驛には、人の往來無暗に盛んで、盛装してゐる人など見受けられなかつた。

誰か知るかくたのしげに笑むわれの胸にみなざる涙ありとは

躍り上り／＼て喜はん彼あらぬ今エトアールを見し

夜なればわれ人に伍してたのしげにダンスも見たり涙する目に

目の前のたのしさに人はわすれんとす汝かなしみそ母つねにあり

はなやけるこの祭りの夜しみ／＼と高く去りにしわか子を思ふ

### 七月十七日 暑し

午前中、宮島、草間兩氏が英國へ立たれるといふので、お嬢さんに何か上げ度いと色々トランクを掻き廻して夫人から壽江子にお土産にと贈られた刺繍の立派なハンドバックを持たせて若い連中を暇乞ひにやる。聞いて見ると家内中で、ロンドンへ立たれたさうで、一週間位で歸佛の由だつた。

午後百合子が一人でポツツリ來たが、それは神経痛が顛顛に起つて、大變氣分が悪いさうだ。「温めて見ては——」といつても、どういふわけか決してきかない。そこへ湯淺さんが來たので大喜び日本人會で食事をしようと思

んなして出かける。湯淺さんも一緒だ。

國男夫婦の室だけは、後に住居が決まり次第引上げる事にして遣して行く。

兎に角この四五日の暑さは、殊に烈しいので、豫て借りる事に約束をしてゐたアパートに、トランクと我々だけ兎も角行つて見ると、やはりこの古風の建物はしつとりして涼しい。殊に感服するのは、この國人の電燈に對する節約ぶりで、この玄關のベルを押すと暫くついてゐて、直ぐ消える。エレベーターもそのとほり、手洗ひや何かも、總て此式で非常に輕便だ。かういふ所に佛國の勝れた所を見る——家庭的に節約な——

その日も石造の建物の奥には、冷やかな空氣が漾つてゐて、街路の酷熱を遮つてゐる。そして、貸家として我々日本人の考へるそれとは全く趣きを異にしてゆつたりとしてゐる。それは全くホテルで何事もチップだらけなのに反して、この貸家の一室毎に、立派な家具、豊かな裝飾、それは全くアパート式でなく、どこまでもルイ式の美事な家具調度は、異議なく私を喜ばせる。それは實に日本に於ては滅多に見る事の出来ない家具什器附きの立派な貸家なのだ。私は是だけでも充分満足出来るやうな氣がする。おまけに、此處は便利でもあり、騒々しくもない屋敷街なのだ。實に洋館としては、私に是位、氣に入つたところは今迄になかつた。やつとこれでバリーへ來た甲斐があるやうな氣がする。

西野博士への土産物は、小野さんといふ大阪の人が、丁度同じ船で立つといふので、この人に託す事が出来、大仕合せだつた。只意外に思つたのは、この人の話に依ると、此國人は、節儉過ぎて、さもしい事が誰にもよく感じられる。然し、スエズや、ジュネーヴは英語もよく通じ、何しろ世界人を相手の國なので、少しも旅客に不便と不快を與へないさうだ。何しろこのフランスでは、少しでも多くの金を銀行に預けてであると、それが保護預けであつ

ても色々の事を云つてだん／＼減らして呉れる許りだと憤慨してゐた。

「やはり國男達の留學には英國が良いらしい。何しろ、松平大使が居られるのだから——」

と私の心は彼等のため堅くかう決心した。

今日はお隣りの建築家二人が、一時他國へ行かれるので、その送別の宴を開かうとあるじが二人をつれて、夕飯を饗した。それは或公園の中の料亭らしい。

七月十八日 晴 暑し

「金は黙つて出せ！ 世話はやくな！」是が現代思想の断面である。

金——それは此一字にのみ執すれば、實に卑しい事であるのは知識階級の誰でも、あまりよく知りすぎたことだ然し、その卑しい金を貯へるまで、いかに其世俗の忌々しいてあひにも頭を下げ、又、いかに親達が食ふものも食はないで——といふことに思ひ及ぶ時、慈悲深い親達は、どうかして此いやな思ひ——生活の爲に頭を下げないでゐられない。現實の世界に逢着せないではゐられないであらう我子等の將來の生活を——己等が受けし以上に受けるであらういたまひさを——思ひやらすにゐられない。ましてそれは、身體の弱い妻があまり經濟的に出來てゐない時——其爲に我々は、我々の死後に於ける生活をして安全ならしめ、更に己等の築き上げた資産をして皆滅の憂き目に逢はせたくない。

それで「かうしろ、あゝしては——」との老婆心も起るのだ。

然し、それは眞に我子を愛するからなのだ。日本舊來の道德も、かく親をして子を愛せしめ、子も亦、此心を推

載して益々家運の隆盛を圖つたのだ。

何事ぞ！ 歐洲文明！ 何事ぞ！ その道德！ 私は今、この歐洲文明の中心にあつて更に深く東洋の道德を憶はざるを得ないのだ。

餘命幾何もなく、而も病弱であつて、白内障眼に視野の楽しみさへ奪はれてゐる。それなら彼の歿後何故すぐ後を追はなかつたか、それは只、母まで非命に死なん事は、彼の死をして世人誤つて狂死に伍せしめんことを恐れたのみだつた。

母として彼に盡すところ、乏しかりしこの母はせめて残れる我子等の爲、最善を盡さんと努力する心持で、漸く死地を脱し得て、此歐洲行脚を思ひ立ち、せめては彼の遺骨を奉じて彼を供しやる心地に、至る處、花を手向け、菓子を供し、彼の靈を慰めせめてはわが死後、彼の傍に母として愧ぢざる靈を以て、合致せんと覺悟したので。けれど四十餘日の海路は、意外に私を疲れさせ、更に上陸後のホテル生活の半月餘、これも亦全く疲れを癒すことが出来なかつた。たゞ僅かに、南洋の熱氣に爛れたあせもの、漸く乾きつゝあることゝ、眩暈の幾分は軽くなつたことゝ、胃腸の工合のよくなつたぐらゐだつた。

此病軀を持って海路四十一日、歐洲を見聞しようとした私は、たゞやさしい我子等の抱擁をのみ期待し、喜んでその腕の中に安らかな快樂をさへ夢想したので――。

然し、それはほんとうに文字通りの夢だつたのだ。

三十の壯齡をもつ二人の女性の獨身生活、それは全く私にとつては、不可解の内面的心境がある筈だ。

私は今この佛都に来て言語の不自由を感じるると同時に又、露國に遊學して年餘に渉る生活を続け、まして病院に

入ること三月、尙絆々たる餘裕を持って生活し得る能力には、感服せざるを得ない。然し、また私は一面、彼女等の生活が絶対個人主義でもあり、排他的のものであるかも、ほゞ察する事が出来る。

自己を延ばさんが爲には、何物も憚らない――私は若しかういふ主義が存するとすれば、斷然排斥しないではゐられないのだ――。

かの露國の文豪、ト翁の道德觀――人類愛――これこそ我等の双手を舉げて賛するところであり、排他的個人主義――自我本位の個人主義――是等は、私の絶対に排せんとするところなのである。

此正しい道德の見地に就ては、實に親と雖も、子と雖も、決して一指をも觸れしめない嚴たる千古の道德があるのだ。

私は此事に就いて一夜、我子等と共に徹宵、論議したいと思ふのだ。

けれど今の私の健康は絶対に其餘地のないほど疲れ切つてゐるのだ。

私は今、丁度サロンに來た彼女達の一團を外に今日引移つた此家の壽江子のベッドの上で靜かに此事を記し、更に又夜に入つて考へようと思ふのだ。

あゝ、大にして聰明なれ、わが子よ！

悲しい哉、彼を失つて、涙未だかわかず。かゝる時も尙、彼在らばと涙するわが目の前に、其面影は彷彿としてあゝ、いまわが座する處は佛國か？ 或はわが故國か？

視野蒼茫として暗し――。

七月十九日 暑し 午後雷雨

此國に寒暖計のないことが不便だ。日本で、かねて想像したとは違ひ、機械的設備は獨逸を除く外は、あまり此ヨーロッパには完全してゐないらしい。

何しろ此頃の暑さは中々ひどい。多分華氏の八十度以上にはなつてゐよう。只乾燥の度がはげしい國だけに、汗はかいても直ぐ乾くのだ。それで大してぐつしより汗ばまない——今日も午前中の蒸し暑さは、しみじみ故國の郷里「福島縣安積郡」の清涼さを想起さすにゐられないほどだつた。

然し不思議なことに、此地では暑ければ暑いほど硝子戸を閉めて日光を遮る——中にはシャッターさへ閉めてゐるところがある。

ホテルの暗い食堂については、嘗て書いたことがあるが、矢張住宅でも其式らしい。

然し今日は恵まれた日で、かなり劇しい雷鳴と共に、故國の夕立と變りなく俄かにつよい雨の脚が窓をうつた。けれど見下す街路には、慌しく駈ける下駄の音、馳せ違ふ人の足音もない——たゞ平然とオーバーさへろくに着ないで行き交ふ人々が、タクシーに乗る數のふえるくらゐ——甚だ呑氣な有様だ——

これも故國の五月雨頃を思はせる一つの情景である。定めし今頃はもう雨期も大部過ぎて暑い／＼暑熱に夕涼みの門口が賑ひ、氷屋の店も客澤山の事だらう——

此處にも亦私は、かの鹿取丸の一夜、餘興にと云つて、A氏が氷賣りの鉤の音を眞似て大喝采を博したことが思ひ出される——

あの船の人達も四散して今頃は何處に居られるだらう——

上陸後遽かに百合子に扶けられて投宿してからホツとした安心から私は、とう／＼今も疲労がはつきりなほらなのだ——足のひどい浮腫と節々の痛みが——その上更に又、今度の出来事は、いかほど私に大打撃を與へたことだらう。神経性に劇しい下痢をさへもよぼす私が、どうして此大きな刺戟に平氣でゐられよう。

なるべく事なかれ主義に安んじてゐやうとするあるじ——これが又彼をして頑健なる體軀を保持し得られるのであらうに——私は此絶對絶命の心持をどう明かに、且、悉さに語り得ようか——？

そうだ、もう仕方がない、誰も頼ることは出来ない。只、自己の冷靜な理性に依り、あくまで彼を愛し得る母として又彼女をして——大過なからしめる外はあるまい。

百合子は佛國に國男を置いて死生共彼の運命にまかせ、彼等夫婦をして自由の生活を營ましめるのが至當だと云ふ——私も一時はそれに同意したが、更に彼の病弱な點について深く悲しみ、深く憂へ、若し私の死が彼を救ひ得るものであつたなら——とさへ思ひ迫つたのだつた。

然し私は今一度自己の生命を賭して、彼の爲に最善を盡さうと奮起した。

私は靜かにいろ／＼考へたかつた。それで今日は初めて住んだ此家に、只一人残つて晝飯を攝ることにした。

各自は、それ／＼レストランに行つた。

英男が生前「お母様！人は只生きんがためにのみ食ふのです。食はんがために生きんとする人を見ると淺ましい氣がしますね」かう云つた彼は、よくそれを實行した。與へられる何物にも、一言の不平も云はなかつた。私の今の胸中には鮮かに其聲が響いた——

その通りだ——私も、はつきりと今彼の言ひ遺した心持を感ずることが出来る。晝時を大部過ぎた私は、只一

人ほんとうに文字通りたゞ一人此佛國の假の宿に居残つた——。

昨夜、百合子達が残したシチューの残り、パンの少量、僅かなバターの残り——レモンの切れ端に砂糖を入れて私はそれを飲物にした、湯ざましのこれも残りを入れて——。

みんなの去つた後の食堂は森閑として、街路に起る騒音の外閉めきつた此一室は、只静まりかへつてゐた。

私は、眞に静寂を楽しむ——かういふ心境の中に何の煩しさも不平もなく、此乏しい食を攝つた。然しそれは今の私にとつては最もふさはしいものでなくてはならない。

誰にも妨げられず、私は安らかに今彼と共に在る氣持がする。儉素な生活を喜んだ彼は、今微笑して相對してゐる様な氣がする。

今日から時間ぎめの女中が來た。中々しつかりして、且此國の婦人は、いかにもお婆らしくない——しとやかな物腰は、ひどく私に好感を與へる——。

#### 七月廿日 晴 驟雷雨鳴

今日がかねて呼ばれたデルスヌスさんの招待日だ。女中が來たので、今日はゆつくりすると云つて、百合子もまだ來ない。

彼女も近頃著しくヒステリックになつたことがわかる。それは病後の疲労が、さういふ風にさせることは勿論だが、自分は一寸もさう思つてゐないし、又思ひ度くない事だらう。然し兎に角女流の中に、かなり評判されてゐるだけ、彼女の言動は其弟妹に影響する事甚大で、そしてそれが萬一悪い影響であつたら其苦難の焦點は母親が受け

るのだ。

然し、私は此病軀をひつさげて、かく外國に出たのも、たゞ少しでもかの苦境から脱しよう——かう思つたのみだつた。やるせない此心は、せめて一生涯の希望の一つだつた此大旅行によつて忘れたい——。

かの愛兒を失つて過路の旅に出た故人の例にならつて——金が何だ——物質が何だ——かう思つて安らかさを望んだ私は、又此處にも幻滅の悲しみの數々を味はつた。

あゝ、さうだ、遁れようとする——それにこそ、今でもいろ／＼苦難が湧いたのだ——英男の時——それもさうだつた、今も又か？ 私は自己の心に反問する。

あゝ、これが私の不徹底な意地ないところなのだ——

よし、もう避けまい。そうして家の者に對してたゞ言葉のみに由る訓戒は止めよう——。

躬行だ——實踐だ——儉素な生活——精神的の生活——一文も働き出すことの出來ない私には、これが至當だらう。

私は今、此巴里のアパートに、生れて初めての經驗を味はつた。あゝ是でこそ眞箇の西洋建築の意味を知る事が出來るのだ。それは丁度、かの西洋畫のボンチ繪に感ずる様な複雑さ——其通りのコンブリケートな頭腦を持つものにして初めて能く設計されるプランなのだ。

其便利さ、重寶さ、人手の要らぬ事、清潔にして而も儉素にそして尙華美なる事——

電燈は總べて二箇所づゝスキツチがある。一つを押せば一燈だけつく、更に押せば全部がつく。大抵、何處のレストランでも、中央の大きなと、更に其周圍に小さな三四燈が取巻いてゐて、客の殖えるにつけ、追々全部をつ

けるやうになつてゐる。

私の居る此家も、入口のスキッチを上げれば、電鈴が鳴り門番は其室から電氣装置でドアを開くと直ぐ電燈が消える。エレヴェーターも其通りだ。或時間を過ぎると、ひとりで電燈は消えるのだ。是は此住宅のみでなく何處も——盛場のレストランでさへ此電燈の節約ぶりを見るのだ——。

試みに薄暮の巴里市街を俯視して見ると、其處には只、轟々たる自動車——の騒音のみで輝かしい一つの燈光も屹立する其無数の窓から放射してゐない——。

そして此多くの建物の窓の中で、此貧弱な我々の窓から、まづ第一番に微かな電燈の光が、街路を照らすであらう——

貧しくして而も濫費を敢てする國民よ！ 私は自己に對してかう叫ばざるを得ない。

私は自ら反省して考ふる事が深い。

然し、私の此考へは、我々家庭の誰にも餘り歓迎されない事であらうことを知つて私は、今、僅かにかく記すことによつて、自ら満足するのみだ。けれど歸朝したら、これも一つの大きな話題になることゝ信ずるのだ——。

扱、愈々時間が迫つて、晚餐の頃になつた——。

八時にお出で下さい——私も渡佛してから此夕飯の非常に遅いのに驚いてゐたが、矢張今日も其時刻だ。しかしまだ空は明るく、黄昏であるべき街路は、自動車にも燈を見ない位だ。

例の通り、仕度しようと久し振りに入浴する、此の浴槽の瓦斯が、又非常に便利に出来てゐて、一寸我々には否あるじや國男にさへ其設計が判らない程、最新式なのだ、かういふ處は馬鹿に又新らしい——。

到頭我々には、どうしても考へがつかず、下の近藤さんを頼んで見て貰ふ。すると雑作なく湯が出て、誠に具合だ。

然し、又入浴後の變調を恐れて私だけは、湯に入らず、洗面だけして珍らしく社交服に着更へて、今出掛けようとする、電話のベルがけたましく鳴る——。

丁度、午後四時ごろから來てゐた咲枝が出て聴くと、「お父様からでもう出掛けるやうに——お迎ひには、デルスニス氏と黒田朋信氏が見えて居る——」といふ。

大急ぎで私は仕度を了へ階下に來た兩氏に、挨拶もそこそこ玄關の自動車に乗つた。行く先はかなり長く、やがて其料亭に着いた。

日本なら凝り家——とでもいふ様な風に見える此家は、餘り上品な家とは思へなかつた。然し料理は中々珍らしく蒲鉾の様なものにジュイスをかけたのや、飲物は四種類ぐらゐ出た。

後から出たサイダーや、蒲萄酒、蘭の花匂ふ菓汁、終りに濃い緑茶さへ出た。

私は總べて少量づゝを拂つた。餘り食べ慣れないものに用心して——

かうして食事が済み、暇乞して立上ると、更にもつと面白い處で、お茶を振舞うと云ふので、折柄涼風だつた夜の道を長く——車は走つた——

後で聞くと其處は郊外だつたさうだ。是こそ眞に歡樂境とも云へるだらう、無數のイルミネーションの色様々に五彩まばゆい中に、私の覺えない視界の中には、とても入りきれない大群集が、各自に其卓を擁して飲み、且語り喋々嗚々殆ど異性なしの卓はない位だ。尤最端には折々起るピアノの音と共に、ダンスのどよめき、觀集のさゝや



き——それは輝かしい周圍に比して決して騒がしくは響かなかつた。是は野外で音響が四散するからでもあらうが然し又此國の風習が何處にも、神經質なざわめきや騒音を耳にしないことが此處にも亦現はれたのだらう。此せよこましい事のない——賑はしくて而も喧騒に陥らない事は、流石に——と我々をさへ感服せしめる——。

然し私は五彩絢爛たる此遊覽地の一隅に、オレンヂエールを吸りつゝ、泌み／＼感じた事は、「巴里は決して青年をして學問せしむる所でない」といふことだつた。青春の血湧き易い彼等の胸に、一方には徹宵是樂しむ歡樂の聲を耳にし、更にこれに克たんとする自決心に依つて、強いて學に邁進せんとする此二重の努力は、青年をして其疲勞をさへ倍加せずには置かない。

佛國は戦後の財政を維持せんが爲、自國の青年等に堅實の風を吹込む違なく、國を擧げて、歡樂の巷とし他國の富を吸収しようとしてゐる。人類發展の上から見て私は、此風を指彈せずにはゐられない。

佛都は遊ぶべき處で——文字通り遊學するのみ、決して研學すべき國ではない——。私はかう感ずること益々深く國男女婦も英國に伴ひ、かの地の堅實味を學ばせようと、今それ／＼準備中なのだ——。

七月廿三日 晴

今夜は此國に何か演習があつたとみえ、寢耳にも約五六十騎以上の馬蹄の音がかつ／＼として一寸間をわいては

五回ぐらゐ深更の鋪道に響いた。

丁度午前三時か四時位かと思はれる頃、拂曉の静寂を破つて鐵砲の音が響いた。それは小銃か或は機關銃か、慣れない私の耳には其區別は判らない。然し音がさほどでなく而もパチ／＼と間斷ないのは或は噂に聞く機關銃の音か——。

異境に在る身には是も故國の演習の様な心持ではゐられなかつた。例の通りいろ／＼の考が眠らんとする私の目を覺ました。何しろ今日はどこか身體の具合のよくない爲、晝飯も宅でつくらせ、更に夜飯もその殘餘で済まさうとさへ思つた。たとへお粥でも何でも、異境に在る身には家族だけ一緒に——とかう情味津々たることをのみ私は望んだのだ。ところへ、めづらしく國男女婦が訪れた。この年寄に何でもさせて——といつも終には腹立にかはる程、不平がちになるあるじも、今日は彼等に買物をさせたり、いろ／＼不足がちの品物を買つたので非常に機嫌がよくなつた。

水野夫人から手紙が來た。二重封筒に入れ、上には御主人の名があつて大使館氣付であつた。夫人の手紙では本野母堂が孫の顔が見たいから一寸行つて來ると云つて、皆が大慌ての中にさつさと立たれて、もう九月には歸國の豫定だといふこと、丘さんの御次男が新婚したといふこと、それに母堂が愛國婦人會の副會長に重任され、宮様に御挨拶に上るなど、とてもお忙がしい。然し忙中閑を得て親子三人連で日光から鹽原へ旅行したとか或はするとか相變らず多忙を極めてゐられる様子、しかし元氣旺盛だから安心して欲しいといふ趣意の便りがあつた。

何でもきいてみると此間のひどい暑い日は、故國でも氣温百度に近かつたさうだ。道理でその日の暑さは、かの船が熱帯を通過した時の様に熱風が息苦しくさへ感じた。東京ではいくら暑くても何しろ四面海を廻らす島國の有

難さで、いくら金を溶かすやうな酷暑でも、一風呂浴びた後の夕涼み、廣袖を通して吹く風は、眞に晝中の暑さを忘れしめるものがある。

ところが此大陸の暑さは——息が苦しいのだ無風でデリ／＼焦げるやうな暑さ——然し乾燥してゐる爲だらう、此汗かきの私でさへ故國のそののやうに背の汗の流るゝ感じはない——従つて思ひの外咽喉がかわかず一日にビール瓶に二瓶あれば済む——よくしたものだ、然しかの神経性の腹痛は全く止んだ。

下船して以來、天ふらを食べてさへ何ともない——是がまあ此大旅行の一つの收穫であらう。けれどもかの豊太郎が朝鮮征伐を思ひたつて、其主將として自身渡鮮しようとした時、かの有名な曾呂利新左衛門の譬喻的諫言により遂に思ひ止まつたといふ——

かく蓋世の英傑であつた彼さへ尙、省慮するところがあつた。

まして卑小の私——それがこの冒険を敢てしたのだ。苦惱骨を刺すのも覺悟の前ではないか——  
靜かに神靈を拜して更に感無量ならざるを得ない。

七月廿六日 晴 やゝ涼

今日は、かねて電話で三菱商事の支店長が、何か建築の参考になるものを取揃へて置いたから見に行つしやつては、と云ふことで早速参りますと答へたあるじが、どうかして行きたがらない。そこで私はナポレオンの墓参をしながら、是非一緒に立寄つて其約を果させたいと思つた。

此日はめづらしく快晴で、その宏大な寺院の入口から續いたかなり長い鋪道に、照る日の光りは目を眩するほど

だつた。

勿論、それは光線よけの眼鏡もかけたが、どうかして私は眩暈を感じる程輝々たる光りが、眼底を透して脳まで透徹するやうに感じた。「あゝ、やつぱり脳が悪いのだな、若しかしたら是は腦膜炎の前兆かも知れない。こんなに頭に光を感じることは今までにはなかつた——熱帯を通つても——沙漠を通つても——」かう考へると私は、もう院内をさへ見る氣がなくなつた。然し折角此處まで来て空しく歸るのも残念だ——。

よし、これも天命だ——行くところまで行かう。

かう覺悟した私は、もう躊躇するところはなかつた。

さつさと人混みの中を通りぬけ、相變らず我國の「履物」に吸ひ寄せられるやうに集る幾百の贖の前に、平然として歩を移した。

私は今此壯麗にして且、壯嚴なる此大伽藍に而して、そゞろに奈翁の偉大なる力——を考へずにはゐられない。各國の思惑を省慮して欣仰措く能はざる此大英雄をしてセントヘレナの一小島に、其最後の呼吸を終らしめたことは、我々他國人でさへ遺憾に堪えない氣がする。私は、他日更にこの強い印象に就て書きたいと思ふ。

明夜は近藤さんの案内で珍らしい夕飯を共にしやうといふ約束をした。奈翁の墓参後氣の進まないあるじを無理に促して約束を果さしめやうと三菱商事に行つた。其處は、昔の貴族の大邸宅だつたとかいふので、此建物も非常に大きく、且暗かつた。故國の瀟洒たる料亭のそれに比べて、晝尚暗い大邸宅は物凄いやうだ。

支店長は、追々打解けて自分の田舎家へ來て欲しいとさへ云つた。それは此處から餘り遠くない郊外にあるさうだ。

七月廿七日 晴 涼し

昨日腹痛の爲、服薬したが、かへつてさはつて、飲むと直ぐ胸がはつて苦しくなつた。

今日は、人をお呼びしておいて、「こんなでは心配なので、食事も朝から注意してゐたが、お晝頃の具合では、矢張、薬の爲のみの作用であつたと見え、午後からずつと、気分がなほり、胸がせい／＼した。

これでは良いあんばいに行けさうだと、ほつとする。

お晝頃あるじは、大使館から戻つた、何んでも曾禰さんに頼んでおいた書面の事と、明日の事を話しに行つたら偶然Mさんに遇つたので一緒にお呼びする事にしたとの事でまあ良かったと悦こんだ。

「人間と云ふ事を動物的に自ら解釋し、其處に何の懷疑もなく、安んじて己れの童貞も節操も自ら蹂躪して悔ひなき生活、かゝる人であつたなら、このベリー生活も安んじて楽しみつゝ——

それも年の若い中と、健康の中だけは——暮らせるであらう、然し、一朝そこに純眞なる己れを汚すに忍びず、又地上より一步足を抜かんとする——鹽的生活を考ふる者に取つては、とても忍ぶ事の出来ない不純さと、劣情の中に、己れを汚がすに忍びないであらう——

私は巴里に来て、今夜程、しみ／＼かゝる感を深くした事はない。

そして、彼等にとつては、ほとんど愚かしく馬鹿氣に見えるであらう、清淨の世界——精神生活の如何に尊貴であるかを、しみ／＼感ぜずにおられない——

Mさん、いゝ年をして、良くあんな事を體面なく云ひ得るものだと思つて、私は「あんまりですMさん——」と思

はず云つてのけてしまつた。さて、話は前に戻つて、この巴里通の案内した所は、ロシア料理「エルミターージュ、ルス」と云ふ所ださうで、例の通り、八時頃の會食だつたので、私の視野の及ぶところは、皆たそがれて、はつきりしなかつた、しかし、はいると直ぐ、玄關に出迎へたポーターの壯大な體軀を持つて如何にも應揚に、且つ町重な物腰は、ひどく、私を快くした。

食堂は長方形で、案内狭く、僅かの列はかならんでゐなかつた。

かうして、まだあまり込んでゐないので、人の後から、樂に通れて、私達は、一番奥の卓をしめた、M氏と、近藤氏が、私の向ふ側で、右手があるじ、更に、その右に曾禰氏を請じた。

實際なれた近藤氏は、ロシア語も自由であるらしく、種々とメモをくり返して注文された。

羊肉の串焼を高く捧げて、一人の助手が、それを蒸々しくぬいては客に供する、實にこと／＼しい——。

スープは、流石に油こくて、量が多い、私等には一寸多量過ぎる位だつた。

デザートに出た水瓜は、期待した程甘味くなかつた。その中に、此家獨特のロシアの貴族？の一團による、パオリンや、ポーカーが始まり、婦人の出る時は、その度々電燈が消された——踊り手だけを照らしつゝ——

物馴れた近藤氏は彼らの爲寄附の帽子を廻した——

七月廿八日 晴後雨

日曜でも、時間きめの女中が来た、そして、昨夜の洗ひ物も多いので、氣の毒に思つて、十フランを與へた、彼女は非常によろこんで、幾度も御禮の詞を、くり返した。

此國の習ひで、日の暮れるのが、非常に遅いので自然遅寝が続くので、今日は奮發して、朝早く入浴しようと、たつぷりお湯を沸かし、ぬるい中から入いつて、おひく、熱くなるにつれ、至極快くつかつてゐた。その中近藤さんが、昨日の挨拶に來られたが、どうしようもなく、あるじと話して歸られた。晝飯に國男夫婦が、メロンを持つて來てくれた。

それを晝飯のデザートに、賑々しく晝飯をすませてから、打つれて、ボアの森に自動車走らせた。見る度に、この森のいよ／＼深く、いよ／＼廣潤な事を感ずる。

今日も、皆んなして、池のみぎはに、車を乗り捨て、老婆の賣つてゐるパンを買つて、水鳥の群になげた。

對岸に群れてゐた白鳥が、それを見付けると、丸で水雷艇の様に列を成して、對岸からむれて來た、人になれきつたこの水鳥どもは岸の上さへ、平氣でくびをのべて、餌をあさるおもしろさに興に入つて、かなり時を過ぎた。

ふと、私はあとを振り返つて見ると驚くべし、そこには外人の大群集が我々を取巻いて――

流石にまの邊り見つめる事の無禮さを心得てゐる彼等は、この水鳥の群を見るに事よせて、心おきなく我々――殊に、この私の純日本式の服装や、髪形を仔細に見てゐたらしかつた。

殊に、私の履ものには異常の好奇心をそつたと見え、彼等は眼も放なさず、私の行動につれ、右に左に足元を凝視した――

これは外出の度々經驗することだが、今日は群集が多かつた丈、殊に氣が付いた。

そして、初めて目をとめて見る、我足もとの足袋、草履のいづれも前日のまゝだつたので、私の覺束ない視界のうちにさへ、かなり汚れて見えた。

「どんなの足袋は？ 草履は？ 人があんなに見てゐるの――」

「あら、随分ごみがつきましたわ」かう云ひつゝ自分の手袋で、咲枝は私の足袋をはいた。尙くり返して私は云つた。

「そんなにきたないの？ これからは履物と足袋は、いつも氣を付けませうね――」かう云ひつゝ眼の悪い私は、きれいな積りで、おり／＼汚れたのをはく自己を悔んだ。――

### 七月廿九日 雨後晴

この頃急に涼しくなつたので、硝子戸を閉めるせいか、誠に静かな時が出來た。之れなら良く眠れるだらうと、安心して居たにもかゝはらず、今夜はこの旅行以來初めてぐらゐる夜のしらむ迄、一寸の眠氣もささない――

とう／＼錠戸の隙間がしらんで來たと思ふ中、どうやら、眠れさうになつて來た。

途端「あつ」と云ふ自分の聲に驚くほど、私は更に、この努力に近い眠りから飛び起きた。

それは何處だか、はつきりしないが、何人だか判らない悪者に監禁され、然もそれがぐす／＼してゐると、命にもかゝはる事らしいが、如何しても逃げられない――

苦しさにあげた我聲に驚いて目が覺めた時は、滿身冷汗に襲はれてゐた――

こんな事は産後のほかめつたに覺えの無い事であつた。私はしんから、ぐにや／＼になる程、疲れてしまつた。もし、風邪でも引いたのかと思つて、更に體温を計つた、然し良い鹽梅に、平熱だつたので安心して、又少し、眠らうと努力した。

こん度は、胸にもぬれ手拭を當て、冷やした爲か、どうやら十時過迄眠られた。眼が覺めると、非常に空腹を感じて來たので、一寸起きて朝の軽い食事をつた。どうも矢張、頭がふらく／＼して落着けない。

これは昨朝の入浴がなが過た上に、それから直ぐボアの森へ車をかけさせ、歸ると又更に百合子が疲れた様子で來たりして、種々心を痛めた事がさばつたのかも知れない。

出立當時から、むやみに過敏になつて居る私の頭は、かうして又此處でも自分を苦しめるのか——百合子も病後、あまり巴里見物に無理をするらしい。何事もU女に信賴し過ぎる彼女を見る時私の心は痛む——書かねばならない——

見物しなければならぬ——然し、非常に疲れる——私は自己の病體にくらべて、如何に彼女の苦心するかを思ひ知り過ぎる——

ろくに醫藥も知らないU女に、なぜかう迄無限の信賴を感じ得るのか——

「お母様！ 自分に對して良くない事をした人でも決して憎まず愛してゐらつしやい、それは實に立派な事です」かう云つて囁やく如き、彼の聲を聞いた——

涙に滿ちつゝ、私は心にうなづいた。「さうだ——英男さん！ お母様もどうか、纏べての人にさうあり度い——然し、私が今彼女に對する感じは、絶大の親の愛の發露であつて、努力する必要の無い程大なる自然なのだ。私に更に彼女の爲に、全力を擧げようと覺悟せざるを得なかつた。

七月三十日 雨 冷氣

今日はどうしても、あの東京から持つて來た白い紋縮緬のスカーフが、汚れきつてしまつたので、みつともないから買つてやると云つて、あるじは朝早やく出て行つた。丁度、お晝頃大きな箱を二つ抱へて、大元氣で歸つて來た。

「あゝ良いのがあつたんだな」と、其の氣配を早くも感じた私は、さりげなく聞いて見た。「あゝ案外良いのが有つたんだよ」かう云ひつゝ、彼は一つの箱からボアを出して見せた。それは丁度、日本にあるのより一寸少さめの黒い駝鳥の羽根のやつた。そして房が長くたれてゐた。

「これ、かなりしたんでせう？」然し私は、この國のかう云ふ種類の物が特に廉價なのは知つてゐた。

「四五十圓？」「ウフ、ゝ、それなら賣つてあげやう」

かう云ひつゝ、得意さうに微笑む、彼の顔を見て、私はこの品が如何に廉價で買はれたかを知つた。「あゝその様子では、かうと、二十圓！」「もつと／＼安いのだ」「それぢやあ、一體いくら位なんでせう」「それはもう本當に安いよ日本の金にして五圓位なんだ」驚いた私は、又一方にはあまり安すぎる——安物を買はされたなど、失望せざるを得なかつた。なにしろかねてからこゝで買ふ毛皮はどうしても千圓位だと吹聴されてあつたからだつた——かう云ふ心持を見て取つた、あるじは、更に取つておきの大きな／＼ボアを出した。それは前のより大きさが三倍位もあつた。「これはかなり立派ね」と云ふのに被せて、あるじは又云つた。「これでもまだ驚く程安いのだよ」かう云ひつゝ持ち出した、それはふく／＼と肥つた黒色のボアで、丈も長く、羽根も充分であつた。私はそれを、又頸に巻いて見た。「あゝ大變立派に見える——」

かう云ふあるじの聲を聞きつゝ、私は心中に、こん度の旅行と、又彼の女に送るべき費用を考へた。そしてもうこれで辛抱すべきだと、あきらめた。

しかし、かう云ふ私の心の片隅には、洋服を一枚も着ず、日本服でばかり押し通してゐるのだから、せめて襟巻位は立派な物を持ち度い——

かう云ふ慾望も残つてゐた。

「一寸はこれも良いわね、しかし、なにしろ日本服なので洋装と對抗するには、毛皮の良いの位ある方が良いかも知れませんか」

しかし、夜に入つて、私は更にこの考へを斷念せざるにたづななかつた。

彼の靈前に、香を焚きつゝ、私は更に、自己を省りみた。

「さうだ、やはり私も俗人だつた。物慾に捕らはれんとしたのだ。」

之は、一つかねて覺悟通り、物慾に遠ざかつて、自から儉素の實行者とならないでは——

こうして、私は又彼の靈に導かれて、己れの贅澤に流れんとする心を抑壓し、一方又彼女に對する愛情の、益々大ならん事を希ふ。

守護の力——之を現實にする事こそ、彼に對する、なによりの手向けなのだ。

思はず合す掌の上に、私の涙ははらくと散るのだ。

八月一日 曇後晴

今日は、英男の祥月命日だ、異境にある身には何事も心に任せない。

外國には、花は澤山あるだらう、かう考へてゐた、私は總べてが、その期待を裏切る程、花も不自由だし、又部屋々々にあるなど、云ふ事も贅澤な考へ違ひだつたと思ふ程、儉約だ。

なにしろフランスなどでは三日保てば良いのだ、と云習はしてゐる程、花は古いのが普通だ、それで、昨夜からみんなに頼んだり、或ひは流石に、兄弟共が集まつて、それ／＼持ちよつて來た花を供へ、香を焚いて、みんなが變る／＼禮拜した。

私は心からうれしく彼の靈も如何に笑ましげに見てゐるだらうと思はれた。

そこへまた偶然、宮島博士が、草間さんと一緒に來訪、見事な花を持つてこられ直に靈前へ手向け禮拜された。

聞いて見ると、宮島さんの御長男も重病で、故郷に病臥してゐられるとの事——どうりで、この英男の命日に對して、感深き様に思はれた事も首肯される。

夜は、日本人會へ行つたが、あるじはどうも、日本食は腹具合が悪いと云つて同行を好まなかつた、それに反抗してゐた私も、今日あたりから、そろ／＼日本食にあきて來た様な氣がする。

なぜだらうか？ 私はこの己れの信念を裏切る——

己れの嗜好の變化に驚かすにたづなない、なぜだらうか——

あゝ何故だらうか？ 歐洲の風土がかくあらしめるのか。——

八月四日 晴涼し

午前五時起床いよ／＼ロンドン行の決心をなし所信を断行し様とした。

所信——それは唯、死生、命あり——と云ふ覺悟だつた——

いつもならみんなに明朝は早く来ておくれと云ふであらう。私も最う人に頼らうと思へなかつた。彼女等も又出掛ける迄来なかつた。

しかし出掛け様とする一寸前に國男は來た。「咲枝がゆふべも具合が悪くてお粥を食べてゐます」かう聞いて私は咲枝の弱いのが氣にならないではゐられなかつた。

しかし、そんな事を長く考へてゐる暇もなくメイドにいろ／＼入費の金や給料を渡してお母さんが良く成つたら又來る様にと云つて、あとの締りやなにかを國男に教へさせて出立した。かう云ふ時でも、私の心は國男に惹かされた——しかし之が姑息の愛と云ふんだな。三十にも成らうとする者をつらまへて——かう自分で我弱さを叱責しつつ、流石、日中は織る様なベリーの街路も、今は朝早やいのですつきりと良く掃除されて、涼しい風の渡る中をタクシーが急ぐ——短かい間だから、一等に仕様と乗つた車は、流石にタクシーの具合も良く、たつぷりした座席が二人づゝ向合つてゐた。

私達は三人だつたが着く迄、一席を残して流石ゆつくりした氣分だつた。

しかし、間もなく私は、この氣分をすつかり裏切られる様な事が起つた。

それは婦人用の洗面所の不潔さであつた。

清潔／＼かう云ふ事の標準でゝもある様に思はれてゐた歐洲——のしかも其の中で、最も優秀な所とされてゐたこのロンドン行の汽車中こんな事が有らうとは夢にも思ひがけない事であつた——それは恰度私が入らうとした

時すでに一人の使用者があり、漸く済むと又變る／＼二、三人の客を待たねばならなかつた。

なにしろ生憎な事に私の席はそこから甚だ遠く、もういゝ頃かな、かう考へて出掛ける——

外人の婦人席の前を通る。

直ぐ目の前の人立つて占領してしまふ、かうして、はてしない中に汽車はもう直ぐ着驛するだらう——氣がきでなくてゐると、あるじが——あゝやつと空いたよ、かう云ふので、大急ぎでかけ付ける——戸を開ける——まあ——どうだらう、そこはまるで洪水の様、水が戸口迄溢れておまけに、紙が長く／＼床を引いて入口迄およんでゐた。「一體まあ——この水は何んだらう？」

まるで足の踏みどころもない——私は呆然として外に出た。怒りに近いものが私の頭に上つた。

「一體どうしたんだ？」かう聞くあるじを導びゐてこの醜態を見せた。「驚ろゐたな、これだから何んでも聞くと見るとは大違ひなんだな。」

どうする？ もう直き着くんだが——私はかう心配するあるじより、寧ろ、日本を不潔として罵倒する外人達にこれ見ると云ひたかつた。そして、このボーイを呼んで、チップは何程でも良い、すつかり綺麗に掃除をさせたいと思つた。

しかし、かう云ふ時、語學の素養の乏しい自分、又一世紀の四分の一、二十五年前——に來たざりのあるじが、かう云ふ面倒さをよるこばない事も知つてゐた、到頭、私は着車迄辛抱すべく餘儀なくされた。

かうして、やつと着いた——ほつとして降りると、又例の旅券調べがあり、スーツケースに入れたまゝだと云つて慌たゞしく、取つてかへすあるじの後姿を見ながら我々二人——壽江子と自分はしよんぼり片隅に立つてゐた。

かなりたつてから、やつと其處へ現はれたあるじの手に旅券が握られてゐるので、ほつとして旅客達がみんなさつさと船に乗るべく渡つてゐる、その棧橋に行かうとすると、又もやあるじは云つた。

「ちよつと待つて——」「なんなの」かう云ひかけて聞かうとする私の聲をあとに、最うあるじの後影は見えない「なんだか荷物が判らないんだつて」かう壽江子が云つた。

その中三々五々群れてゐた、人影はすっかり消へて、到頭壽江子と二人が又もや取り残された。

「壽江子さん？ お父様の方へ行つて見ませう、なにか荷物の事が判らないんでせう——」

例の通り、頑として、彼女は應じなかつた。「お母様、行つて見たつて仕方がないでせう」かう云ひつゝも、流石寂しさうに、肩をすくめながらしきりに後を振り返る。

九月四日 晴 霧ふかし

今日は朝から名物のきりにこめられた此英京は殊にむしあつさにたへがたい。

今日は百合子とパークで雀と遊ぼうといふ事でパンをもつて出かける。丁度來合せた外人の子供——七つ位の女の子——が來てゐて一しよにパンをやる。何處も同じく無邪氣に愛らしいのはおさな子だ。しかしそれを見てゐる中、私の心は又亡なへる多くの子等を思ひ出し、そして又かうした子等のため最大の愛情を捧げる母親が、其將來いかに又多くの苦しみを受けるか——かう思ひいたると私は胸がしまるやうに思はれて、神がもし彼らのいふ如く此人類に無上の力を持ち得るならば、何故「悲しみ」を人の世からとり除かれないのか——かういふ疑ひさへ持ち得ずにはゐられない。

噫、無邪氣にしていたまじき幼な子及びそれを愛する親達よ——。

午後久しぶりで壽江子がSさんのお茶に行く。夫人もやうやくおきて一しよにお茶をのまれたさうだ。私はこの夫人が、身、公爵の尊貴にあらねながら、近年は身近に世相の波をもうけられ、更に外國に勤務される夫のため病弱の身を以てはる／＼渡航され、今更に尙病んでゐられる——私は痛ましいこの高位の夫人に同情と痛歎の涙をさへ感ずるので——

九月六日 晴 あつし

毎日あつくてやりきれない、この大陸のあつさは誠にしんからあつい氣がする。

國男と咲枝が來て、國男はラチオの機械が買ひたいといふはなしだ。私は自分のきもの一枚もかわはないからせめて彼のためにその望みを叶へてやりたいと思つた。それであるじにそのはなしをしようと考へて見る。

皆がひる前に歸つてしまつたので、壽江子と二人ざりになつた。それでは兼て好きなターナーの繪を見やうとテートギャラリーに車を驅けさせた。それでも慣れるといふのは不しぎなもので、壽江子がどうやら車を雇ひ、私がわからないところは通辯してとう／＼この館内のターナーの名畫の多くを見た。天才——かういふ詞がたしかにふさわしいと思つたのはこのターナーの畫だ。

私は數多い陳列畫の中に——此乏しい視野の中に尙この偉大なる畫面を見のがす事は出來なかつた。

これは——かう思つて立よつて見る——果してそれがターナーなのだ。そしてその柔かいかすみに包まれたような色彩——それが彼の特色であるかの如く考へてゐる私は、今この多くの作品に接して初めて此偉人の眞面目を見



る事が出来る事に驚喜せずにはゐられない。否々それは累年私が考へ私が思つてゐた通り、強い力、恐ろしい力、さ  
ては空想的のものさへも遺憾なく彼の筆にはあらはれてゐるのだ。

これなのだ——兼て私のいひ、又彼英男をして一時は繪畫に志さしめようとした時いつた事は——單なる模寫如  
き繪畫でない——現在に於て見られない美・眞・善、それを此世の人に紹介し、眼前に髣髴せしむる事によつて、初  
めて藝術の天職の高き處があるのだ——

かう考へて私は英男をその道に精進させようと思つた。——總ての學課をやめて——

九月八日 晴 あつし

今日は百合子がめづらしくひまだからリツチモンドへ行かないかと誘つた。彼女のためにもいゝ事にちがひない  
——かう考へて私はすぐ賛成した。

「ランチョンバスケットがほしいなあ」

その時になるときつとかういひながら又すぐ忘れるあるじの辭を皆してからかひながら、なるべく理屈なしに安  
らかな氣持ちで行かうとホテルから遠乗りのいゝ自動車をつたのんで出かける。流石は歐洲だ、實にのり心地のいゝ  
車だ。恐らく私の乗つた最初のいゝ車だらう。大きないゝ牛のやうな馱者が悠然とドライブして行く。不相變あの  
クリスマス飾りもののやうに小さく赤い同じ形の建物が、いくつもいゝある町を通つて目的の公園についた。ま  
るで森林だ。鬱蒼として日も通さないやうな大樹のそり立つ根元に鹿が遊んでゐる。私たちは大樹の切株の大き  
いのに腰をかけた。自然のまゝのやうな此大森林を縦横に貫いてゐる車道には、埃のたゝない爲に手をかけてゐる

しかしそれは單に自然をそこなはない程度で——不相變こゝにも營利的のカフェーなどない此國の公園の特長は、  
——第一に自然をそこなはない——しかし十分注意してある舗道、樹木、素朴でカフェーのない——運動具のない  
——營利的の何ものもない——これが第一に公園の品位を保ち、いかなる富豪の子弟も、いかに貧しき家の子も同  
じく天然に親しみ自然を愛するほか金の使ひみちのない事——これがもつとも私をよろこばせ、又安心させた。國  
民のための公園、堅實なる公園、親たちの安んじて子等を遊ばせ得る公園——こゝに英國の營利的でない堅實さの  
眞髓があるのだ——従つてかのランチョンバスケットの必要があるのだ。  
我國を愛する事の深い私はどうかして何處の美風をも見出してお土産ばなしにしたい——それはたとへごまめ  
はぎしりであつても——

九月九日 晴

今日は兼てお約束のS公邸へ行くつもりでそれいゝ用意をする。まづ何か花でもと思つたが自分で出来ないの  
で百合子に頼む。心遣ひしたわりあひに案外快くうけあつてくれてうれしかった。それで壽江子をつれて花をかひ、  
すぐ先方へ届ける事にする。そしてお茶の時刻近くに出かけた。

今日は壽江子もMさんへ上る約束だといふ事で途中まで一しよに——私はS邸で車をかへした。

取次には此國の人——女中が出て來た。次にあのSとかいふ婦人——船中でした——あの時の男の人も燕  
尾服で出て來た。今日はめづらしく寒暖計が八十度に上り、ホテルを出るとすぐ舗道のやけるやうな熱が面を打つ  
——めづらしい暑さだ。しかし此公邸内は丁度薄暮のやう、私のわるい目では人の顔さへはつきりしないようだ

つた。その爲かひやつとして室内はいゝ心持ちになれた。

奥方はもう大てい平常の通りなられたが、二三日は外出を用心するのだといふ事で、ほつそりしたおからだを洋装にされてゐた。お番茶とおすしの御馳走があり、いろ／＼お話をしてゐる中公爵が歸られたらしいので辭去した。此日は丁度壽江子がM邸へゆく車に同乗して園男、咲枝の二人をあいさつに出した。M令嬢もしきりにあひたいといはれたとの事で――

今日はあるじはめづらしく早朝から兼て約束の田舎の一大學見學に出かけた。折あしく此百度に近い炎天に學校建築の見學がむりであつたと見へ、歸つてから食堂へ行き皆と食事をされると間もなくいつもの腦貧血状態に陥りもうあとデザートだけなのを残して一人で部屋へかへつた。私たちもいそいで食事をすませ、部屋へ行つて見ると少しいゝ氣持ちになつたといひながらそれでも蒼白な顔に例の通り汗をかいて、がっかりした様子だつた。

「これからはつかれたあとお酒氣は禁物だ」としみ／＼考へた。

「もう明日は見學など思ひきつておしまひなさい。もう健康が第一です。安積へ引つこんでも長いきしなれば、――どつちが病氣しても大變です。もう研究など思ひきつて健康第一に考へませう」

しかしあるじは背の口からよく眠れた。私はいろ／＼の刺戟から、考へつゝ數時間ねられなかつた。

### 九月十一日 晴 稍涼

大使館のKさんから電話があつて――それもMさんからのお聲が／＼があつた爲だらう、三時すぎにあふとの事

であるじは出かけた。今夕は大使御夫婦も歸られるといふので途中で花を買つてもつて行く事をすゝめる。

私はM大使が決して凡庸の外交官――否、人でない事を感じて敬服する。それはいかにも自然でわざとらしいいや味のない事だ。今日の電話もおそらく大使の御注意の爲だと心から私は恭けなく思ふ。

あるじは今朝大使館のKさんからの電話で打合せた通り行くと、すぐ自動車で一しよに先方へまで同行されたさうで大變つがうがよかつた。おまけにその先方の人が顔を見るとすぐ「あゝ、あなたか、よく来た！」かういつて痛いほど握手された。見るとそれは往年日本へ来て建築學會にあるじが紹介し、司會者となつてもてなした事のある人で、非常に好都合だつたと大よろこび――是だから人は優遇しておくべきものだとしみ／＼はなした。

こんな風に仕事の工合がよいので、今日はあるじも中々元氣になつた。それで夕食をといふ事で例の常盤へ行く大變な繁昌ではらく腰かけて待つてゐた。今日は今度Oさんが百合子と共に來られたので――百合子が先にOさんを探ね、その送りの爲來られたのだ。今度いゝからとお夕飯を一しよにする事になつた。船以來久しぶりの事で壽江子も大よろこびだ。

「私はあなたをミューゼで見た時からどこかきつとおわるいな、と思ひました」かういふ私に答へて

「どうも何しろ久しくねてばかりゐたので――」至極簡単な返事だつた。

しかし私は此人の頭に何か異つたものゝある事をどうしても感ぜずにはゐられなかつた。非常に好奇心に富んでしかも正直な――熱狂し易い感情――またゝきのはげしい目――私はこの人の心がもつとおちつくやうにといのらさにゐられない。けれど、食後のはなしは意外なものであつた。

「私はモーニングのネクタイについて此國の人に教へられた――」かうして話はネクタイ通のモダンのやうに進

んだ。ふしぎだな。

「また参上するやうな着物が無いので上られません——」あんなに船中で親しくされたM夫人にさへかういつて盛んにプロ式を發揮された此人——船中のあるあつい日、

「奥さん、なぜこのシャツだけではいけないんですか——」かういひつゝ、丁度船が熱地に入り灼くやうな暑さの中に青いしまのシャツだけで、汗をふきくかういつた彼——それがネクタイ道楽——学校の先生——ふしぎな矛盾を感じて私はだまつてたゞ彼らの話を聞いてゐた。

その中やつと席があいて夕飯にありつた。冷ざうめんが馬鹿に美味い。おなか工合があるのでほとんど御飯はやめてこれだけお代りをする。大變工合がいゝ。

九月十三日 晴 あつし

もう間もなくこゝを出立しなくてはならない事を考へて、そろ／＼したくなどしてゐると百合子があはたゞしくかけ込んで

「私の處へお客といふのは一體誰の事なの？」

「それはきつとお前の處なのだらう——」

かういつてすましてゐると、急に戸があいてMさんのお嬢さんが見へて「これを」といつて何かいろ／＼のお饅別をいたゞく。

「下に皆おります」

「エ」といふなり驚いて私はすぐ下へおりた。すると入口の廊下に——二郎様までならんでおられる——驚いた私は流石にまごつた。

「そんなにお辭儀ばかりしてゐては皆様御迷惑ぢやありませんか」不相變たしなめるやうにかういふ百合子——何だかむやみにばつがわるい。しかし下手に争ふ事も尙更無禮だ。壽江子だけ玄關の外まで送らしておわかれした。いたゞたお饅別の品々はいづれもこまやかに、めい／＼に相當のものだつた。毛のはだぎ、コンパクト入、ハンカチーフなどだ。

夜日本料理常餐へ行く。今日は明いてゐるから三階の廣い部屋へ通す。ひやざうめんも不相變美味い。めい／＼二椀づゝたべる。今日は特別に部屋を明けてくれた好意に對して少し餘分の祝儀をばづむ。

九月十四日 天氣はれ

いよ／＼出立のあいさつにとM、S兩家を訪問する。壽江子と。

生憎兩家ともお留守だといふ。先づS家に行き、歸らうとして氣がつくと又いつもの蝙蝠傘がない。しかたがないとあきらめて歸らうとタクシーをよぶと、いゝあんばいに、「マダム、アンブレラ」といふ。悅んで大きくと幸ひ先刻の運轉手が正直にも遺失物に氣がついて戻る處であつたのだ。私は大變その正直さをよろこんで、大きい銀貨をやつた。

九月十五日 晴 稍冷

兼てM夫人にお目にかけておいた——常磐會雜誌「深みどり」に登載すべき原稿の事で今日四時頃お目にかゝるお電話の約束なので、大いそぎでその時間の間にあふやう、茶のスプーン——面白いもの小五丁、大五を買った、そしてすぐ咲枝と別れてM邸へ行つた。例の赤いチョッキのウエーターがゐて何かいつて断つたらしい。オヤ、と思つてゐると流石は夫人だ、すぐ年とつた別の給仕が奥から出て来て、いつもの御居間に通した。

間もなく出て來られた夫人は「今日はSさんがいらつしやるかもしれません」との事で、間もなく見へられた。黒つぽい薄い洋装だつた。しばらくおはなししてゐる中更に又一人の御婦人が見へた。兼て夫人から伺つた外人でこの大使館員の夫人となつた人——大變よく氣のつく社交的な人——その人らしい。不相變くわしい事は見へないが、大變日本語のうまい——それは私の是まで見た外人の中の第一人者であるほど——瘦形の人であつた。いかにもよく夫人の意に迎合する。夫人はいふ。

「此頃はアメリカなどではシルバーフオックスなどは着るのもいやになるさうです。何しろあちらは月賦制度なので、一度なぞ途中で一人の婦人にあひ、それが立派な毛皮をつけてゐる。ハテ、家へ來る洗濯やのかみさんのようだが——まさか——かう思つて聞いて見るとやつぱりそれ——下女でも何でも、ほしければすぐでも申込めばいゝフアニチュアでもその通り、これがほしいがいかにも高い——かういふと、あなたはこゝに何年住むつもり三年——それなら歸るまでには拂へませう、すぐ持つていらつしやい——かういふ風で何でもかでも——職工でさへ三人位共同して一つの自動車をかひ、それを月賦にしてオーナードライブ——こんなですもの——」

私はこの國の富が不知不識の中に國民の生活を豊富にし、生活の平等を實現するものではあるまいか。私はこの平等の上に尙一頭地をぬいて「いゝものを着たい」といふのはほんとうの贅澤ではあるまいか——この事は百合子

に話すと「それはいけない觀察だ——米國の戦争成金、それは決して讚美すべきものでない」といつた。私はこの事は尙よく考へたいと思ふ——

九日十七日 晴 あつし

朝B氏より電話で更に肖像畫のはなしがあつた。「スプニール」にしたいから是非にと又手紙さへよこした。彼の「金式」といふ事で大變あるじも心持ちをわるくした事があつた。しかし彼の一面に卒直で愛すべき處のある事をした私は、このねんごろな手紙に断りきれなかつた。百合子に頼んで來てもらふ事にした。午後四時頃、約をたがへず來た氏は折から讀書室にゐた私にきれいなカーネーションの花一束をくれた。そしてすぐそのまゝ談話室に畫架をすへて寫生にかゝつた。丁度隣室にはM令嬢も來てゐられたので、しきりに外へ出ようとしてもB氏は聞か

ず。「私、はなし澤山してもいゝ」かういつてはじめた。無論私も來る時造つた社交服を着た。一時間足らずで半身の寫生を終り、更に數枚の寫真をとつた。そしてポケットから小さい尺度を出して更に私の顔の寸法まで取つた御めんなさい——かういひつゝ、恐らく日本服を着た人をめつたに見る事が出來ないので、或は彼の制作に資する處あるのかもしれない——

かうして出來上つた私の胸像——否寫生畫は、顔付きはかなり調ひ美人のがわに屬すべきものかもしれない。しかしそのスタイルのいかにも小さいのは、胸廓の狭い事と肩のあまりスポケてゐるせいかもしれない。一番口元がよくかけてゐた——此國の人にあまりないふつくりしてゐる唇——頬の豊かさも——年に合せては——

B氏もこゝに一番身を入れたらしい。とにかく私の性格の少しもあらはれてゐない——のが残念だった。しかし志はあつくうけた。夕飯後からの荷造りは案外ひとどつた。國男、咲枝も中々骨を折つたがとう／＼十二時をすぎた。

S令嬢が一寸見へられ、お茶ものますに歸られた。例の何か壽江子のとんまからしい。困つてしまふ。

九月十八日 曇

早朝國男、咲枝が来て荷造りの手傳ひをする。カベンがどうしてもたりにないといつてあるじが買ひに出る。大き過ぎた。

流石に今朝は早く終つて、豫定たつぷりに宿を立つ事が出来た。いかにかりそめのホテル住みとはいへ、一月餘にわたつての滞留はウエーターからメイド小さい玄關番の給仕らにさへ顧みがちなるなつかしみを覺へた。かの大戦前までは歐洲列國の中にあつて、その儀禮の正しさに於て第一位を占めてゐた——此國だけあつて、今も尙かゝるホテルの使用人でも、ある行儀の正しい——快さがあつた。立ち出る通路の角々にそれ／＼のものたちがたつて、グッドバイをいつて頭を下げた。めづらしい早朝からの外出でかの有名なロンドンフォウグが行先をばかした。ゴールデンアローといふ車は速力第一だといふ事だ。汽車賃も中々高い。シートは兼て約束した家族専用のであつた。國男と咲枝が一しよに車までおくり、同宿のM氏も来た。そこへ思ひがけずB氏がやつて来た。百合子、壽江子に菓子一袋づゝ、私には何か滋養になるたべもの——こうせんのやうなものをわたしてくれた——私はあの乏しい生活の中からこの心づかひ——かたじけないと思つた。どうかこれがB氏のためある要求の前提にならないやうにと希つた。それは私の彼に對する感謝の心を裏切る事になるから

B氏はわれ／＼と握手して別れをおしんだ。そして口早に「今そこらにMさんが見へた」さういつてゐる間もなくM氏は背廣服かざるに、例のごく氣安げな調子で別れの辭をのべられた。われ／＼も亦握手してその厚意を心から謝した。

尙このMさんの來られた前數分、Oさんが大いそぎでかけつけた。

「今にOさんが来る筈だが——」

かういつてしきりに待ちきつてゐる百合子が手まねきをした。と、大またにその人は車の前に來たのだつた。

かすいふ風にかなりあはたしい送迎の中に、國男、咲枝はかへつて遠くへだつた。車室におさまつて見ると中々ゆつくりしたい、部屋で、前に卓もあり白いきれもかけてあつた。アローの名に背かず各驛も飛ぶやうにすぎて行く。いきなり百合子が叫んだ。

「あゝいゝなあ、このけしきは——」

そこらに青々と廣い展望がわれ／＼の視界の中にあつた。さうかうする中おひるの食事をきゝに來る。私は例の通り用心してサンドウィッチとお茶だけですませ、あるじは鳥やチーズ——これは私も一寸たべたが美味かつた。

何しろ他人をまぜないこの食卓は、遠慮ない話に花も咲き、にぎやかな一時だつた。さうこうして食後の幾分を皆してうと／＼過してふと目を覺すと、もうどうやら人のゆき／＼もせわしく、荷物をもつてゆき交ふ男たちが多くなつた。

「ほんとうにもう着くらしいぞ」

かういひつゝあるじは室外に出て見た。果してもう目の前に大きな船の影が見へた。われ／＼もいそいで棧橋に足をすゝめた。けれど乗船する前又その船員か税關吏があるじを止めた。

「又か？」かう思つて私はうんざりした。あとで聞くと前もつて渡された紙片にいろ／＼書き込むべきであつたさうだ。それでこゝでも又私たち一行は一番あとに乗船した。来た時の日和とちがひ此日は誠におだやかで、機關のエンヂンのひゞきが規則的に響く外船の動搖は感じなかつた。

百合子が一番船に弱いと聞いて私は自分の事より心にかゝた。しかしこのめづらしい静謐さで元氣な彼女の様子を見て私はすつかり安心した。そしてゆきとちがひ今度はかなり行届いた船であつた、め總てが快く思へた。しかし私のからだの方は思ふやうにならなかつた。此間中からのいろ／＼の心勞が一時に出たやうにがっかりして海上を見る氣さへおこらなかつた。

温室のように窓をひろく大きくとつた船のウイナターガーデン——丁度サロンの様にも見へる——そこには棕櫚の葉が快く青く大きい葉をひろけてゐた。籐で出来たソファも二つ三つある。その一つにゆつくり足をのぼしてやつとのんびりした私は、うと／＼と快くなるにつれ更に家にある温室——彼のおもかげがまづ私の心を打つたかう思ひながらいつか私はうと／＼したと見へる。ふとあはたゞしい物音が私の耳にひゞいた。

「もう着くから——」かうあるじの聲がした。

「まあ——」といふなり私は急いで立つて荷物の數を見た——この船は座席がゆつくりしてゐた爲、荷物も皆目の前にあつて少しも煩しくなかつた。

立派な棧橋はすぐ陸上に着づけになつた——こんなに大勢乗つてゐたのかと思はれる位、上陸の客は多勢だつた

そして皆かなりの人らしい風采の人ばかりに見へた。

ゴールドデンアローの連続と見へてそれからすぐ乗つた汽車もやはり一室を領してゆつくりした座席だつた。そしてその室内の様子、總てが以前のによく似てゐて、クワッションから總てが上等で快い感じがした。

「さあ少し休ませう！ 目をつぶつてゐるだけでも休養になるから」

かういひつゝ各自によい位置に身をおいてかりねの夢を結ぼうとした。うと／＼したかと思ふと更に雜然とした氣はひに目をさました私は、

「もう着くんでせうか、あんまり早けれど——」かういつて立つて身づくろひし、ふと頭に手をあてるとさしてゐた飾りピンがない。

「サア今度はピンだ——」かういひつゝ私はこの古い歴史を持つ——廿五年前あるじが此ロンドンに五年の滯留を終へて歸つた時のみやげであつた——實價以上に私はその紛失を残念に思へてならなかつた。「たしかにこれはさつき温室のやうな船の部屋で藤椅子によつてウト／＼した時おとしたのに相違ない。何しろしきもの、ある部屋だつたので氣がつかなかつたのだけれど——」かういひつゝ私は又更に椅子の下から傍まで皆と一しよにたづねた。けれどどうしてもないらしい。

「何だ、又たづねものか」かういひつゝ手洗ひから歸つたあるじはなじるやうな調子でいつた。

「エ、——」といつたさうり、私は又例の通りガミ／＼いはれるのを覺悟してゐた。

「サア皆どいてみるんだ、何でも尋ねものは徹底的でなければいけない」かういひつゝ椅子をどけテーブルを片よせてグン／＼尋ねた。

「アツタツ」

「エ、」といふなり皆驚いて彼の手元を見た。そこにはまぎれもないかのピンが掘られてあつた。

「どうだ！ これだからいふんだ、やつぱりさがしものは僕に限るんだなあ」

ほんとうに今度の旅ではさがしものについては一言もない。「有がたうく」かういつて私はかなり嬉しさと安らかさを覺へた。さあ、これで皆紛失物は出た——ほんとうにかの蝙蝠がさ、腕時計、ついでこのピン、いづれも滞りなくかへつて来た。就中あの傘などは危い處を二度通つた——三度目正直といふ事がある——もう萬々注意しなくては——こんな事を語りくしていつかお茶の時になつた。茶とパン、くだもの、一つをとつてすました。いゝあんばいにおなかは無事だ。

九月二十日 驟雨 69

今日は食事にゆく途中百合子のトランク二ヶをホテルへ持たせてやる。とにかく巴里も追々冷氣を覺へて来た。今夕なども外へ出ると風が身にしみるやうだ。もう單衣ではとてもゐられない。袴を着、肌襦袢をまで着込んで尚街路にタクシーを待つ間の物かげがほしい位だ。流石遊び好きの巴里人もそろ／＼そのつばさをすぼめて、あの道路に面した腰かけて盛んにカフェエをのんでゐる遊客のかげもさびれた。

巴里へ移つたら——あのボアトブローニユの森に船を浮べて——あの雀たちと遊ばう——かう思つて半ばたのしんだその森、その池——もう秋風蕭條のありさまだらう。

かう氣がつくと今更ながら過ぎ行く月日に比して何らなす慮なき自身を顧みずにもられない。しかしそれもしか

たがない——この病弱の——途中からでも引きかへさうとさへ覺悟して出かけた位なのだから。ともかくかうしておきてゐられるのだけでも満足しなければならぬまい。

今日はほとんど幾月ぶり位に入浴する。ロンドンのパレイスホテルではあまり湯風呂が深く大きくて一人では入れない。それがこの家の小ぶりで丁度いゝ。ゆつくり一人で湯をわかし入浴した。氣分は家に快い。

ワイドロープの鍵が見へない。困りきつて電報を出し、同時に安着を報じた。

九月二十三日 晴涼

今日はめづらしく風もなくいゝ天氣だつたのでボアトブローニユの森を奥の方へドライブする——英國から來てもつとも心安く思へるのはこの自動車の安價な事だ。今日もこの森をいつもと反對の方へ奥深く進んで、とう／＼そのはじの柵まで行つた。そこには今まで此都人士の多くが集まる娛樂場の代りに、めづらしい田園的の蔬菜の畝を見た。

丁度もう日はほとんど落ちて、薄暮の空にスク／＼とそびへ立つ樹林の間に、薄寒い、しかし清涼な夜氣が顔面を掠めて、一日中籠められた湿潤さが洗はれるやうな快さを覺へる。

そこから直ちに常磐に行く。久しぶりに見るとこの家もすいぶん陰氣に薄暗く見へる。以前見た時とは大分寂びれて見へる。此前來た時はやはり日本人會のような若い給仕が活潑に働いて、折から大入満員の勢ひで私たちは斷られた位なのが今夜はグツと静かでも寂しい。壁紙が全部金色に五三の桐の模様のある——あの加藤清正が秀頼君に御暇乞ひに來る舊劇——清正暇乞ひの段——を思ひ出させる様な周圍だつた。——その食堂に倫敦の常磐とは

大ちがひにチグハグのお膳が運ばれ、やくざなお茶の道具が出る——一寸外國でなければ見られない圖だ——料理も亦英國とは同日の論でない。——定食によせなべ——野菜の多い——を取る。それでもおわん、すのものはめづらしい。わかさぎがある——さら／＼とかつこむお茶づけの味は、いつもかの岩村透男が洋行中かこたれた「此頃はパンと肉にあきはて……」この一首を思ひ出さずにはゐられない。あれから幾年たつたらうか、時代の進歩はもう私共にさへ米に不自由を感じさせない。——今にどんな事になるのだらうか、進歩、進歩、私はこの詞の裏に潜むある危懼の念を除く事が出来ない。

あとで百合子はかういふのだ。

「おかあさま、もうあたし御飯はやめだ、たまらないこんなにおなか太つて——」

なるほどかういひつゝたゞ彼女のおなかはほんとうにボン／＼いつて張りきつてゐた私はこの病後の彼女の健康を考へる時、どうかしてその病後にもつともいゝ食物をとらせたかつた。そして早く故國に歸つてゆつくり温泉にひたせられたかつた。

こゝまでかいてゐると、ふと街路にひびく鈴の音がする。往年中村順平氏が「巴里では朝早くおきるといゝ鈴の音と馬蹄の音がする。それがたまらない快いひゞきを傳へる。私は何かと思つて聞いたら、それは紙屑やの馬車だつた、あちらではこんなものでさへ——」かういつて歸朝の直後一泊された時の物語りであつた——ふと私は今その事を思ひ出した——明日はその事をかいて中村氏におくらう。

#### 十月十四日 曇 寒

今日はほんとうにすつかりあてちがひをして不愉快だつた。

「今朝は大變に気分がようございませうから是非何處か見物に出かけたいと思ひます。ベルサイユか、ミューゼへでも——」

かう私がいふのをうけて

「それぢやあ僕も三時頃、お前の支度が出来た頃までに歸らう」

かういつて快く出て行つたあるじに又氣でもませまいと私はセツセと仕度をした。けれどその時が來ても歸らない——あゝやつぱりいつもの傳か——かう思つて私は少し不快になつた。それでもいづれあんなにいつて出て行つたんだし——それに百合子も私が朝早くおきて出かける用意もセツセとしてゐたのを知つてゐた事だしあるじが歸ればきつとおこしてはくれるだらう——かう思つて私は例になく社交服などを着た——そのまゝ羽織だけとつて横になつた。一寸假寝をと思つたがやはりつかれてゐると見へてぐつすり寝こんで目を覺すともう部屋の中は薄暗くなつてゐた。ふとあるじの聲と子供らの聲が薄暗の部屋の中へ流れこんだ。

「オヤ、皆の聲がする様だ」

私めづらしく早く起きて折角出かけたと思つてゐた——それは漸く此頃に成つてから僅かに私の心に蘇つた好奇心の最初のものといつてもいゝ位なのだ——それを情けなくもだまつてねかせておいて——もう行かれなくなる時間まで——私は急に身仕度のまゝねてゐた窮屈さに肩のこるのをさへ感じた。

これだから楽しまふなど思ふまいとあきらめたのだ。しかし折角この巴里まで——英京までも來て——何を見る



事が出来たであらう？ いかにも病弱のためとはいへ、肉身のありがたさはせめて氣の毒だ位には感じさうなものを——丸である意地悪の姑か奥女中の意地わるにも似て、かうとつぶりくれるまで大きい帯をしめて折角たのしんで待つてゐる——その氣持を情なくも此夕闇の中に没却してしまふとは——私は床の中で涙を流した——しかし尙私には其憤りの中にもしづかに己れを省みやうとした。かう思ふのもやはり私のひがみなのだらうか——よく心をおちつけて——たとへそれが故意であつたとしても相手は我子なのだ——どこまでも怒らずに——かう思つて私は部屋を出た。

食堂に茶をのんでゐたあるじ、百合子、壽江子、楽しさうに笑ふ其人々の顔を見て、私もやはり淺ましい人間だつた。——覺悟はしても腹が立つて、腹が立つてたまらなかつた。

#### 十月十五日 晴 冷

いよくシベリア線の汽車が取れて急にいそがしい様な心持がする。もういよく神経でお腹下しがあるのだと確信がついて私はしつかりした氣持ちをつゞけたと思つた。

#### 十月十七日 曇 冷

百合子が昨晩から泊つてゐたが、晝飯後どこへか買物の手傳ひをしやうといふ事になり、あるじと一しよにマカザンへ行つた。

やがて玄關のベルがなつて、壽江子が出て見ると兼て約束の理髮師ですぐ壽江子の髪かりにかゝる。今日は私も

出て、此間のはあまり下びてゐるし、いよく歸朝するのだからなるべく品のいゝやうになど頼んだ。

流石に今日は上出来だつた。百合子がかかり、あるじがおしまひだつた。

此國に来て一番感ずるのは、誰でも平等な詞づかひで、この床やもひどく友だち口調だつた。

#### 十月十八日 雨 寒し

今朝はどうかと心配してゐたが思ひの外工合がよい。喜んだ私はもう幾日もゐないこの巴里に、せめては兼て見たいと思つてゐながらいつも——果す事の出来ない所々の見物をしたいと少し起きて仕度にかゝらうとした。すると丁度そこへあるじが何處であつたかKさんをつれて來た。

何しろゆり子の友だちなので彼女も勿論大あはて、それでも一番さきに支度が出来て客間に行つた。間もなく私も一しよに例のブテーヂジュネの紅茶を共にすゝつた。

此青年は以前一寸來た事があつたが、今日はかなり長く話した。やはり近代青年の持つ眞剣さと過敏さ、眞實さを感じられた。そして私の思はず話し込んでゆく眞實さと、母親のもつ苦惱をかなり察し得られる氣持が私にも感ぜられた。

「百合子さん、ロシヤへは僕は非一度行つて見たいと思ひます、どんなですか？」

「それはほんとうに面白いでせう、是非いらつしやい」

つゞいて彼國禮讚の詞が盛んに此青年の心をおどらした。傍に聞きつゝ私は心中平らかでなかつた。

「あゝ、この好青年願はくば眼界を廣くするために資せんが爲のみの露國を見よ、トルストイを生んだ露國ドスト

エフスキーを生んだ露國——過去に於てかゝる尊きものを生んだ露國は、今の大なる革命によつて此尊き精神的貢獻者をさへ過去のものとして葬り去らんとしてゐる。そして現實にのみ則せんとする彼らの生活、それは嘗て杜翁が獅子吼した人類愛——尊き犠牲的精神——地上より足を抜かんとする理想的生活——かゝる總てのものを没却して、物慾——本能的物慾にのみ則せんとしてゐる。

あゝ墮せるかなかゝる人間生活！ 神を見ず、人情の麗はしさをすてゝたゞ己れの好む所、己れの欲する所にのみ馳驅せんとする——慨嘆血を吐くものあつて、しかも耳をとち、目を閉いで、更に他に聞き、他を見まいとする——相手は最愛の我子だ——目前に彼女の詞を聞き、目前にその誤れる聲を聞く。

父は姑息の愛に母を叱責し——母は大義の爲に一身をも捧げんとしてゐる。かゝる大混亂の中にあつてこの亂麻の如き私の心——自らを失はんまで私の心は苦しみ且悲しむ。靜かに彼の靈の前に手を合せて、正しきの爲に力を與へ給へと祈念する

### 十月十九日 雨 寒

今日は雨であんまり寒い——このアパートは例の中々儉約で全部でなければ湯を通さない。

大陸の秋は故國のそれに比べて特に冷やかさを覺へる。私はメイドに薪を頼んだ。間もなくはこばれた。それは北海道以來初めて見た太い薪だ。丸く、太く、やはり一本の四ツわり位に長さも程よく綺麗に揃つてゐる。

日本ではもう薪など悠暢にたいてゐる處はない——是も亦思ひがけないものゝ一つだ。

今日は土曜日なので百合子と壽江子と買ひものに行つて、いろ／＼お土産ものを買つた。麥わらざいくのパック

や、何かこちらの人にはめづらしいかもしれないが我國ではどうかしら——その他細かくて安いものがある。きれいに飾られたマツチ箱やパウダー入、流石に巴里らしい感じがする。

百合子が壽江子といつてお人形をかつた。スペインの闘牛士ださうだが、黒いピロッドに赤いへりをとつたその色彩と顔つきが馬鹿に氣に入つた。私の分にと買つてもらつたのは私の氣に入らなかつた。帽子をかぶらないプロンドの髪の毛に、サラサの白つほい服が何だか安價な人物に見へた。私は明らかにその事をいつて彼女のきげんにさわらうとも、初めてのこの旅行の思ひ出にたつた一つの買物のやうな此人形は私の好むものでありたかつた。私はとう／＼取りかへる事を百合子にたのんだ。

明日は安達大使のお招きで芝居を見る筈なので、今夜はしづかに家にゐやうと日本人會から辨當をとる。

### 十月廿日 快晴

今朝はかのお招きの日なのでどうかとおきて見ると、やはり不相變ふら／＼する。頭のしんがすき／＼いたんで胸がドキ／＼する。

これではどうか？と氣になるが、折角の御親切をぜひ果したい、幸ひに昨日から食後のいたみ——胃痙攣がない下痢もない——それを何よりとおもつて、少し早めに用意にかゝる。あるしもけふはタキシードに改まつた。十分の餘裕をのこして私もまけすに支度を急いだ。そして先づ無滞出かける準備が終つた。しかし不相變少し動くとき悸がはじまり同時に目がくら／＼した。

「まあしかたがない、初めによくお断りをしておいてどうしても工合がわるければ歸るより外ない——」かう覺悟

をきめて私はとう／＼タクシーにのつた。約三十分ばかりして車はその劇場の前に止つた——これが巴里の芝居か——と思はれるほど外見は貧弱だつた。建ものも低く私の目にさへあまりきれいでなかつた。たゞ我國に見るやうな喧噪の聲のないのと、なるほど兼て日本で聞いた通り人は皆聲が低くおちついてゐた。いつもこの歐洲に来て感ずる事は——こればかりは洋行者の誇張でなく——いつもこの群集の静かな事——静肅な事だつた。やがて導かれた場内はまだ開場前なので電燈もあり、あまり困らなかつた。

大使夫妻はボックスに先着しておられた。私には初対面の大使は、柔和な顔に笑をたゞへて遠慮なげに請じ入れられた。ボックスではあつたがその席は生憎大圓柱が右側に立つてゐるため少し見にくかつた。

夫人は兼て氣六ヶしやで、決して人にあふ事はない——と噂さされておつた——と聞いてゐるが、目のあたり見るその人は山形辯そのまゝにいかにもとりつくるはなげな、心やすげに人なつこいやうに見へた。年頃はもう六十近いかと思はれるやうに、髪も半白に、少し腰もかゞみ氣味だつた。

いよく舞臺が初まり、意外にも狭く道具立ても貧弱で、我國なら三流、四流どころだと思はれるやうな舞臺——背景——おまけに音楽もない舞臺——燕尾服やイブニングに装つて見てゐる人の氣がしれない様だつた。フレンチの皆目わからない私も、細やかに説明される夫人によつて此劇が評判のもので、一年も一つものを上演して入りの落ちない事、そして此劇の主人公は初め謹嚴な學校長であつたので、ある富豪の學生を落弟させたためその母親が極力賣收しやうとした淺ましい手段に陥つて、遂に泡沫會社の社長席を奪ふ程の惡漢となり了るといふ、人間性の弱點を遺憾なく現したものだといふ事を説明された。

何しろ開場時間の短かいためでもあらうが飲食物は更に賣つてゐる氣色もない。退場の時も前同様誠に静肅で、

婦人である私の爲に皆道を開いてくれた。

大使夫妻の車に同乗して「サアおうちの前へ参りましたよ」かう大使にうながされるまでわれ／＼夫婦は夫人の珍らしいお話に夢中になつてゐたのだつた。

十月廿三日 晴

家主の品物しらはつゞいた。そしてそれは下女にまかせたので朝からとりかゝつてゐたらしかつた。ふと戸を明けて出るとそこにはかの家主の娘——三十位——が立つて門番の女房と一しよにいろ／＼と品物をしらべてゐた口が利けるなら「まあ一言の斷りなしに——」ともいへるのに、何もいへない私は唯一寸首を下げたぎり——そして、まあ長くおせわになつて——ともいへない。善惡につけ言葉の通じないほど情けない事はない。

しかしまあどうやらかうやらそれですんだらしい。歐洲の貸家にはじめて入つた私は、家作をとゝのへる世話のない代り、此一物を見逃さず、不殘かきつけをとる嚴密さには驚ろかされた。しかし又かうでもしなければ相當立派な裝飾品はいつか破損しつくされるであらうから、これも生活のためには餘儀ない事だらう。

例の通りSさんがそのしらべに立あひ、家で作つたお晝飯を共にした。今日の魚は生ますをつかつたが、何だか肉が白く美味さうでない。私は鱒と聞いて箸をとりたくなかつた。しかし客に對していかゞかと、しひて一口食べたがやはり私には咽喉の通りがわるかつた。そしてそのまゝ箸をおいたが、Sさんは大好きだとあつてお代りまでされたのは氣持ちよかつた。

フランス人形の大きいのをせめては記念にと買つては見たが、かなり持てあつた。しかし私はとう／＼考へ

ついで百合子の買つてくれた大きなバスケットに入れる事にした。これで一安心した。しかしまたなか／＼とまららない。

十月廿四日 快晴

今日は兼ての豫定通り午後三時過の汽車で出立する事になった。

例の下痢が起つては——と人より餘計な心配をもつ私はする分苦心し用心した。しかし一昨夜？ 彼女との論議はかなり私を興奮させ、不眠と共に又下痢が昨夜から始まつた。しかたがない。明朝は絶食で立つより外ない——から覺悟しながら臭那劑をのんだ。そして朝は單にテオレだけですました。それでも尙二三回の下痢があつた。お晝を食べてから——といふ事なので私はどうしやうかと思ひながら、しかしそれでもメードのつくつたローストビーフをたべ、パンも少し減じてたべた。

久しくおせわにならなかつた寶丹を又出して私はのんだ。いゝあんばいにおさまつたらしくお腹がおちついてゐる。

その中手傳ひにと、あのT、K兩氏が見へた。二人共風引きがちで、特にKさんは頭もいゝ代り蒲柳の質らしいのがいた／＼しかつたので、鶴見博士への紹介状をかいてわたした。

今日は此家に於ける最後であり、又百合子をまじへての晝飯はしばらく出来ないので皆で一しよにたべた。快く快くと思ひながら(脱字か?)

しばしの別離を悲しんで涙もろい父は泣いた。先刻から内心にこらへてゐた母も亦咽んだ。

「お母様もらひ泣きして」

かういふ彼女の詞の冷やかさは更に私をして憤りの涙に變らしめた。

「もらひ泣！ 多くの子をさき立てゝ涙の淵にしづみきつた母、たゞ一人の力ある娘——せめてこれによつて慰められ、悲しさを忘れたいと生命をさへ賭して迎へに來た母、いかにその信念に於ての相違こそあれ、情なさに幾度この刺すやうな我子の詞にからだを損つたらう。

あゝ、そんならなせ來たんだ！

呆然としてその詞を聞くと、私は不孝などいふ詞では現し得ない人道の頹廢を思つた。

いよ／＼時間が來てそれ／＼タクシーに分乗した。時間ぎめで來てゐた此國の婦人が、やさしくも別れをおしんで私の手にキッスして涙を流した。あゝ、こんな他國人でさへ——やさしさに感ずる事は何の變りがあらう。私の目はあつくなつて再び彼女の手を固くにぎつた。

停車場についてもかなり時間はあつた。室内に平、片山兩氏もはいつていろ／＼せわをしてくれた。其外北澤樂天氏、思ひがけず大使御夫妻も見へられ、車中に入つてねんごろに別れの詞をのべられた。利害相關せぬわ／＼に舊交を重んじての此厚誼は私の聲をうるました。人の話に聞くと大使の御長男は發狂して伊太利の病院にゐられるとの事、夫人の陰氣に思ひあげなもうなづかれる。いかに位高く、富貴身にあまるとも、我子に對する苦惱はかく夫人を年より老ひ、ヒステリックに陥らしたのであらう——あゝ人生——

おくればせにDさんの御主人が見へた。何だか隅の方にかくれるやうにしてゐた。夫人は見へなかつた。

初めて汽車に一泊した私はどんなかとひどく氣をもんだにも拘らず案外よくねむれた。勿論それは程度の問題で

はあるが——

とにかく一息にねてしまった朝の氣持ちはつきりしてゐた。是では案外汽車の長旅も出来ると思つて、心中非常によろこんだ。

十月廿五日 快晴 稍暖

あはたゞしいのは旅のならひと観念はしてゐてもさて此旅程のせわしき。

國境へ来ると中々警戒が嚴重で、隣室に商賣品か何か大トランクへもつて来たといふ紳士は、そのトランクを押収されさうで大さわぎ、われ／＼のパスポートでさへ一時皆警官がもつて行き、綿密に調べた上歸された。何しろこゝはポーランドで今まで露領であつたのが獨立したので餘計厳しいのださうだ。

いよくワルソーについた。市中は中々にぎやかだ。おりるとすぐタクシーに乗つた。馭者がすぐ驛前の旅舎に案内しやうとし、あるじも同意しかけたが、しかし私はM氏一行と一しよになるため米國行をよしたのに別にゐるのはつまらないと、とう／＼ホテル、ユーロップに車を驅けさせた。

このホテルは誠に外觀の立派なホテルで、入つてゐる見と中々廣大なものだつた。しかし何より困つた事はこの國の詞だつた。獨逸語だけ少々わかるといふのに誰か通じるものがあらう？例の通りあるじは一度に面倒がつて怒つてばかりゐる。ひどく繊細になつてゐる私の神経はその時々刺されるようだ。何しろ厚い二重硝子の窓一室に——(不明)——ラヂエーターにも寒さのほどが思はれる。

十月廿六日 寒し

夕食を車中にとる。かなりの御馳走があると喜んだのもつかの間、勘定となると馬鹿に高いとあるじが不平だつた。日本人のせいでよけい取られたのかと思つた私のはひがみで、どの人も／＼その事についてヒソ／＼立ばなしをしてゐた。しかし何といつてももう間もなくちぎネゴロイ——國境——についた。いよく旅客の荷物検査があつて、何しろ小荷物とも十五の數があるのでかなり私たちは暇どつた。

例の通り一番あとになつて一人せわしげには且あはたゞしくゆき／＼するあるじの様子を、ベープメントの寒い上に立つてたゞ見てゐるのが切なかつた。

かうして氣ぜわしくシベリア線にのりかへられた。もう寒い風が刺すやうに鼻口を襲つてクシヤミがしきりに出る。最後になつたわれ／＼一行がやつと乗り終ると、間もなく發車した。何しろこの歐洲の汽車はどこでも非常に踏臺が高い。手にものをさげ毛皮のコートを着た私には乗るのが全く一骨だつた。ホツとする間もなく汽車は動いた。

夜食は車内の肉入りパンを買つた。始めて食べたこのパンはかなり味がよかつたが、しかし私は何だか氣味がわるいので、少し——半分はか食べなかつた。が、隣室の若い人はあまり舌ざわりがよいのでたべておなかをわくしたといふ事だつた。まあ何でも馴れないものは少しにしておく事だと思つた。

十月廿七日 晴

此汽車中でもふしぎな私位はよく眠れた。——ほんとうにふしぎなのだ。折々起るはげしい動搖——音響——初

めの中は地震かと思ひちがへて一寸おどろいた——これでは困る——こう思ふ中いつかしら夢地に入つたと見へ、次に目のあく時は小さい窓のカーテンを通してあか／＼と日がさすのだつた。

あゝよかつた、もう夜が明けたのか——

いよ／＼モスコーだ——

眞白な街路を想像してカーテンを開けた私は雪もなくわりあいに暖かだ——しかも汽車をおりると出むかへた人々はYさん、F氏等であつた。そしてすぐ私だけF氏の家に伴はれ、あとの人々は皆大使館に行き、O氏の忘れたピザを取りに行つた。

F氏の家は中々立派なもので床にゴブランの織物をかけ家具などなか／＼よいものらしい。

悠然と椅子にかゝつてゐる氏は實に成り上つたといふ感じがする。何しろ日本軍人として〇〇されるべき此人がかく特別の取扱ひをうけ、他人のゆるされない借家権を持つてかく堂々と暮してゐるのを見ると中々あなとりがたい手腕と思はれる。丁度二人ぎりになつたのを幸ひ私は此國の共産黨についていろ／＼質問した。氏はいふ「何しろ此國では黨派といへば共産黨より外ないので、しかし此頃の日本の政黨の様子を見ると、やはり考へなければならぬと思ひます」といふ詞に答へて私はそれに同感し、同時に(以下空白)

#### 十月廿八日 晴 暖

昨夜の宴會の様子や何かを報じてやりたいと思つてそれ／＼へ昨日のところで買つたはがきを出した。

ゆり子には眞先に花もないと思つてゐたモスコーに

思ひきや、花なしと聞きしモスコーの

サボイホテルの白菊の花

(これは書き送りはしない) たゞ菊花爛漫として堂に満ちてゐるのを見て驚ろいた事など報じた。

#### 十晴廿九日 快晴 暖

〇〇には前露帝ニコラス陛下一族滅亡の場所があり、又そこには寶石やいろ／＼のものが賣ものにあるといふので、ねぼうの私もぜひ一行におくれず起きて見たいと、早朝から目を覺まして仕度をした。處がそれがやはり聞きもちがひだか思ひちがひだかして中々見つからない。とう／＼お晝近い頃、それつといふので皆しておりて見る。もう大分北露に入つて吹く風が身にしみる。丁度住年の北海道——札幌の雨空に似てゐる。しん／＼としみこむやうな寒さだがまだ雪は見へない。かなり此國の語に明るい〇〇氏がしきりに大聲で聞いてゐるようだが、とう／＼わからないで無據名所のゑはがきや、大理石で造つた動物のおもちやを買つた。あるじはこゝで有名な夜、色の變るといふ寶石を十圓ばかりで買つた。見渡す處僅かこの名物の賣ものに異國人の金を集めようとして建つてゐる。實に寒村だ。こんな處で皇帝一族が無慘虐殺されたのか——今日も亦この北亞細亞の空は暗雲低迷して又雪もふらふとするか、陰鬱な空模様だつた。

私はこの歐洲に来て著しい道徳の墮落を見た。青年男女の貞潔、節操——そんなものは全く地を掃つてしまつた殊にこの汽車の中では退屈しのぎに獸性を發揮して若いものは勿論、かなりの年頃——知命をさへとつくに通り越した。うな老人まで一團となつて憚りなく大口をたたく。聞きかねて私が一寸冗談らしく口を出す

「あなたは明治ですか？ それぢやあ——」といったきり、話せないといふ心を明らかに語氣にあらはして——私はいくにも亦晒然とせざるを得なかつた。

十月卅日 曇 冷

今日の晝飯は愉快だつた。日本人ばかり十三人も集まつたのだ。それで小さい方の食堂を占領して日本人ばかりの食堂にしてしまつた。

十月卅一日 雪

起きて見ると満目たゞ白皚々たる雪だ。やつとサイベリアといふ感じが切實にする様な気がした。それは實に廣漠として天も地もたゞ雪に埋もれつくしたやうな心持ちだ。山も川も草も木も——森羅萬象皆掩ひつくして、「あらゆるで海のやうだわ、何にも遠くて——」スエ子がかういつた通り——その中を兼て聞いてゐた通りの犬が櫓を引いてゆくのが見へる。何でも四五匹はゐるらしい。そしてかういふ犬櫓が四五台もつゞいて見へる。私は或年東京のたしか明治座か何かで「鈴の音」といふ芝居を見た事をふと思ひ出した。

十月卅一日

今日は、やポブラも見へずさながらに

枯野の海をゆく心地する

雪にあけ雪にくれつゝシベリアに

夕やけ空をめぐらしと見る

茜さすあなたは西かシベリアの

シベリアの原に陽の落つ見へねど

十一月一日 雪 室内七十二度

今日も亦雪だ。二三日前から時計がはつきり分らなくなつてしまつた。モスコイ時計だとか、シベリア時計だとかいつて、今朝は二時間も時計がちがふ。

十一月三日 晴 明治節

今日は明治節だ。はるかに明治大帝の御偉業、御盛徳を偲び奉らんが爲こゝシベリア鐵道の列車内に、めぐらし集まつた日本人十三人——折からの積雪に何はなくとも晚餐にはせめて盃をあげて萬歳をとなへようと、昨夜の食卓で急に發議せられたのがとう／＼實行される事になつたのは何といふ快い事だらう。

折からM氏が持つて來られた白米一升、それを食堂の料理番にたのんで白いおかゆにたかせ、私たちの持合せの味つけのり一かん、くだもの十四五、アップリコットの瓶づめもそへて持ちよつた。おかゆは一同がたのしみきつてゐた。出來たのを見るとやはり西洋式にしんのあるたき方だつた。が、ホカ／＼と暖かさうに湯氣の上るお米の顔を見た時、私できへある興奮に似たものを感じた位だ。

「明治大帝は偉大なお方であつた。そしてその御治世の間あれほど大業をなさつたお方は御曆代稀に見る御方であつた。今この荒涼たるロシアの——此シベリア鐵道の中にわれら婦人、子供までゐて、此記念すべき日にこの食卓に列する事は、日本におけるより以上に意義深く、そして御嘉納下さるであらう——」

……いひつゝ私は、西村の父が大帝に奉仕してその御盛徳と傑出せる御人格に推服しつゝ幼い娘——私——をよんでは、いかにも崇重な態度で語り聞かせた事、特にかのニコラス二世が渡日された時の大津事變——其頃私はまだ華族女學校に通つてゐて、父は當時の華族女學校長だつた——丁度その事變のあつた號外を見た父は沈着な日頃に似ず顔色も蒼白だつた。

「よし江、今度の事は一大事だ、おれは早速出仕しなければならぬ」

かういつてあはたゞしく馬車を宮城にはせた父は、歸る間おそしと案じてゐた家族にかういつた。

「恐れ多いが流石は陛下だ、もうおれが出仕した時には既に陛下はこの一大事に驚愕しきつた宮内省の大官連を御前に召されて、御見舞に行幸と仰せ出された」

「何といふ御英斷であらう、此時に當りこれ以上の處置があり得ようか」かういつた父の眼は感激の涙に光つてゐた。

かうして父は更に學校に行き、其頃盛んに教をよるこんで生徒たちの作製した刺繡の——クッション、手提袋等——各種のわが國特有のものゝみを集めて御見舞ひのため捧呈すべくそれゝ命令を下した。

「外の事とはちがふんですもの、何でもかでも持つて來ませう——」

名門の令嬢たちを網羅した此校であるだけ中々立派なものが多がつた。そして皆おしげもなく皆學校にもちよつ

た。やがてこの輝かしく美しいものは皆御見舞品の中に加へられた。この一大國難の意外に容易く解決され前額にうけられた傷さへほどなく全治して、國民の擧げて捧ぐる熱誠に總ての感情は融和され、和氣あいゝゝの中に目出たく歸國され、上下ひとしく安堵の胸をなでた。

爾來幾年、私はふと又かういふはなしを聞いた。それは、たしかゝの日露戦役の勃發せんとした前後だらうか、

「ロシア人は中々あの天津事變を忘れてはゐない、そのしようこには、ロシアの軍艦の艦長室には必ずニコラス陛下の寫眞があり、しかもその前額にはかの忘れがたき前額の負傷が擴大されて鮮やかに印されてゐる。それは軍艦のみか小中學校の教科書の中に必ずそれが挿入されてあつて、何か祝祭日のある度に講堂ともいふべき處にかゝげられ「忘るなよ——」といふ風に、幼い國民、青年にまでかたく印象づけられるように吹きこまれてゐる」

これを聞いた時、われゝゝ婦女子までも恐ろしい未來を想像せざるを得なかつた。

春秋こゝに幾十回轉じて、はからずこの露國に彼が終焉のあとを見て感慨無量の思ひがする。

十一月六日 晴

今拂曉、いよゝ十日間餘にわたる汽車の旅を終つて浦鹽に着くといふので、昨夜は早く宵の中に寝についた。さうだ、多分それでも十時頃だつたらう、何しろモスコウタイムだの、どこタイムだのといつて、一向はつきり時間わからなくなつた此車中では、かういふ時甚だ心細く感じた。

生憎今夜は又どうかして汽車はやたらにゆれる、停車も度々してはそのつど大きな聲で何かさわぐ聲が耳にさわつて、ほとんど夜中すぎまで寝つけなかつた。



壽江子も亦かあいさうに私の頭の上でモゾ／＼ギ／＼、これも又耳にさわる。その中ねつけたと見へてふと目が覺めるとカーテンのすき間がほの白い。おきやうかな、と思つてゐるとその明るさは外でさわぐ人々のランタンの光りでゞもあつたと見へ、しばらくするとふつと消へて又もとの闇黒さにかへた。

これちやあまた／＼早いんだな——かう考へて又枕につかうとした。やがて卅分もたつたかと思ふ頃、ドアの外でコツ／＼といふ音がする。ノックにしては何か金屬の音のやうだ。この様子では何か修繕でもしてゐるのかな——かう思つてゐると、外であるじの聲がする——大いそぎで開けて見るとやはりそれはあの忠實さうなロシア人が門並におこしてあるいた音だつた。

實はその前の晩まで、歸る時は——あの番人にも是非感謝の一言をいひたいと思つてゐた——それさへ出來ずにあはたゞしく用意にかゝつた。例の通り茶をのみ、林檎の一片をたべてしづかに車のつくの待つ事になつた。「海が見へる」

誰かかう叫ぶ聲に見出す窓外には、ほとんど脚下とも見へるやうに近く展開された海面——ほとんど幾年にわたつてあこがれてゐた壽江子は大よろこびだ。

間もなくとまつた汽車から私はやはり手をとるものもなくおりた。氣の毒に思つたと見へて、外にゐたロシア人だか——今考へるとあの例の番人だつたかもしれない——手をとつてくれた。かうして下りた車外の空氣は清烈な寒風が刺すやうに顔を打つた。——以上十一月七日したむ。——

時は今四時に垂んとし、天草丸の讀書室、誰か日本人の弄んでゐる蓄音器の音が盛んにしてゐる。先刻まで油を流したやうに静まりかへつてゐた海面は、ソロ／＼動きはじめて私からだも左右にゆれる。(終)

# 日記抄

## 昭和三年

十一月二日 雨

いつも日記をつけようと思ひ立つても、きつとなしとげないで、白紙のまゝの當用日記が年々無駄な場所ふさげになつてしまふのはいかにも恥かしい様な氣がする。それでかういふ風に自由な態度で折々の感想や出來事とかかうと思ひついて、このかき初めにする。

此頃の日和癖で又朝から折々かゝつて來る時雨もようをかなり氣にしながらも、昨夜から國府津へ先發した國男壽江子、下女たちに約束をたがへまいと、例の通り朝からたてこんで來る用事をすまして——三越に命じて佐藤靖氏への祝ひ物（賣づくしの飾りもの）や、佐藤功一氏の宅へ梨子一箱弘道十月號一冊、名刺に、今日は是非上りたと思つたが雨天で心に任せかねるからとかき、竹内に何か國府津に用事はないかと尋ねる。

こゝまでかいてふと思ひついたのは昨日が一日で英男の命日、彼れのいかに勉強家で、致々として倦まず、遂に最後まで勉強で終始した事を考へると、これが私の現在にとつては第一に鞭撻される大きな力なのだ。昨日から此日記めいたものをかくべきであつたと悔まれる。しかしもう過ぎた一日だ。とりかへせない。よし今からでもと、皆ねたあとの食堂の靜かな時を利用してかく事にした。

十一月三日 快晴 明治節

昨夜更けるにつれ益々つよく成つて來る雨風の音に思ひ切つてゐた今朝起きて見ると、午前五時、意外にも天氣

は快晴で、いかにも旗日らしいのどかさ。丁度此前羽村小學校の運動會で近く兒童のどよめきも聞へる。さぞ此快晴に皆雀躍してゐる事だらうと自分までがほく笑ましい。

此頃又更に何事につけ英男の事が思ひ出されてならない。引續いてもうどうにもならない天質の差といふものが折々私をどん底まで追ひ込む様な淋しさに驅られる。かういふ時たゞこのかく事——これのみが私の心を僅かに安定におき、辛うじて生きてゐられる様にする。しかし、これもいつまでつゞく安らかさか。何しろ、目の病がだん／＼私を蝕むと見え、新聞もかなり私をつからせる。人に讀んでもらう——これも誠に上迂りがする様で、學力の足りないものにおしへ／＼よませる、頭が疲れてい／＼かげんいやになつてしまふ。

夕方久しぶりに入浴し、百合子へはがきをかけた。

國府津へ立つ前日弘道會へ御即位奉祝歌三首。

我大君今日御位に即かせ給ふ、海の内外あけてほき奉れ

鳳凰まひ麒麟も出けん此佳き日、瑞氣あまねく五大洲に滿つ

折しもあれ菊の盃くめど／＼、つきぬや君がよろづよのこゑ

右の三首を割田氏に宛て送る。

同日、在モスコ―百合子より事務所にあて「イツタツカヘンマツ」の電報着のよし齋藤氏より報あり。

今日百合子へ「巴里あて」はがき出す。

十一月四日 曇又晴 寒し

昨夜から今曉にかけて俄に冷氣を感じる。東京はさぞかしと思はれる。今日は國男やすゑ子、咲枝たちがいよく東京へ歸るといつてゐる。それで、せめて居る中少しでもと思つて、すゑ子に此頃大流行の圓本の中講談社の修養全集をよんで貰ふ。どうせ通俗的なものだらうと高をく／＼つてゐた自分の耳に、意外にも尊い或物が響いて來る。歡喜にたへない私は、遂に耳をかたむけざるを得なかつた。

あゝこれだ、此場合私の心に滿ち／＼てゐる大なる悲しみに克ち得る瞬間でもあるといふなら、全く此聞入つてゐる瞬間だ。永劫に渡つて偉大なる聖者の聲、大なる力だ。大なる生命だ。釋尊が托鉢の朝、貧しき娘より受けた米のとぎ汁。身國主の尊貴より脱して一介の求道者となり、物欲の總てを脱しつゝも尙且は忍苦の行ひに、敬虔の念を起さないものがあらうか。

十一月八日 曇 小雨

今朝は英男の百日祭ゆへ早朝より準備にかゝる。旦那青山墓地へ行かれ歸りに菊の花を神前に供ふる爲買ひとゝのへらる。

白菊の花すかれたれど清げなる事此神前にはふさはしく思はれた。」

十一月十日 快晴

いよく今日御即位式の大典が擧げさせられる日だ。めづらしい秋晴の空高く、誠に天皇日和とも稱へ奉るべき空だ。せめてはその祝意の一端を表さんために、表二階に天壤無窮のかけものをかけ、兩陛下の御眞影を床間にか

け一同拜禮した。

明日はもしかしたら谷口辭三郎さんの母堂の七十の祝宴に行かれるかもしれないので、御祝ひに歌をかいてあげたいと一枚だけかけた。歌は

此よき日君七十路をこゆる磯の老松幾千代までも

百歳の坂もやすけくこえん者この七十路を麓にぞ見て

十一月十二日 晴

昨夜古田中孝子さんのはなしに、東京高等の英男の同級生、記念日に當り英男の昨夏旅行せし時寫せし風呂場に入浴中の寫眞をかざり、皆黙禱せし事を聞く。「あゝそんなに考へてゐてくれるのか」

實は此間中から旦那と相談してゐる事の中には此友人たちを招くか招くまいかも問題になつてゐた。そして、どうしても英男の心中を考へ又書き残したものを見ても、一度は何かの機会によびたい様な氣もする、ぐづくして百日もたつた今宵偶然古田中さんを通して、友人たちのやさしい心づくしを聞いて、私は急にすまない様な氣がした。

一昨日かなりおそくまで自叙傳をかいてゐた。するとだん／＼目がつかれ、ねる事も容易でなくなつた。自分の事はともかく、英男の傳記——小傳とか何とか彼の短かく、しかし完成した生涯をかくのは私より外ない、さうだこの母よりないのだ。どんなにまづく、どんなに拙くともかゝなければならぬ。それがこのあんなばいでは、或は自叙傳も半途でかけなくなるかもしれない。是は大變だ。——よし、自分のは一時中止して英男の方をかゝう。か

う。決心はした。しかし、追想して見ると、彼は何より世話をやかせない子供であつた。その爲と、大分その時分から記憶がにぶつてゐたらしい自分の腦裡には、百合子時代ほどの記憶が残つてゐない事がいかにも／＼残念だ。彼をやる皆からも話題を集めて見やう。そしてかなりまとまりさうな時になつてから、意らず書きつゞけやう、それまでは、やはり自分の自叙傳の方をつゞけやうか。

一昨日高松文子さんから手紙と、政雄さんの唱歌「死を急ぎし一人の青年を憐みて」を送られ、文子さんの方は英男の一挿話がかなりよく表はされてゐてうれしかつた。今此作歌に和して左の文あり

高松政雄氏の追悼歌に和す

一、

道を求めて

やまざりし我子

吾子！

ゆきぬ

夢ならで

高き御空に

二、

人の幸をも

祈りてありし

吾子

ゆきぬ

保ちつゝ

永劫の清さを

三、

永劫の清さを

遂に保ちて

吾子！

ゆきぬ

祈りつゝ

人の幸をば

四、

死後の力を

堅く信じて

吾子！

逝きぬ

夢ならで

高き御空に

今夜は齒が痛み、且腫れて頭痛がする。

かきたい事を中止して、残念でもねる外なかつた。

十一月十三日 曇後晴 (國府津)

こゝはやはり何といつても東京とは比べものにならない程あつたかだ。朝おきると一寸の間足袋を忘れる位だ。

今日も天気はうらゝかに晴れて風もなく曇をした様な海面だ。久しぶりで鮎やかとれた。

昨夜はかなりよくねられて十一時頃までねた。今朝は拂曉偶然二人共目を覺し、めづらしく物柔らかにいろ／＼心の状態についてはなし合へてうれしかつた。何しろ、英男の死をして意義あらしめんがためには、たとへ壽江子や國男に對しいろ／＼の不滿や何かとあつても、むやみに立腹してしまはず、靜かに教へ導く事、それが即ち懺悔滅罪の道ではあるまいか。どうかこの心がけて苦しくても、つらくても、我子を導き助けて、彼死後の家をして確固たるものにならば努力して進展せしめねばなるまいといふ——その事にめづらしく同意し、むやみに口やかましく小言ばかり言はぬやうにと話し合ふ事が出来た。

午後彼の遺書類を見る。追懷更に新たに胸せまり見るに堪へず、且、昨日來日も工合よからず。由てそれ／＼包みかへて又の事にする。壽江子も明日の學校がある爲、夕方の汽車にて歸京、明日又來る筈。

久しぶりにて入浴す。水澄みて非常に快し。浴後、色々又洋行の事につきはなす。何より心にかゝりさうなのはやはり彼の事、ゆく先々の名所々々、珍らしきにつけ、美しきにつけ、彼あらば——この感慨今より胸に迫る。是

のみいかに悲しくつらき事ならんと、又しても此事にのみ日は暮れた。

十一月十六日 晴 暖

此頃の毎日は「生きなければならぬ」かういふ理屈でむりに生きやうとする——苦しい事だ。乏しい天分の母だ——かう考へる時、私の力はスツカリ落ちてしまふ。この乏しい母の力を絶対に信じて苦しみぬき、遂には窮すれば通ずる底の自力によつて、勇ましく昇天した英男を憶ふ。果しなく大きな悲しみだ。

二十年の短い生涯、この間でも絶體のものとして愛され、又尊敬された私は幸福だと思はなければならぬ。同時に、かくまで、信仰にまで母を愛した我子、それを褒めた自分はどうしやうか。

朝起きると又くりかへされる日々、生活が丁度旅程の幾日を送つてゐる様に思はれる。これが幾日たつたら目的の處につくのか、その目的は何？ 母死なば——といった彼、死して嗔我はいかにせん。

十一月十八日 雨 寒

昨夜からひどい風が、何か鳥の鳴く様な聲を立てた。今朝起きてよく聞くと風の聲らしい。一兩日の暖氣に引きかへ、今朝はストーブがほしい。

今日は壽江子が歸るといふので、東京電話をかけるやら何やら、どことなくあはたらしい。

東京から婦人公論、婦人畫報が届いた。婦人畫報の中に百合子の寫眞（在露）及び活躍してゐる容子がかいてあつて、一寸嬉しい感じがした。（ニチキナ婦人會）を設立し、かなり活躍してゐるらしい。一寸あの子が、かういふ

社會的に活動するといふのは意外な心持ちがする。

十一月十九日

古田中お孝さんから澤正の切符を頼まれる。一年間は見たくないと断る。前の方に二つ場所を取つたとの事、氣の毒だが一年間節約且服衷の氣持ちを今更調すのもいやだ。

留守中おみやさんが來り、お供へを持つて來たとの事、金澤寅次氏よりもくだもの、つぐみのかすゞけを貰ふ。高松政雄氏夫妻にやつと返事をかく。歌三首を添ふ。

十一月二十日 晴 暖

午前中横田利邦氏より電話があつた。出て聞くと、とう／＼兼て待ちに待つてゐた博士號を得られたさうだ、電話口に出てさういふ横田さんの嬉しさに上づつた聲が、そのよるこびを遺憾なくあらはしてゐる。あの人の事だもの、わく／＼するほどのうれしさだらう、もつともだ。奥さんは尙一層、天へも上るやうに——と、ほ／＼と嬉しきさへ感じる。直ちに青木堂に命じビール二打、菊見せんべいなど病院へ届ける。

世をあけて輝ける年君更に月のかつらの冠を得つ

二三日前百合子に托されたといつて手紙をもつて來てくれた人があつた。私は折あしく髪をゆひかけてゐたので壽江子にあつてもらふ。何でも商人風の人で勝手口から來て、上つて行つて下さいといつても辭して歸つたとの事。久しぶりの百合子の手紙は、わく／＼させる程のうれしさであつた。しかし、やはり子を持たない娘心だ、母の

心に同感させようとするのは無理で、しかし私の案じた通り、又英男が豫言した通り、彼の死に對しては、現在に即する事のみを知つて、足一步地上を離れる底の崇高さはなかつた。

百合子は泥塗れになつても生くる事を善とし、總てを捨て、貞潔を保ち青年として立派に人格を完成せんとした彼とは、遂に平行線に成つてしまつた。——並行線になり了らうとは、英男がかねていひおいた詞であつた——どこまでも私は英男の讚美者だ、く。

十一月廿五日 暖 晴

今日は咲枝さんが来て、國男や壽江子關君と上杉邸にテニスに行つた。  
夜、旦那星ヶ岡茶寮で還曆の祝ひがあつた。六合會の催しださうだ。

十一月廿六日 温暖 晴

青山に旦那と同乗して行く。秋の日は空間はやくほのかに人顔のわかる位に薄暗くなつてしまつた。花やへよらずに直に墓前にぬかづく。どなたの御志の花か、夕やみの中に浮き出た様に眞白く見える。丁度月がほのかに上りかけてこゝばかりにかゞやく様に、かなり明らかな光りを投げてゐるのも私にとつて嬉しかつた。

今夜は國男が倉知へ夕飯に呼ばれ、宅は誠に淋しい。壽江子もしきりに不平らしいので關さんに頼み一しよに三田まで行つてもらふ。そしてめづらしく今夜は壽江子が倉知へとまる筈。明日は陛下還御の爲學校が御休みゆへさうしたのだ。

十一月廿八日 寒 晴後曇

今朝は結霜するといふラヂオの豫告通り起きて見ると中々寒い。壽江子は昨夜から鼻がはれたといふ事で登校しない。見ると、さしたる事でない。例の事だとおもつて激勵して午後から出す。

今夜は横田さんの祝ひを花の茶やで催すつもり、行つて見ると助川さん、養子——小口氏と臨時客に成る。談論風發なか／＼面白い。助川氏のエキセントリックの様な處が、いかにも學者で面白い。今朝は永年苦心の痘瘡菌を發見したさうで非常に愉快さうだ。しかし、中途でどうしても菌を發見する事が出来さうもない時は失望して死を思つた、との偽りのない話、誰でも眞剣になる人の半面にもつ悲哀である。眞剣さを知るものでなければ眞箇の味をしり得ない。しかし私のもつとも心を打たれたのは、助川博士の母堂が、同氏の發明の成功を祈る爲、水垢りをとりたる事だ。こゝにも亦命をおしまない實例をきく。何事にも眞剣でなければならぬ——

十一月廿九日 曇 寒

日本弘道會の割田氏に、弘道十一月號の私の歌が「時しもあれ」のしがぬけてゐた事、英男の遺稿はあとに願ふ事を返事を出す。

十一月三十日 晴 暖

此頃毎朝起きるとこつと目の前をいろ／＼の點々が見へる。視點の外にやはりこれが白内障眼だとおもふと、いくらしよげまいとおもつても、心がしづんでしまふ。

明日が土曜日で國府津へ行く事にきめたので、明日の英男の御命日を今日にくり上げて、いつもの通りすきさうなものを供へ自叙傳の如きもの（第一冊目を靈前に供へる。）同時に

「汝がいひし死後の力は今こゝにあらはれて此一冊となりぬ」の歌をそへて手向く。

事務所のYさんのお母さんが見えた。七十だといふのにシャン／＼で市外から來られた。近日事務所につとめてゐる御子息が、他家に養子になり結婚されるといふ御披露だつた。チョコレート一箱御みやげ、其婦人のはなしに、かの宗家の海老名禪正さんの御宅では自火を出して子供さん十八を頭に四人皆焼死、奥さんは乳呑兒と別室にゐるた爲助かり、御主人は子供を助けようとて大火傷をしたが命は助かつた。しかし財産全部烏有に歸して一物も残らなかつたといふはなし。

神に仕ふる人でもやはり不幸を與へられた。これが憂き世といふのだらうか。此老婦人も一番力にし又孝心の深かつた二男の、四十にもなり子供三人をおいて死なれ、一度に四つも五つも年をとつたといふおはなし、誠に同情に堪へない。しかしやはりこれだけ——十人の子をそだて、シャンとしてゐる人だけあつて、女らしい御自慢タラ／＼の御話は一すいやだつたが、きかない氣でなければ獨身で十人の子を育て、はゆかれまい。しみ／＼人生といふ事について考へずにはゐられない。

水野さんに電話をかける。奥さんやはり風邪でねてゐられるとの事、電話に自身出られた。到來の富有柿を籠に入れ竹内に持たせて上げる。見舞の手紙をつけて。

### 十二月三日 曇 寒

昨夜來風強く、北の方の島にてはまるで鳥の泣く様な聲がする。壽江子と二人ぎりの夜は何といつても淋しい。今日も晴れかゝつて沖の方が明るく見えた海面が、又午後から波の音高く、ひどく暗くなつて見える。漁船も一向影を見せない。どうかして此二三年むやみに不漁つゞきた。海邊のしげほど淋しく寂寥さを覺えるものはない。あの景氣のいゝ地引網の聲、ほらの音、自動車、海岸の淺濱に並ぶ澤山の祝ひ膳、お銚子一本に鯛のさしみ一皿大漁衣をきた網元の勇ましい姿——それもこれももう二三年見られない。今年の暮も亦鯛はとれないだらうか。

壽江子の喘息がまだ全快しない。東京へ歸つて冷やかな空氣にさらされるよりは、來た次手だ、十分なほしてかと思つて東京へ電話をかけ、もう一日休ませる事にした。

引地ドクトルに容體及願狀出す。

### 十二月五日 晴 寒

武者小路實光氏から國府津留守中英男の友人について名前を知らせてくれた。よく禮をのべ、其中叔父上にお目にかゝりたいよしをのべ、はがきを封入都合をきく。百合子不在中ゆへ、かの新しき村への寄附金の中へ、少額なり入れていたゞきたいとおもふからだ。

昨夜國府津から歸ると、旦那は大河内子爵の招きに應じて、谷中の無私庵といふ處で御馳走になり、子爵自畫のかけものを貰つて歸られた。その家は、あの大津畫の中興？ 楠瀬日南といふ人の宅で、妻君はそれ者上りで料亭を開いてゐるのださうだ。料理は御自慢程うまくはなかつたさうだが、その一幅は達磨——大津畫式——で、泥繪



具でかゝれ表具は上下の古裂れで子爵特有の配合面白く見られる。丁度明夕は獨逸大使ゾルフ氏が歸國の送別會があるので、かねて貰つたビール呑に何かお返しと考へてゐた矢先、最も日本趣味の面白い——この幅こそ子爵にその旨をはなし、今夜の送別宴に持つて行かれた。

今日は國男活動へ行くので夕飯には多分歸らぬらしい。日頃屈んで製圖ばかりしてゐる、家に居れば又ラヂオばかりいちつて、郊外の空氣に親しまないのが誠に不健康らしくて氣になる。どうかしてもつと運動をさせたい。

今日は横田さん上げる短冊をかく。どうかして二枚共氣に入らない。筆がかたくて大きすぎるらしい。堅い感じがしていやだ。明日は筆を買つて試みよう。

#### 十二月六日 晴 寒

今朝はどうかして——それは曉方又例の目が覺めて英男の事が考へられてならなかつたのと、續いて旦那が目覺め

「子供の事は其れ自身の力で行くべきで、さうく親の力にのみ頼るべきでな」と

「いゝえ、それは子供自身はさう考へるべきであつて、親の身になればいかに子供が意久地なしでも、それは本質的のものならそれはやはり悲しむべき傳統的の缺陷で、子供自身でもそれは不知不識の中に持ち來した缺陷で、親でなくて——親身の親でなくて誰が救ひ得るだらう。あの中野のお婆さんなどは、孤兒の惡癖さへ直して、遂に博士にさへしたではありませんか」

かういつても尙頭として、親は親、子は子といふ風に思ひ捨てやうとする心持ちには、いひやうのない憤懣をさ

へ覺えた。

#### 十二月八日 晴 寒

午後から藤谷さんと神谷さんへタクシーで弔問に出かける。もうそろそろ夕方になり、あのラツシユアワーとでもいふのか往さ来るさめまぐるしい小路をかなり歩く。壽江子がゐるので大分頼りにはなつたが、久しぶりで草履で歩くと、何だかむやみに同じ背丈の人達——自分が低くなつたやうな氣がして危なかしい事夥しい。しらすしらす増長したものだ。目がわるく、生命の危険からやむを得ない事情があるから少しも心にやましい事はないやうなものゝ、さもなければ實に人間の成り上る氣持ちがわれながら淺ましく思はれる。

行く先々で百合子の事を聞かれる。返事も出来ないほど御不沙汰なのはどうしたのだらう。

#### 十二月九日 晴 寒

今日はかなりいろくの事があつた日だ。

まづ第一に今日の午後一時には武者小路實篤氏に面會の約があるので、十時には遅くもおきないと間に合はないうとくしてゐていゝかげんの時ふと目が覺め時計を見るともう十一時、驚いて支度にかゝり、それでもどうやら十五分位の遅刻で間にあつた。成程噂に聞いた通り武者小路さんの御宅は外交官だけになかく堂々たるものだ。車の音を聞いて、すぐあの武者小路實光氏が玄關に出られた。目のわるい自分は、たゞの書生かと思つて一寸會釋したまゝコートや襟巻をとつてゐると、ツイと奥の方からあの實篤氏が、着流しのまゝ出られた。一寸驚いた自分

は、どうも恐れ入りますといひつゝ、いそいで女中にコートや襟巻をかけてもらひ案内さるゝまゝ、應接室に入った。何でも中々ひろい——一寸二十畳敷以上の二間づゝきでソファや、ファニーチェアがなかく立派にとつて見える。初対面のあいさつは聞こつた。英男の事が一時に胸につきせまつて来たからだ。

「英男があなたの作品を第一によんで——」といひながら、あの熱心に懐に入れてよみくした頃の彼が、真正面に私の目の前に浮んだ。

「ほんとうに僕のバイブルだ、おかあさま、一寸僕よんできかせやう——」

かういひつゝ又懐から出して一句をよんで聞かせた彼——その頃はどんなにか私も彼も満足し、愉快であつたらう！ しかしそれも遂に彼をして満足せしめ得なかつた。

「おかあさま、武者小路さんのいろくゝの事には感服するが、あの新しき村の始末には得心が行きかねる——」とかういつた彼、そしてぐんぐん太陽に向つて豆の蔓がのび上る様に、日にく高きを望み、光りを仰いでやまなかつた彼は、つひにく總てを脱離して、己れの理想境に突進したのだ。瞬間にこの種々の思ひは胸を打つた。苦しい沈黙がつゞいた。

何だか一言武者小路氏が其沈黙を破つた。これに轉機を得て、やつと又はなしの糸口を見出した自分は、辛うじて英男の生前からつゞいていろくゝの事もはなせた。

紅茶が出る、お菓子が出る、番茶が出る——火鉢まで足の下におかれる武者小路氏の案外常識的なのは一寸意外だつた。そしてなかく細心におもてなしをうけた事は誠にうれしい事だつた。はなしの中に武者小路氏の御姉さんが二十二歳で亡くなられ、母上がひどく悲しんで、いつまでも忘れかね、とうくどことかの神様へ信心をは

じめ、決してもう逆さま事を見ないやうにといはれ、外の子供はまるで閑却されてしまつたといふ御はなし。何處でも親心は皆同じもの、悲しいのは人生別離のあることである。

明日は又武者小路氏、新しい村へ歸られるといふので辭して歸つた。二十五日頃に又歸京しますから、入らつしやいといふ事であつた。

それから倉知へ行き、一馬氏の事に付注意をして歸つたのが六時過。

國男と壽江子が咲枝さんの初音楽演奏に行く。午後九時半頃歸つた。少しは間ちがへたが先づいゝ方だとの事。

### 十二月十日 晴 風 寒

今朝から又引地ドクトルの薬をのむ。ゲンノシヨコを呑むと尿量が非常に減じて来るが、その代り少し減じすぎて臭氣がひどく、どうも腎臓によくないかといふ様な感じがする。それでこの薬をのむと尿量もふへ、又からだがあたゝまる。連用して見やう。

けふ偶然弘道會へ電話をかけた。すると、第二の土曜の講演を又忘れた事を發見した。大變すまない事をしたと思ひ、關さんを辻村さんと山岡さんにいつてもらひ、申しわけをする。此次の十五日には是非出ねばならないと思ひ、度々奔走する。

百合子からまた何の便りもない。どうした事か、少し心配になつて来た。明日は加藤露國大使の爲晚餐會の催しがあるさうだから、聞いていたゞきたいと思ふが、例の通り甚だ心細い。

引地ドクトルか、秋田雨雀さんへ行つて相談して來やうか——

十二月十一日 曇 尙寒し

今日は横田氏博士の御祝ひで、夕方から借樂園へ呼ばれてゐる。例のお腹工合を心配したが、いゝあんばいにしてる事もなし。

壽江子同伴で行く。

階下の一室でよく見ると、どうもいつぞやの夏頃英男や何かで食事した座敷らしいのも先づ思ひ出の種になる。順天堂の人と慶應の先生方、かれこれ十二三人の席だった。横田さん新調の——レディーメイド五十何圓とかのモーニングのはなしから例の通りいろ／＼新博士中心に擲論の花が咲き出す。婦人は横田夫人、助川夫人、私達二人とだけで、内輪同志の様な一味だ。Mさんといふ老紳士——かなり頭髪の白い太った人——下卑た話しをしたいやうないや味な老人。殊に目についたのは、皆してK先生、K先生と尊稱を奉つてゐた紳士——年頃は私のわるい目ではどうしても三十前に見へる——諧謔百出——だん／＼下品になりがちな——年に合せて馬鹿にすれてゐる——いやな若紳士、一體何者だらうと観察がちに私の心は成つて来る。やがて追々御酒が廻るにつれ此紳士、急にわれわれの方へ突貫して来て壽江子にまで冗談をいふので、壽江子は逃げ出してしまふ。私は例のきかぬ氣が頭をもたげた。私はちやんと彼に向ひ合つた。

「お嬢さんが逃げたから、さあ奥さんにはなしを聞いて貰はふ」

かういひかけたがにつこりともしない私に對しては、流石に手持無沙汰に成つた。とう／＼百面相のまね言をして、てれかくしをしてゐるが、それきりだまつてしまつた。それをしほに私は氣にかゝつたす江子のあとを追つて室内を去つた。

外の廊下には、このおしやべりののんだくれを避けて、既に横田夫人と助川夫人がゐる。す江子をたづねて一しよに支那風の一室に入った。そこへ横田さんや助川さんも見え、しばらくはなして先に辭して歸つた。

十二月十三日 曇 寒

昨夜山岡女史より依頼の裂地を、隣りの有尾修治氏に鑑定を依頼し、到来の京都の八つ橋をおくつた。朝の内岡家の御子さんに右の裂地を持たせて「裂地は百年位前のもの、價格約五十圓位」との事が名刺にかいてある。直ちに竹内を山岡氏に遣して報告さす。

十二月廿日 晴 寒冷

今朝あたりの寒さはいよ／＼寒に近い心地がする。表へこぼした水までが氷つてしまつた。しかし天氣がいゝので雪でもふらない中にと、青山から方々お墓参りを企てた。

墓前に、美しい花が株欄の葉をませて供へられてゐた。武者小路實光氏の名刺がある。噫かし英男も地下には、えんでゐるだらうと、又胸がいつばいになる。

國男を誘はうかと思つたが、まだ事務所のひけるのは三十分も間がある。怠けさせる様になつてはと思つてやめてしまふ。事務所のI氏が新婚のあいさつに來られた。以前おあひした時から見るとすつと大人らしく、花嫁姿うつくしい新夫人と同伴されても稚氣の見えぬ位に成られた。實社會に出たといふ事はかなり大人びさせるものだ。湯淺さんの實家——京都の家——へ電報で「ロシアカラタヨリナシヘン」といふ電報を返信付で打つた。夕方「セ

ンツキセヒタヨリアソノゴ

といふ返電があつた。今朝は秋田雨雀氏へも關さんを使用して、到来の林檎を持たせて百合子の消息を聞かせる。門口に來訪謝絶——のはり出しありたる由にてやむなくあはずに、娘さんに用事をはなす。雨雀氏より書面にて、あちらには友人もあり心配はあるまいとの事。

十二月廿四日 曇 後雨

カラリと晴れ渡つた様に見えた空が、午後四時頃から雨になる。めづらしく早朝から海へ出て、小川のあたりに砂山を見つづらしがつた江子は、午後から又ゆかうくと女中をせきたて、行くとすぐ雨になつてしまつた。

東京から奈良漬の樽がとどく。

私の目の工合がどうしてもわるい。右の目にチラ／＼見える紐の様なもの、とれるか／＼と朝起きて見てもとれてゐないでがつかりする。酸素注射した左の目の方が其當時はかなりわるかつたのだが、その方が今以て變らな——つまり進まない處を見ると、やはり酸素注射がきいてゐるのかと思ふ。これはどうしてももう一度大阪へ行つて、酸素注射をして見るより外はあるまい。それよりも又新潟へ行つて熊谷博士の診断を受けやうか。それにしても此頃頻發する悪寒——ふるへ——動悸——これには閉口してしまふ。とにかく明日は一寸かへつてこの事について、よく考へよく相談しなければなるまい。とにかく目の工合が悪くならない中、否目の見える中英男の傳記だけかき終りたい。と思ふと氣が氣でない。のんきに過してゐた過去が恨めしい様にさへ思へる。

是が、百合子の所謂甘へた生活の過去であつたのだらう。

五十を知命といふ此歳に及んで甘へた——それが私の過失といへやうか。否過失ではない、單に心のゆるみだ。しかしそれも此糖尿病——白内障——過失な私にとつては致命的のものではあるまいか。これにかこつけて私の甘へた生活の幾分はあつたらう。しかしこの私の生涯にとつてはこの位のこととはゆるさるべきではあるまいか。たゞゆるしがたいのは英男に對する懸命の指導に力足りなかつた事だけ、それは誰が何といつても私が肯定出來ない。

昭和四年

正月元旦

昨日の容子では今日はきつと雨だらうとあきらめ切つてゐた。元旦の空は思ひがけない好晴で明け始めた。しかし海岸のならひで又風は中々つよい。従つて寒さもなか／＼きびしく成つた。

中村からむつとまぐる半身送つてくれる。  
昨夜はわりあひに安眠した。

昨日武林無夢庵の隨筆めいたものを江子に読んで貰ふ。やはり、何といつても藝術肌の人で、かなりの天分をも持つてゐるらしい事が窺はれる。誠に毎日世の中がいやで／＼死なう／＼と望みながら生きてゐる——ほんとうに同感される——

一月四日 晴 寒

昨夜後藤伯爵の別荘で怪我をされたとの事で見舞の電報を打ちに、主人國府津驛へ行かれる。ついでに神前へ供へる菓子等を求める。

今日の新聞で見ると、あの有名な説教強盜がつかまつたとの事、これで市外の人たちはいくらか安らかに枕を高くする事が出来やう。

新潟に大海濤があつて三百人の死人があたとの事、いろいろの天災がよくある事、眉をひそめざるを得ない。今日夕方チラ／＼雪がふつて、ちき止んだ。

東京へ問合せべき事及用事

一、日本弘道會女子部講演會發會の日取り

一、水野さんへミカンを送る事

一、辻村さんへ電話の用事問合せ

正月五日 晴 暖

「水野さまの奥さまが入らつしやいました」スワとあるじは飛びおきた。早くストロブの處へおつれして——最大急行で仕度してゐると。

「お客様は濱へ行くとおつしやつて——」

ホットとして私はそれ／＼仕度をしたり命じたりした。

此頃かまはなくなつた私の身じまひには幾分もかゝらなかつた。間もなくノツクする音がして、今度は待つた人でない佐藤さんの令息二人が來られ、ペランダでお茶など出してゐる中水野さんの一行が來られた。夫人、令嬢、次男、他に友人の藤堂子爵の御令息、外に別荘の世話をするといふ着流しの商人風のひと——多勢の御客に驚いて若い人たちは歸つた。時計を見るともう十一時、これだけの御招待の用意は一寸急に出来ない。あるじと「あの國府津館へ御案内しませう」かういつて自動車命じて一行七人、二臺の車に分乗して國府津館へ向つた。

何といつても田舎の料亭だ。さしてうまいものもなかつたが、たゞ手ぎれいに一寸見のいゝだけ取りえた。

歸りは乗合に皆さんと一しよに乗つて見た。今日のは案外パウンドもせず樂だつた。この車の側面に十三四歳位の女の子がぶら下つてゐるので、あぶないと思つてとめやうとするとそれは女車掌だといふことで又驚いた。と共に都會の女兒に見られない感心だとおもつた。

此日の驛傳は號外で見ると早大が先着を占めた。

午後六時頃國男から電報が來た。それは、實に此春第一のよろこばしいおとづれだ。

「モスコヨリネンシノデンボウアリクニオ」

といふので、やつと百合子が確實に安全に彼地にあるといふ確報を得たのだつた。

「あゝよかつた、これで今夜はよくねられるだらう」

佐藤さんの書生が來て、明朝飯をおよばれたいが、何時頃がいつたらうとの事、九時から十時迄の間にと答へる。

一月七日 晴 寒

昨日に引きかへ今日は朝から春の様に、おだやかで、ペランダにさす日の影はのどかに暖かい、ラヂオではまだ吹きつゞいてゐるはづの風もすつかり止んで、めづらしく沖の方で魚のとれた合圖のほらの音がする。

早朝からやかましい土方の聲がしたが、それは中村のさしづで佐藤さんの井戸を掘るのだった。

明日は江子の學校がはじまるので、いつそ此好天氣に乗じて歸つて又出直すのもよからうかと、いよく歸る事にきめそれ／＼用意をする。

今夜武者小路氏が更に又第三の愛人——と別居しながら父たる責任を果さんがため外泊せずに夜に歸られるといふ事をきいた。かなりもう古い事のやうだが私の耳には初耳だ。しかし私は同氏を見た初めその感じから考へるとやはり争へない傳統的の好色な分子がその中に潜んでゐるのだと考へられる。昔の公家華族の公達——平安朝以來文弱に流れたこの長袖連の氣分——さういふものがある事は否めない。此間私が初めて御あひした時この事を知つてゐたなら、私はきつとあんなおだやかな氣持ちであふ事が出来なかつたらう。

ボサンケツトさんから返事が来て、英男の天質の純粹であつた事を認めてゐる事は有難い——しかし誰でもあの人にあつてさういふ感じを得ない人はあるまい。前述の武者氏の行爲に比して實に天地の差がある——

そして英男の遺志として送つた甘圓の金子はミスコーンウォールレーといふ婦人が、癩病患者救済の爲草津にその患者を收容してゐるといふ——實に偉大な人道的な仕事だ。その人に寄附しやうといふ返事だ。ほんとうに双手をあげて賛成する。たゞおしい事に、この私の尊敬の意を傳へる事が出来ないのが遺憾である。

正月九日 晴

市次郎が来てゐた。そのはなしによると、群山地方はまるで北海道の様に、元日から雪ふりて郡山の町はまるでカン／＼に氷り、自動車さへ鎖がないとすべる様な有様なさうだ。それで米作も養蠶もだめで留蔵はがっかりして上京する勇氣もないさうだ。かわいさうな事だ。それでおみやげにこちらの白米一俵づ——留蔵と市次郎に——やる事にはなした。小作料それ／＼きめ通り持参した。

一月十日 晴 稍暖

昨夜来又お腹の工合がわるい。今朝順天堂の横田さんに電話をかけて相談する。どうしてもそれは神経性のものに相違ないといふはなしで、薬は當分やめて見たら——といふ。私もそれで同意して薬は見合せて見る。但しげんのしようこと、重曹、苦味丁幾は食前服用するが——

午後三時頃咲枝さんとおとうさんと御一しよに來た。それで兼て正月でもあり會芳樓へでも——と思つてゐた折も折なので、岡男にも電話をかけ一しよに會芳樓へ行つた。いゝあんばいに今夜は大變氣候も暖かだ。

例の二階の座敷も電話をかけておいたので火鉢も入れてあつたが、火を見るとたどんが三つころがつてゐる。チャン式だと思はずにゐられない。あの烈々たる櫻炭の色、寒い日には何よりの御馳走だのに——

御馳走は大抵いつもの通りの品種になる。今日はめづらしくやきそばといふのを食べたが非常にうまかつた。鳴だが——多分鶏かもしれない——丸焼はさつぱりしてよかつた。何でも品種七ツ、最後に支那のザボンが出たがごく淡泊で上品な味は一寸文人畫式だ。

出かける前は下痢してゐたおなか、ふしぎにもすつかり止つて美味い事。われながら呆れてしまふ。どうしても神経のせいだらうか。

### 一月十一日 晴 暖

今朝は妙に雪でもふつてゐるやうな静寂さと、折々サツ／＼とふく風の音にたしかにさうだときめて、

「サアかけをしやう、晴？ 雪？」

「負けたら支那料理だぞ」

かういつてあけ放した窓からは、眩しい様な日光が目射した。「オヤ／＼」といふ中もう下へおひる音がした。今日は山岡さんが十二時に來るといふ約束があるので九時頃おきてしまつた。

晝頃の汽車で市次郎も立つ等だつた。子供にやるお菓子や反物を揃へる。

應接間を暖める中にやすの兄が來て是非あひたいといふ。それならかまはないこのまゝで食堂ではふと案内されるのを見ると、見なれない洋服姿の若い人が一しよにはいつて來た。どてらのまゝの私は驚いた。聞いて見ると土地不案内のため友人の瓦斯會社に出てる人を頼んだのです。といふには驚いた。

しかし段々はなす中、英男の事や、長女は外國にゐる——といふと「中條さん、ロシアにゐる百合子さんではないでせうか？」

「エ、」といふと驚いた顔をして今更らしく私の顔や周圍を見廻してゐるのはおかしかつた。そしてしきりに改造の作品をほめて、文學好きらしいはなしにしばらくにぎはつた。そして初對面の此人に對する感じもやはらげられ

た。かうして一時間たらずはなしてゐる中山岡さんが見へ、此人たちは歸つた。

夜になつて倉知の俊ちやんが兼てはなしたい事があるといつたので、明日は國府津へ行くかもしれず、早く聞いておきたいと思つてよんで見た。夕飯後來ていろ／＼はなしを聞いた。

### 一月十三日 晴 暖

今日はまるで小春の様なおだやかな氣候で此村の祭りの太鼓の音ものどかに聞える。海もめづらしい風で魚がとれた。久しぶりでまぐろのさしみやひらめが食膳に上せられる。國男、咲枝、す江子が午後七時過ぎの汽車で歸るのに御馳走が出来る。

秋田雨雀さんからはがきで御年始と共に、百合子から便りがあつたよろこびをいつて來た。

今夜は此村の道祖神の祭禮とかで、皆それ／＼手造りの人形を山車に曳いて見せるさうだ。夜になり中村のちいさんが來て、是非御別荘の旦那様方にも見ていたゞきたいとあつて、あの坂の上まで曳いて來てゐると、提灯をともして米屋の息子と二人で迎へに來た。しかたがなく旦那もお祭り見物に出かけた。提灯をもつて中村老人が案内役、こんな時でもなければ、山車見物にこのいそがしい世の中、あるじがかけるとは思ひもよらない事、これも田舎らしい年中行事の一つで、東京には見られない圖だ。しかし御酒代があるといふので五圓出した。

### 一月十五日 晴 南風暖

朝からひどい風の音がした。起きて見るとひどい南風が心持ちわるいやうに生ぬるい暖かさを感じさせた。大方

六十度位だらう、ラヂオの放送によるとこれは太陽の黒點の影響で、明日になると又急に寒さが来るから用心する様にといふ事だ。それでは——といふので急に思ひ立つて、河合、神谷、大瀧の三軒へ行く事にした。

十時近く歸ると宅に咲枝が見えてゐた。

今夜大瀧さんを訪問したのは例の横田さんからの話をしておきたいからであつた。けれど潤家さんにこの話を持ち出すと、意外にももう何處からかの話で、それが、殆ど十中の八九まで極つてゐるらしいのであとにつぐ詞も出ない。

もうほとんど大工だけは出来上つた入口の新築のまだかんなくづや木切れの落ち散つた中に、子供らと戯れてゐる主人公のめづらしく陽氣らしい面影を見ながら、私はかう思はずにゐられなかつた。

「あゝ、奥さんには代りがあるが——我子は——」

英男の爲に命を擲ち得なかつた自分のあの時の氣持が又しても悔まれる——

今夜は行く先々で紅茶の御馳走があつた爲か、どうしても寝てもねつつかれない。明方の五時の音さへ聞いて、そこちも明るみかけた窓を眺めていら／＼してゐるのをめづらしくき／＼つけて、玉ねぎをきり、薬を下から持つて来たあるじの厚意は感謝する外ない。かういふ風なごやかさがつゞけば家庭圓滿なのだが——

### 一月十七日 晴 寒

まだ百合子から便りが無い。いくらあきらめてゐても流石にがっかりする。どうしたんだらう？

百合子いかにいねかての床に涙して枕冷かにふくる宵々

かうして幾夜明けては暮れ、暮れては明けして待ちわたる便りが来る事だらう——明日は又もう一度電報を出さう。

### 一月廿六日 晴 暖

今日は弘道會女子部の講演がある日だ。しかし江子が風氣で學校を休んでゐるので、いつそつれて来てすつかりなほさうと國府津へ早くあいとしよに立たせた。

國府津の宅は相不變暖かい。早速ラヂオをかける大阪からの放送、阿波の十郎兵衛、女房は我童で中々上手だ。思はず涙をさへ誘はれた。

今日の夕刊には黙してゐられないやうないまはしい事が報ぜられた。それは、「男子を見る目の使ひ方について」といふ主旨のもとに、知名の御連中が會をさへ催したといふ事だ。これはこの前土川五郎といふ人の、美容について——といふ題名のもとに放送されたラヂオ講演にさん／＼憤慨した——それにも勝るいま／＼しい事だ。よく相當の人たちが臆面もなく、こんな女性の地歩を低下させるべく努力する、否々卑しうするこの愚論に尊い時を費すのだ。一方には婦人選舉運動が擡頭してゐる今日、こんな事に尊い紙面をさき、れい／＼しく寫眞をさへのせられて得々たる——女史達——一體あなた方はいかにして自己の地位を向上し、發展させんとするのか。

### 一月廿七日 曇 暖

今日はとう／＼空に雲が出て沖も暗く見える。あまり連日の晴天で風邪がはやるばかりだ。ちつと降るのもい、



かもしれない。

午後六時のラヂオは遂に御悼ましくも久邇大宮殿下の薨去を傳へた。

御大典も御滞りなくすませられ、皇威赫々として聖上の御稜威いよ／＼輝かんとする時、人生の憂ひは遂に九重の雲をさへ冒さんとするが、御痛ましい事である。殊に此大宮殿下は、美術に關する御觀賞眼高く、現今の折界に多大の御同情を蒙むる事は、世の治ねくしる處だ。この御急變の報を耳にして丁度こゝに滞在在中なのを幸ひ直様國民美術協會々頭として兼ての御眷顧を拜謝すべく、せめては直に熱海御用邸へ參候、奉弔の微意を表したいとのあるじの考へ、無論私も大賛成で不取敢服裝の全部——モーニング其他の附屬品も——を電話で頼んだ。處があとでシルクハットが足りないのに氣が付き、更に電話をかける。往返五六回の長距離電話でやつと用が足りた。しかし關千秋君がモーニングを持つてかけつける、あとからすぐ又國男が直行でかけつける——やはりいくらかあはてゝゐたものと見へ手かけた事／＼、十二時頃までこんな事でこた／＼してしまつた。

それから今日はおもひかすると見えるかもしれないなど噂してゐた後藤一藏氏が、ヒョッコリ午後三時頃見えた何でも返子に別邸を新築されんがための参考にとの事ださうだ。折から取散らしきつた臺所から何から、臆面ないあるじは、一言の前おきもなく、サツ／＼と案内した。あとで見ると丁度門番のぢいやの娘が手傳ひには來てゐるが無教育な田舎者の情なき水道は出しつばなし、戸棚は明けつ放し、何もかもやりつ放しのごた／＼の臺所へ案内された後藤さん、どんなにか面喰つた事だらう。後から廻つて私自身が一人で赤面せざるを得なかつた。

二月一日 曇 寒

とう／＼正月も過ぎてきさらぎになつた。今日あたりの寒さは中々ひどい。こゝでさへ火の傍を一寸はなれるとゾク／＼する程だ。

こんな時やはり百合子は露西亞にゐるのだらうか、と北の空が眺められる。

あの電報以來フツと音信を絶つて、折角返信までつけて出した電報に何のあいさつもない。その電報もお正月のあいさつで、此方から考へると甚だ呑氣千萬にも考へられる。お正月御目出たいと祝ふ心持ちに成れようか。それで門松も立てず年賀状さへ出し得なかつた親たちの心を考へてもらひたい。しかし私も此頃はしみ／＼、子も持つた事もなし、亡つた事もなし——さういふ人達にいくら自分が悲しいかをいつて同情を求めるのは無理だといふ事をしみ／＼考へる。そして、かういふ體験のない人達には絶大の悲しみを同情させやうと思ふのはてんから無理だ——かう思つて此頃はもうさう思ひあきらめて、めつたに泣言はいふまいとあきらめた。百合子とても同じ事で、たとへそれがいかに同情があるとしても、弟としての彼女の悲しみと、此母としての絶大の悲しみと比肩さるべきであらうか——かくあきらめて、せめては彼女が、かよわい女性の身で勇ましく北露に研究をつゞけてゐる事を壯とし、せめて彼女の心をわすらはせまい。

二月四日 快晴 暖

今日は實にめづらしい快晴だ。國男も自分もまた幾分風氣味だつたけれど、もしお天氣なら今日は歸らうと考へてゐた矢先、起きて見ると實に稀なくらゐの日和なので、すつかり里心がついて歸る氣になる。勿論下女までも友だち戀しさに驅られてか「奥さまもうバタもなくなりますし、ミルクも、お野菜も……」と一生懸命歸らせやう

とする。國男もあまり長くお休みしては——といふ懸念もないではなし、それではといよ／＼思ひ立つて、午後四時過ぎの直行で歸る事にした。

歸ると先づ第一に私の胸を打つたのは百合子からの書信——呑湯淺さんからの手紙で、百合子が入院の報であった。此間からあまり書信の絶々なのをいぶかつてゐた私は、果して……とおもふと何ともいへない心持が胸底から湧き上るのを禁じ得なかつた。病氣は膽囊がこちれて肝臓がわるくなり、膽石の心配がある爲入院したのだといふ事だ。

#### 二月六日 晴 暖

昨日あたりから折々雲が出て曇りはするがな／＼ふらない。今日も同じ様だ。これではますます／＼風引きがふえるばかり、困つた天候だ。國男はしかし追々軽快で、今日は大分聲もなほつたやうだ。いよ／＼明日から出勤する事にきめて、例のストーブの火よけに手製のスクリーンを竹内と造る事にする。

夕方旦那歸宅後。ホテルに日露漁業の眞藤慎太郎氏を訪問したはなしをされた。それによると、百合子は大層眞面目に研究的態度をつゞけ、質素に生活して皆に尊敬されてゐる。お金の事はいつでも御用立てる事が出来るから心配しないやうにとの頼もしい詞だつたさうで、大變心強く安心した。病院も大變きれいで心持がよいとこの事だこの大體の事を讀賣の平林氏に報告した。

#### 二月七日 晴 暖

さすがに春が立つてから身を切るやうな風が吹かない。かなりおだやかな暖かい日がつゞく。しかし、寒中雪らしい雪を見ない冬はめづらしい。何だか總てが片よつて來た様で太陽の黒點のためだとすると、世界的大變動を思はせられて恐ろしいといふよりも、變な氣持がする。

けふは例月の終りに近くなつて非常にだるく疲勞を感じる。よく考へて見ると、いつも此頃は貧血を起してかういふ状態になるのだつた。食事もいつもよりうまくない。しかし今日からやゝ回復していくらか元氣がつく。そこで久しく髪も結ばなかつたのを束ねたり、頭を洗つたりして、強いて元氣をつける。

國男今日より又出勤する。手製の大きなトタン張りの衝立を持つてタクシーで行く。

岡田さんまだ病氣で出られず衝立は大層工合がよいとこの事で安心する。

#### 紀元節 二月十一日 晴 寒

今日は紀元節で旦那も休みなので、壽江子をつれて上野公園美術館の第十六回光風會を見に行かれた。以下はその感想を聞いた通りかく事にする。

今度の光風會はなか／＼見ばへのするものであつた。中でも、故山本森之助氏の遺作百餘點が中々の力作で見るとべきものが多かつた。殊に買ひたいとおもはれる位目を引いたのは、「セイヌの曳船」と題する油畫で四尺大位、高い丘の上からセイヌ河を見下ろした景色で、黒ずんだ重い色の色彩が特に異つた感じを與へる。もう一つは「ボブラ」と題する——二本のボブラの木が柔かい葉を戦かして、その間から遠く背景を見せてゐるのがいかにも初夏の景色らしく晴々した氣持を與へる。次には特別陳列として歐洲古畫の模寫が約九十點陳列されてゐた。中には故

黒田畫伯の畫も數點見えた。

それからモナミでお茶をのんで歸られたさうだ。

新聞で見ると、今日は建國祭といふ式をあげ處々で建國の歌を高唱し、學生團等が騎馬で市内を歩いたさうだ。

二月十七日 晴 暖

今朝は起きると思ひがげず郡山から市次郎が國分角三郎をつれて上つて來た。用件は先代建碑の事についてである。どんな人物かとあつて見る。大變な男で、それでも市次郎らとは其趣を異にして、かなり物わりのしさうな人間だつた。旦那が休みなで自動車で明治神宮まで參詣させ、夕飯を饗し、子供のみやげに菓子一箱を預けて國分だけ歸り、市次郎は一泊させる。

午後二時頃倉知誠夫氏來訪。いよ／＼われ／＼外國行に付、法律上の手續き必要となり、國男の結婚式に付い／＼相談をする。咲枝も誠夫さんと一しよに來て何やかやの打合せをする。

五十餘日ぶりの雨の音が拂曉から軒先に響いた。農家ではさぞかしよろこぶだらうと、丁度上京した市次郎ともはなしあふ。しかし細雨のわりに永く降らなかつたのが物足らない。

今日は私にとつて近來にない、日だつた。その一つは百合子から自筆のはがきが三枚來た事と、もう一つは夜に入つてから、國男の設計になる電燈の圖面を見たからである。

百合子の方は先づその文意のいかにも悠々として迫らざるものがあり、あの物資の豊かでない露國で、かなり永い間の病院生活——このはがきも漸く仰臥したまゝかいたといふ——それでも一寸も悲觀せず、意氣けん昂、大成

を期してゐる様子があり／＼と見えて、これだけはたしかに私らより大なる處、彼の天分の豊かなる證で、喜びにたへない處だ。どうか／＼一日も早く快癒して、この苦しい經驗をさへ一つの收穫として、大なる創作面に表はれるやうにといのるのみである。もう一つは夜に入り、はからず國男が金澤商店から送つてくれた電燈の設計圖の澤山（二字不明）を見せてもらつた事だ。其意外に澤山の數と一つも同じ型に拘泥してゐない——自由な構想がいか私を喜ばした事だらうか。彼が飄逸にして囚はれざる天質は今こゝに流露して、自由の天地に其構想を恣にする事が出来るのだらう。私の乏しい美術眼にさへその尋常でない天資を見る事が出來て、私の心は歡喜にふるへた。

夜に入り吉田弦二郎氏の文藝講演があつた。同氏は、文學は人を樂しましむるものでなく、悲しみを感ぜしむるものだ。かの杜翁の最後に、ヤスマナボリヤナの寂居を出たのも一種の自殺であつて、畢竟人生は死に到るまで不可解の謎だ——といふ結論で、その間にいろ／＼の挿話として面白いはなしがあつた。けれど、私のこの杜翁の最後に於ける脱出は、決して厭世的のものでなく、道を求めてやまざる彼の勇猛心の發露であり、いかに敬服すべきであるかは、別冊隨感隨筆にかいた一節の通りで、この點私は吉田氏と意見を異にしてゐるのである。此兩者の比較論は尙他日ゆつくり長くかいて見たい。目のゆるす限り——

今朝代議士の××氏より電話で建築士法案上程成功しさうなりとの電話があつた。旦那驚喜して、朝からあちこち大活動の様子、建築家としての根底を堅固ならしむるこの案——もし成功する事が出來たら、それこそ博士號以上の出來栄だ。どうか成功して萬丈の氣を吐かせたいものだ。

二月二十日 晴 暖

今日は昨日の風が名残りなく止んで、朝から折々曇りながら春めいた暖かさが感ぜられた。今日はもう武者小路さんの展覧会の最終日なので是非行き度いと思つて、それ／＼その用意をし、倉知へ電話をかけ咲枝さんと打合せ、めづらしく午後一時半に宅を出る。

まづ先に丸善により繪を見る。静物の中に氣に入つたのもあり、又裸體畫の婦人の中に林檎か何かもつてゐるのが氣に入つた。中には子供のかいた様なものもあつた。たゞ、價格がかなり高いのは意外に思へた。しかし赤い札もかなりついてゐた。五分ばかりして咲枝が来て、それから一しよに三越に行き外國行の用意につき／＼買ひと／＼のへる。それから歸りに三田へよる。いよ／＼來月十四日を吉辰として學式の事、それについて／＼の準備に付相談する。式場は東京會館、仲人への通知や何か中々あはたゞしい氣がする。

### 二月二十五日 晴 寒風

また朝から風だ。昨日あんなに吹きまくつた風はまた餘勢をゆるめない。何といふさう／＼しさらう。かういふ風のふく時——もつと弱い風でも——私は亡き父上の事を思ひ出させる。生來此風を極端にきらつた父は、いつもかういふ時冬ならば炬燵の中で、夏ならばあの向島の書齋に並んだ部屋で、椅子によりながら靜かに瞑目して、此風の靜まるのを待つてゐられた。

父上は尙かういひ／＼された。それは何でもあの恐ろしい眼疾——光彩炎に罹られ半年近く黒い布で眼を覆ふておられた頃だとおもう。新聞雜誌、さては郵送された手紙や何かを讀み終るか終らない——午後八時頃だつたらう。一陣の烈風が屋棟を修する様な物珍しい響きを立てて吹いて來た。築地川に面して建てられた家だつた／＼めか風の

いつも急先鋒はまづ角屋敷だつた。家の一角に吹きつける様に思はれた。突然父はいつた。

「あゝ、いやな風だ、おれは何にも恐れないが、風の音位きらひなものはない。萬里の長城見たいもの／＼中にも入つてゐたなら風の音が聞こえないかなあ」といはれた。

雷が生來嫌ひであつた私は、風の音をそんなにきらはれる父の氣がしれなかつた。

「お父さま、何故風なんぞそんなに嫌ひなの？ 私は雷様の方がよつほどきらひ、風なんてそんなにこわくはないじゃないですか」

「イヤ、貴様のはこわいのだらう、おれはきらひなので、こわくはないのだ」

かういはれてさへ、まだ十四五位の私には何だかはつきりわからなかつた。しかし、それから幾年たつたか忘れたが、實に東京全市を揺る大暴風雨があつて、土藏の窓から眺めた向岸の芝居茶屋の屋根が、まるで木の葉をめくる様に吹きとんで、見る／＼中に小屋組さへ見へる様になつた。前の小さい築地川は氾濫して幾艘もの荷足船が目の前におしよせた其時一番落ちついて勇敢に差圖したのはやはり父だつた。帽子を手拭で頭にく／＼りつけ高く股立ちをとり、われ／＼子供らにもめい／＼頭部を厚く包んで、それ／＼準備をさせた。勿論私の母も極く氣丈な人で、負けずにそれ／＼立ち働いた。此時私は初めて父の風ざらひは眞の風ざらひで、決してこわいのではないのだ、といふ事を知つた。

春秋／＼に三十星霜、風吹く折々鮮やかに腦裏によみがへる風ざらひであつた父の面貌！

夜になつてラヂオの放送で、此頃の暴風の多いのは、太陽の黒點のためだといふはなしを斯道の大家がはなされた。そしてふしぎな事にはその黒點が増減するといふ事、そしてその大きさは地球の幾十倍あるといふ——これで

はどうも不可抗力だ。そしてかういふ出来事が人をして人生の見方を自暴的に——悲觀的に導く事は否めない。誠に困つた事だ。益々精神的に生きる事の必要な時代が来た様な気がする。

二月廿七日 晴 大寒

けさはやつと風の音がやんだ。しとくく小雨でもふつてゐるかと思ふにしてみると、不相變カン／＼日が照つてゐる。

郵船から電話で、香取丸が客室二つとれたとの事だ。これでそろ／＼遊志動くといふ呑氣な心になりたいたものだ——百合子にゑはがきを出した。香取丸ときまり一家族出かけるといふ事。

二月廿八日 細雨 暖

とう／＼慈雨がふつた。朝からどんよりして暖かい空からは、ラヂオの放送通りシト／＼と降る雨だれの音は、どんなに地上の人を喜ばした事だらう。あまり農業に直接關係を持たない私たちでさへほつとした。

郵船からの電話で旦那は今日會社の主任にあひ、船の兩舷に二室を取つた。これは總て双方に融通をつける爲なさうだ。あついても、波の高い時も——

水谷よし子が来た。不相變の天理教傳道だ。「あなたの信仰は結構で又私の病氣を心配して下さる志はありがたいとおもひます。けれど、天理教は私の知つてゐる範圍では、悪い例が多いので信する氣になれない」といつた。

今朝は、拂曉からかけての發汗で風氣も大分とれたと見へ、氣分もなほつたがやはりだるい。しかし、今日は勘

定日なので午後二時頃からおきる。

夕飯はかなりうまくたべられ、お腹工合もいゝ。自分ながら自分がわからない。

百合子へ電報で「マダ退院セヌカ、國男結婚三月十四日、一家族五月廿三日神戸發、七月一日マルシーユ着」と打電した。

三月一日 折々雨 暖

細雨霖々として汗ばむ程の暖かさだ。

坪内さんから英男の悔み狀が来た。この老博士の配偶者を考へる時英男などの思想とはあまりの差が多い。此の手紙を見ても同感し得ない博士の心事がわかる。しらせたのがむしろ(不明)であつた。しかし一度はおあひして、尙よく彼の性行をはなしておきたいと思ふ。

慶大の西野博士渡歐のはなしを聞いたので急にサイベリア行が斷行したくなつた。英男の死去以來、命を惜しむといふ事が我ながら齒痒ゆく思へて来た。あの熱烈な英男を避けたから此苦しみだ。死んでもいゝ、百合子の處へ見舞ひに行かう。そして西野博士を引ばつて見て貰はう。かう思ふと矢も楯もたまらない。旦那に相談すると、船の方はどうにもなるとの事、明日は電報を出して返事を取り、是非さうしやうとおもひ決める。

又雨の音が聞へる。農村のよろこび、水に飢へてゐる市外の人たちの事をおもふと、ほんとうによるこぼすにゐられない。

今日は例の御命日なので、菊の花を旦那が買つて供へられ夕餐を供し神前で物語りした。

三月二日 雨 寒

明日は雛の節句なので兼て買つておいた——白牡丹で毛絲のお人形と、大阪すし等を廣子さんにあて手紙をつけてもたせてやる。

病院へ電話で、昨夜から考へたサイベリヤ行を相談する。どうしても無理だといふ事と、百合子の病氣が順調だといふ事で、船の方をすゝめられた。それで、一時は夢中に成つたサイベリヤ行を思ひ止まり、やはり船の方にと又復舊した。

朝の中富樫が来た。南天の實をもつて——富樫は金で苦勞はするが子供には苦勞しない、まだんその方が楽なやうだと私はいつた。きみも近々結婚させるとの事で、何でもかなりいきさつがありさうな口ぶりだつた。

此頃の様子に、あまりに思想の自由すぎるのも、到る處に親の泣きを見る。來るべき時代はやはりスバル式だとしみじみ思はれる。

午後からはそろ／＼空に薄日がさして、やゝ寒氣もゆるんだので、久しぶりに國府津へと思ひ立つ。

今夜は臭那劑がないのだその積りで氣をおちつけて——と注意してお茶もあまり飲まず、つとめてのんびりした心持ちの裡に寝についた。珍らしくう／＼とよくねられさうだ。すると、寢室の下で、いつも聞き馴れた中村の咳拂ひの聲を聞き、同時に何か番人との話し聲を聞いた。おや、いつの間にかよく寝てもう夜が明けたと見へる。しかしもう少し寝やうと夢うつ／＼の中にかう考へてゐると、しばらくたつて、玄關のノックのはげしい音を聞いた。それ、と女中をおこし、す江子と共に誰だと聞いて開けると命じた。

「火事です」といふ聲を聞いて、私もすぐ起きた。何だろう、そんな事なら表玄關からはいらなくても寢室の前で

怒鳴ればいゝのに——とおもひながらも、當面の火事はどこときいた。直ぐ前です。かういはれて見ると成程玄關の硝子戸にうつる炎の色はかなり凄まじい。すぐ鍵を明けて見る。玄關に吹きつける夜風と共に、すぐ正面の原をへだて、火焰は天に沖した。震へ出してブル／＼してゐるあいをはげまして私はいつた。

「あいや、何もあはてもこわがる事もない、此處は別荘だ、皆やけても汽車へさへれば東京の家へ行ける、どつさり厚着して、すぐ出かけられる用意をおし、あはて／＼はいけない／＼」

この時す江子はわりあひにおちついてゐた。しかし、す江子にも亦出立の用意をさせ、食料を手當り次第バスケットにつめた。それでも感心にす江子は「神様が大切だ」といつた。そしてそれ／＼いつもの様になるんで、持ち出すばかりにした。その中表の方で「水を下さい／＼」とわめいて、多くの提灯の火が動いた。ポイラールームを開けさせ、風呂桶に水を出させたり、臺所にも開放してバケツや何かに水をた／＼へた。あとで聞くと消火の水ださうだ。それなら佐藤さんの井戸が明いてゐるのに、何しにこの家を驚ろかしたのか、あとになつて中村にこの事をきくと、氣がつかみませんで——といふ。

あそこならすぐホースも入れられるのに、私の家のポンプの蓋をとつたり何かして、あはてるにも程がある——まあ／＼しかし火事は案外らくに経過した。兼て西村の母上から聞してゐた。火事の時自分の顔がほつとあつく感するやうになると逃げなければいけないが、それまでは狼狽するなといふ事も聞いた。表戸を開ける前に火の粉の一つも見へないのを見て私はある安心を得て、壽江子にもいつた。「大丈夫だ、顔もまだあつくなし、火の粉も見へない。身体だけ逃げれば、汽車ですぐ東京へ行けるのだ。安心おし」と、更にくりかへした。

丁度この火事は午前二時に始まつて、私たちの寝たのは三時頃だつた。一時間半ばかり寢臺の中にモズ／＼して

ゐていつか寝たと見へて、目の覺めたのが九時過ぎ。何だか馬鹿にからだがだるい。朝飯をすませて更にまた寝た  
十時頃、東京へ電話で昨夜の出来事を報じ、明日歸宅の事もしらせた。

三月四日 晴 寒

午前中、百合子からの電報「コンゲツスエマデタイイン、マルセイユニアフ」といふのを更に轉送したのが届いた。あゝやつと目あてがついた。勇氣が出て来たやうだ。

今日はめづらしく好晴なので、いつもより早く歸らうと午後二時五十九分發にきめて、いつもの通り用意にかゝつた。女中のはなしに聞くと、此間のやけあとにはまだ煙があがり、多勢の人が見物したり、立働いてゐるのが女中部屋の窓から見るといふ。従つて皆商ひもやめて消防の手傳ひをやつてゐるさうだ。何しろこの小さい村にとつては初めての出来事なので大さわざだ。旅先ではあるが、せめては暖かいものでも消防の人か罹災民に食べさせたいと、金十五圓を中村氏に托した。中村氏は消防にやつたのが一番いゝといふので、その意に任せた。

その中自動車 came ので、少し早いとおもつたが出かけた。まだあの焼あとから白い煙が上つてゐる。話し好きの中村爺のはなしでは、焼死んだのはこの漬物屋の嫁で、平せいからひどく虐待され、此時も丁度實家へ逃げかへつてむりに引戻され、泣く／＼歸つてから四日目ださうだ。實家の母親が、狂氣の様に平生の姑の嫁いびりを怒鳴り立て、亭主は人並でない所謂八文なのに、姑にとりなすすべさへなく、廿代の若い身空で、赤子は病弱だし、世をはかなんだ自殺らしいとの事。人並でもない者の結婚——眞に考ふべき事だ——

此日の驛頭は實に東京よりも寒い。しばらく暖かさに馴れた私の耳や顔が切れる様だ。しかし車中は不相變の暖

氣で飛ぶやうに東京驛についた。

沿道の梅花白く香を漂はして、わらやの軒も美しく装はれて見へる。

春三日 ゆきにはそれとわかざりし伏屋の軒に梅白く見ゆ

歸宅後まづ私を驚ろかしたのは、「澤正が死んだよ」といふあるじの聲だつた。

三月五日 晴 寒

咲枝さんが花をもつて靈前に供へた。夜おそくなつたので泊つてしまつた。

大彦が一寸凝つたふるしきを持つて来た。久しぶりなので、友せんを持つて来るやうに命じたが、考へて見るとやはり高いのに閉口する。あとから断らうかと思ふ。

帝國ホテルで最新流行の洋服を賣るといふ廣告が来たので、咲枝をさそつて見に行く事にした。それで、晝食をあるじと三人ですませ、階上の婦人の居室で洋服を見た。流石に東京のとはちがひ、意匠その他に一寸いゝものも見へる。しかし、寢室で公開するのはいくと外人でも、あまり婦人として上品でない氣がする。——かう思ひながら私はやはり見る目の珍らしさに誘はれて、森江子の帽子——運動帽のやうな——と、スウェーターを買つた。帽子は子供のものとしては高い、五圓した。スウェーターは五十圓、其他靴下二足を求めた。これも家へかへつてからよく見ると感心出来ない。或は彼女等が、去年最新流行のものを二三度用ひて、田舎廻りにこちらへ賣りに持つて来たやうな氣がする——とかく見るとつひ買ふ氣になるのが婦人の常で、以來堅く慎しむべき事だと省みられる。

三月十日 暖 晴

昨夜は少し雨の音を聞いたが、今朝ははれて暖かい。いよ／＼明日は咲枝の荷物が来るといふので、折からの日曜を幸ひ、父上も手傳つて、はなれの座敷をととのへる。

昨夜から春江さんのお産が氣になつたが、今朝早く男子出生、親子安全、おまけに赤ちやん體重九百餘といふのでやつと安心した。これで目出度日數がたちさへすればいゝと安心した。旦那が不敢取河合さんのところへ御祝ひによられた。昨夜の咲枝の電話ではお姑と小姑がついてゐられるぎりといふので、かなり取こし苦勞をしたが、これがほんとうの案するより生む安らかさで、自然の攝理の巧妙さだ。ほんとうによかつた。

春江さん安産の報をロシアに報ずるゑはがきを出した。

目がどうもよくない。かうやつてかいてもそのよみかへしが困難になつた。實につらい。いよ／＼大阪で酸素注射をやる外あるまい。

三月十一日 晴 暖

百合子から電報が来た。「クニオサン、サキエサンオメデトウ。ハハノケンコウノタメアメリカケイユデコラレヨ」

本田道之さんめづらしく來訪。國男のお祝ひに何か上げたいとおはなして、夕飯を共にし夜歸つた。はなしの様子では今度の赤ちやんは大變大夫でらくだとの事。親類といふものは——殊に一と頃泊つてさへる事があつたので——何といつても親しさのあるものだ。かういつてはなしてゐる中に又もとの親しさが蘇つて、打ちとけてい

ろ／＼はなしも出て来る。笑ひもする。

今日は午後から大變な風で、そう／＼しい事おびたしい。けれど、はなれをきれいに、例の親心は有りがたいもの、花をいけたり、床をすへたり、いろ／＼の世話でかなり疲れたと見へ、夜になるとがっかりした。

神となりし吾子は知るらん我心、泣きつゝも笑み、笑みつゝも泣く

人なみにしるてほゝ笑む我なりと知らざれば人はめでたしといふ

國男のモーニングが出来て来た。

三月十二日 晴 寒

江井の女房が腰節一箱を持つて来た。關兄弟からだといつて、千秋君がなか／＼いゝコーヒーのセットをおくられた。事務所の西尾さんと尾山氏と一しよに花瓶を祝つてくれた。西村一彰氏が見へ、十四日に參列する事にした

三月十三日 晴 風暖

いよ／＼明日は國男の結婚式だといふので何となく用あり氣な空氣が家の中にたゞよつてゐる。高松氏夫人が祝ひものをもつて來訪。

夜に入り横田さんと大瀧さんが見へる。横田氏は、國男の今度の舉式につきいろ／＼専門的の注意を與へ、且祝ひとして本をおくらす。



三月十四日 晴 寒

今日はいよ／＼當日だ。空は今日もからりと晴れていゝ日和だ。しかし、此頃の日和ぐせで明方からまたひどい風だ。それでも雨よりはいゝと、それ／＼その用意にかゝる。

江子は學校があるので、すむとすぐ三田へ行つて、丁度咲枝の着つけがすんだら帯だけむすぶ事にたのむ。國男のモーニング姿もかなりよかつた。仕立がかなりよく出来、私に見立てたズボンが若々しくてよかつたのも嬉しい。ネクタイも父上が見立て、買って來られたが、これも亦かなりよかつた。

ゆつくり仕度が出来上つて東京會館に行つた。式前に寫眞をとつた。

それから間もなく式が初まり、例の通り事が順序よくすんだ。相互にお目出度いとくりかへした。續いて親類間の小宴が初まり、かなりとつた食卓だつた。

倉知は子供に對しては、偽りでない愛情を持つてゐる事を感じしめる。

九時頃からボツ／＼お客は歸つた。國男と咲枝は會食中。中座して國府津の別荘へ向つた。歸つてからゑはがきで百合子にその事を報じ、明日電報を出す事にした。

三月十六日 晴 寒

午後一時頃、中原綾子さんが見へた。何でも高村光太郎さんの處へ雜誌發刊の相談に見へたのだといふ事、やはりしかし、親戚といふものは親しみのあるものだ。何やかやとり集めたいろ／＼のはなしに。かなりの時を過し、午後四時過自動車でおくつた。

しばらくぶりであつた此人の容子は大層おちついて、お母さんらしく見へた。獨居の生活をしばらく楽しんで彼女は、やはり元木にまさる裏木なしの諺通り元の古巢に舞ひ戻つて、平靜な生活に安らかさを覺へてゐるのか、まあ／＼これでおさまつたのだらう

久しぶりに江子を中心に三人でねた。案外らくに場所がとれた。

三月十七日 晴 寒

國府津の國男と咲枝からはがきが來た。大層楽しさうなのが、まづ私を安堵とよろこびの中においた。

旦那と江子と一しように三越で赤ちやんの御祝ひものを見立て、咲枝の社交服——小田事務へのお祝ひものなど、とりまげておたのみする。春江さんの赤ちやんへは頃合ひのおめしがあつた。不取敢それを持たせて河合さんの御宅の方へ上げておく、手紙をつけてと思つたが、何だかむやみにおつくりなのでよした。

夜になつて國男、咲枝が無滞元氣で歸つた。きいて見ると、箱根や熱海へ行き、相應に面白く暮して來たらしいまあよかつたと私は心から安堵した。そしてすぐ百合子へ皆でゑはがきを出した。

三月十八日 晴 暖

午後から是非と思つてゐた河合春江さんをやつとの思ひで病院にたづねた。外見はすい分汚ない舊式の家だ。二階を上るとすぐそこが其室で、一室ぎりの日本間はあまりゆつくりしてゐない。部屋の中には思ひがけない春江さんが立つてゐたので私のはつきりしない目では一寸誰だか聞ごつた。赤ちやんも。わきの寢臺によくね入つてゐ

た。たゞ一寸おかしかつたのは、赤ちゃんの一番上のかけるものが羽根ぶとんの極小さいので、それがチヨコナンとのつてゐる——ほんとうに乗つてゐるのでかけてはないのだ。何故なら、それがあまり小さいのでくるまるだけの餘裕がないのだ。まわりからは毛布がはみ出してゐた。何だか寒さうで氣にもなつた。しかし春江さんは實に元氣で、しつかりしてゐた。けれど、まだお七夜でさう起きてゐるのはわるいからと、よく／＼いつて注意した。今日は咲枝さんも國男と来て花を置いていつたさうだ私はくだもの、かんづめ三ヶ持つて行つた。ほどなく六時になるので歸つて來た。國男と咲枝はとうに歸つて新宅の整理に忙しかつた。

### 三月十九日 晴後風雨

文藝春秋の大草實といふ人が來て、今度女流若手の全集を出すので、是非百合子のものでせたい、それには五十錢本にして印税は一割、早速御承諾を得たいとの事、私はあまり考へる迄もなく承知して／＼様に考へてさう答へた。しかしあるじが歸つてからそのはなしをすると不承知だつた。私もいろ／＼聞いてゐる中少し不安になつた。明日は早速改造社へ問合せで見なければと考へ直した。

### 三月二十二日 晴 稍曇

夜に入り、吉田絃二郎氏の改造にのせられた小説「白雲飛ぶ」といふのをよんでもらつた。實に、何といふ忍従の生活に甘んじた母だつたのであらう。私は涙ぐまざるにゐられなかつた。ほんとうにカン／＼蟲でも安穩に、平和に母と生きてゐる事、これが人生の幸福でなくて何であらう。あゝさうだ、私も彼に角帽を被らせたい、と思はな

いでゐたらうか。——

### 三月二十四日 晴 南風

明日は吉日なので咲枝さんのお里開き。

國男の婿入りに皆して來るやうにと、三田から夕飯の招待があつた。いろ／＼の買物をしなければならぬので三越に行く、珍らしく一時に出かけたので、かなりゆつくり買物が出來た。三田のお父さんには袴地、俊ちゃんにはネクタイ手袋、一馬さんには帽子、女中たち三人へ染がすり、山口へ紺がすり等、それ／＼命じた。私の訪問服も、此間のは幅や丈がたりないので更に別なのをたのんだ。新流行の洋服陳列を見たが、大分一頃のより優美な型になつたのは嬉しい。帽子も幾分大きめに装はれて見へる。

久しぶりに食卓で皆して食事をつた。一馬さんや綠郎さんも來てにぎやかだつた。

店を出ると四時でまだ日が高い、かねておさくさん——星未亡人——の處へ一度は行かねば——と思つてゐたので、車はあいてゐるし、今日を利用してと、吉祥寺に車をかつた。

### 三月二十五日 晴 暖

木村徳衛氏——醫博——コロロブ性肺炎に罹り重態だとの事、それについて考へられるのは、一體此人お醫者だが、兼て非常の寒さ厭ひで、鐵砲打ちのベルトの様に懷爐をズラリと腹部にまきつけて、寒い家へは往診にもゆかない、といふ事を前から聞いてゐた。やはりいくらお醫者でも、かういふ風な退嬰的な保健法は完全なものではな

いらしい。對抗的療法——これではいけない。

次に又黒井悌二郎氏三男が、チブスで遂に死去されたといふ事を聞いた。此頃大分チブスの流行を耳にする。なまものは用心しなければならぬと思ふ。

ロシアからの電報は「ニシノハカセタシカニクルカ、イツツクカ」といふのだ。これに對し西野氏に速達で確報を願つた。

三月二十六日 午後雨 寒

建築士法案衆議院通過

この法案は幾年間かの懸案で、建築家にとつての一大福音であらねばならない。晝夜をわかない奔走でとうとうこの快報を得る事を得たのは、社會に對する主人の主張が通つた事で、實に痛快事だ。

神谷未亡人が近所へ引越して来たといつて娘さん同伴來訪された。

水野夫人から雑誌姫小松を送られた。

かの御大典参列の記事が和歌と共に載せられてゐる。歌だけを咲枝によませて聞いた。歌もなか／＼いゝのがあつた。感心に此人は進歩しつゝある事をよるこぶ——

大瀧さんでは大分慶事がつゞく。結婚式は五月四日だとの事。

三月二十八日 晴 暖

いよ／＼春めいて今日あたりはもう炬燵の火もいらぬやうな心持がする。暖かい陽氣が花を誘ふ様だ。いつか庭のあの古木のこぶしの花が七分通りさいた。この花がちら／＼散り初める頃に、丁度いつも櫻が満開になるのかうやつて花は毎年春を忘れず咲きかわるが——

三月二十九日 晴 稍寒

今朝起きると思ひがけなく百合子から三通の手紙——一つは父上あて——私も含む。一通は私への親展、一通は壽江子にあて、ロシアの押花さへはいつてゐる。美しいあちらの花の面影が伺はれる。

病床にあつて尙細やかな彼女の心根を考へると、私は涙のにじみ出るのを覺へた。そして例の通り三通のどの手紙にも一言悲觀の容子が無い。是だけでも敬服に價する。特に今度の大旅行について細々との注意——たゞ心的動靜を洩さないのが幾分私には物足りないが、しかしこの長い病院生活にも少しもあせらず、自然の回復を待つ悠然たる態度の見へ且さう書かれてあるのがたのしい。國男への注意は特に若い者の上に大なる教訓を與へる——私もう悲觀の境地に沈淪してゐない。勇ましく彼女の恢復に全力を擧げたい。

四月二日 小雨 寒

今日の汽車はかなりこんでゐた。

めづらしく壽江子が葛西善藏氏の妻にあてゝの手紙をよんでくれ、それが又かなり興味あるものであつたので、知らぬ間に東京近くまで来てしまつた。文士生活——いつも聞いてかなりしつてはゐたものゝ、これも又かなり悲

惨な気がした。救はれざる物資の窮乏、己に克つ事の出来ない飲酒の癖——それに伴ふ病氣の進行——畢竟文士も亦己れに克つ忍苦の道程に精進しなければならぬ事を深く感ずる。貧苦、病苦、然して飲酒——呪はれた運命は必然的におしよせる。己れをして大ならしめんがためには、いひ古した諺ではあるが克己——これでなくてはなまい。貧苦と戦ひつゝ、尙酒盃を離し得ない——情なき弱さを考へずにはゐられない。

#### 四月三日 晴 稍寒

高岡の市立図書館から百合子の筆蹟、著書等を聞いて来た。彼女のため知らせておいた方がいゝと思つて改造社にたのみ調べてもらふことにした。

文藝家協会から勸誘状が来た。

河合さんのお宅へかまぼこをもつて行つた。表門は大變場所が變つたが堂々たるものになつて大きな石が玄關に踞つてゐた。

春江さんはまだ頬にやつれは見へるがすつり回復したらしい。ほんとうに案ずるよりはの——諺通りだ。

今日ざりであの風神、雷神の名作（光琳と抱一作）が展覽を終るといふので、ぜひだけは見たいとあるじに話し丁度國民美術の松方氏所蔵の西洋名畫や、ゴブラン織の是も展覽會の招待日をかねて、めづらしく正午には上野へ出かけた。もうそろそろ花も開かうといふのにこのまあ風の寒い事、あの高い美術館の階段の上に立つと身ふるひが出る様だ。流石評判の屏風の前には人だかりが殊に夥しい。やつとかきのけるやうにして見物したが、流石非凡な天才の所有者だけあつてどれもこれもこれと筆力の——以下餘白

國民美術の松方展の中、ゴブラン織の壯大なのは先づ目を引いた。しかし目が近い上に、何の豫備知識のない私には、たゞそのスケールの大きさと色彩の愉快なのに興味を感ずるばかりであつた。場内ではいろいろの人におじぎをした。名のわかつた人、わからない人、大下未亡人と息子夫婦、荒川、坂井犀水等々——。

#### 四月四日 晴 温

今朝は横田さんに頼んで一馬の診断を乞ふた。どうかと氣遣つたが今咲枝から聞くと、以前の肋膜炎の弱點で中々全快しないのと、一つは自分が胸を氣にしてゐる——その爲のみであり心配にならないといふ診断で皆大安心。間もなく横田さんからも同様の電話があり皆よろこんだ。

横田氏の診断は明快で情味がある。是が私に何よりよろこびを與へ、信頼をまさせる。新らしき横田博士よ、願はくばいつまでも此調子を忘れてくれるな。昨日は子供の遠足で、このお父さんわざ／＼一しよについて行つたとの事、子を育てるのにこれほど徹底したなら出来そこないはあるまい。よし出来ても悔ゆる處はないであらう。横田さんの子達に幸ひあれ——

#### 四月五日 晴 暖

午後四時頃俊夫さんが来た。流石に此人にも商賣氣がある。

「洋行するならぜひ國ちやんと咲枝に生命保険をかけなくては——」と第一に云ひ出した。此詞に皆思はず吹き出してしまつた。

おやつには咲枝さんのつくつたサンドウキツチが大變うまくて、皆よろこんだ。  
朝の中片岡弓八氏から電話で

「私は最近ロシアから歸つたもの、百合子さんの近況をおはなししたい」といふ事だつた。急に私の耳はのびた様な気がした。

「まあお忙しい處恐れ入ります。ゆり子はやはり太つておりますか、それとも——」

「イヤ不相變太つてゐて、何でもたべられ一寸見てもは病氣とも思へません」

私はこの詞に安心した。そして

「おはなしを伺ひに、あるじが上るやうに申しおりました——」

#### 四月六日 晴 風 暖

今朝の相談では父上御年忌に付祭典は安積で舉行しやう。どうせ新夫婦の展墓もありかた／＼あちらで——といふ事で、電話のあるところへそれ／＼通知した。通知の文案をかへたり、その箇處をしらべたりした。

#### 四月九日 晴 寒

今日はいゝ日だつた。なぜなら事務所の齋藤さんから電話で、百合子さんから電報が來ました。先生はお留守なので御承諾を得て開封しました。その電文は「タイインシタ、シユジュツヤメテカルルスバアドユキノホーシン、ゴアンシンコウ、ユアサ」の電文だと、關さんの取次で聞いた。まだ私がねてゐると思つて——

#### 四月十日 雨 寒

今日は改造社十週年の祝賀會がある日だ。それで成るべく過勞にならぬやう心がけて、齒醫者も斷つた。百合子へ悦びの電報を湯淺さんあてに出した。「ヨロコビニタヘズ、オホネオリラシヤス」

ほんとうに私は心から湯淺さんの好意と、異境にあつての心遣ひを思つて涙ぐましい気持ちにまでなつた。そして今日の改造社の祝宴にもはれやかな気持ちで出やうとした。

朝から曇りがちの空はかなり冷やかだつた。竊に樂譜のような裾模様の訪問服を二枚重ねて、あるじと共に東京會館に行つた。三階の大廣間にはもうかなりの群集があり、赤いリボンをつけた世話役の人々が斡旋してゐた。入口に社長が立つてあいさつをしてゐた。

かなり待つて餘興が始まつた。永井郁子女史の獨唱——各外國の歌——日本人も中々うまくなつた。殊に輕妙な轉化は巧みに外人を摸し得て更に繊細な處がある様に思へた。それがすんでから少憩の後、阿波の鳴戸の御詠歌といふのが、此人一流の和洋合奏によつて歌はれた。まづ例の赤毛せん山の臺の小さいのが出て、其上に三味線弾きと箏を弾する人がのつた。

弾き出した三味線はかなり巧みな音律の中に、永井女史は前方に立つておちついた靜かな聲でうたひ出した。兼て私が思つたほどでなく、かなりよく調和され、箏も又一種獨特な調子の高い伴奏的なものであつた。たゞもう少し改善したいとおもつたのは、この三味線弾きの折々あがる奇聲で、一寸浪花節に聞くやうな煽動的な下品さが、おちついて物さびた永井女史の獨唱にあまり不似合な事がおしれました。おそらく此藝人のいづれにも、永井女史はかなりやかましい指圖と訓練を與へしめたものだらう。そしてどうしてこの下卑たかけ聲の調節をはからなかつた

らうかと、いぶかしくさへおもはれる。がしかし、又考へ直すと或はこれが一種下調を喜ぶ民衆の賛同を得る方便かも知れない。繊弱な——永井女史を見ると殊にこの詞がふさはしい——一婦人の身でよく時流に先んじ、革新の道を辿らうとするその努力の大なるを思ふと、現在ロシアの病院に病んで、尙些の泣言もいはず懸命に一日を生かさんとする百合子のそれに思ひ及んで、私は目の中があつくなるのを禁じ得なかつた。

かくて大喝采の内に餘興は終つて直ぐ晚餐會に移つた。四階の大廣間に電燈は輝しく、七百に上る群集は雪崩の様に席を壓した。私達は室の左側にやゝ空席を見出して腰かけた。偶然にもその前面に永井女史の一行があつた。

夫君らしい半白の赫ら顔の黒い背廣服の紳士を挟んで、女史と伴奏した若い令嬢があつた。赤い——ローズ色の紋付——大がらな、かなり利發らしいが平顔の俗にいふのつぼうといふ格好の令嬢——殊にその着付のまづきは一層この令嬢を損な立場におかしめた——背中に間のびのするほどひくく結んだ帯、たぶくした紋付——髪さへも貧弱に薄く赤く、手づくねらしかつた——

是に反して永井女史の方は流石に容貌もきりつとした瘦せ形の神経質らしい、小柄な人で、着付けもシャンとしておそろく人手をかりたらしい髪つき衣紋つきだった。先程の感激の情を何とか一言いひたく思ひながら、間もなくスリーブが運ばれ、次々に皿がかへられた。私が思ひの外よく食べられたのに引かへ、女史の皿はいつもほとんどへり目が見へなかつた。人前をばばかつてどもあらうか女史は誠に言葉少く内輪な物腰で終始した。特に驚かれる事はその何にもろくに食べられない事だった。肉嫌ひな私でさへかなりの皿をあけたのに——これも聲樂家のたしなみなのだらうか——

四月十三日 晴 暖

後藤伯遂に逝去の號外が出た。あの元氣旺盛な事業家も遂に逝かれたか。私の最も敬服する處はその手腕でも何でもない。あの情味のある——故郷に親しい點である。又しても私は郡山に來遊された當時を追想して感慨無量だ靜かに香をたき、寫眞に禮拜した。

四月十五日 晴 暖

今日は思ひ切つて丸ビルの髮結に相談しやうと、丁度天氣もよし、車が一寸あいてゐるのを利用して丸ビルのマッド化粧店へ行き結髮の相談をした。成程す江子のいつた通り義手らしい左手をブラ／＼させた四十近い男がゐたとして、

「主任が今生憎のませんが、今電話をかけます。もう直き歸る時間ですから——」

かう云つて室内のベルを鳴して何かはなした。部屋はあれでも一寸十疊位もあらう、かういふビルディングにありがちな陰鬱な暗さを電燈が辛く補つてゐた。隅にソファが置かれ、その隅に——停車場でよく見るやうに風呂敷を抱へて、兀然と一人中老の婦人がよりかゝつてゐた。髪もみだれてつかれきつたやうな恰好をしてゐる。ほとんど眠つてゐるのかの様一言も發しないし、又些の身じろぎさへしない。變だな——と私は心の中に思つた。その中以前の男がいろ／＼のさもじや、つけ毛を出して見せた。成ほどかなり巧みに出來てゐて、丸で頭全部をおほふ様な大きいものや又中、小、といふ風にいろ／＼ある。その大きなのは八十圓とかいつてゐた。極小さいのも二十圓だといふ。やがて其所謂主任——といふ婦人が立つて、私たちのそばにあつた。四十そこ／＼になつてゐるだらう

此人は手にかなり大きい黒色のかばんをさげた女中を後に瘦形はかなり高いからだに羽織は着ず、何か一寸かすりのある柔らかな物を着てゐた。恐ろしく険のある目付がまづ私の目を射た。くぼんだ底光りのその目に加へて大きい口、こけた頬、淺黄色の帯上げがげばくしく胸にうづ高かつた。私の年であればこそ隠せず私は彼女に對してかういつた。

「私なんぞ何も手をかけて髪をゆふ年でもありませんが、今度一寸長い旅行で船に乗る事になつたので、何か手数のかゝらない——そして白い毛が目立たないつけ毛のやうなものでもあれば——とかう思つたので。」

「あゝそれはいろく御座いますが、あなたのはさう大きなには及びません。かるいのでいくらも出来ます、おぐしを洗つて一寸その髪の色を見せていたゞけばどうでもなります。」

「しかし一人でゆふのは中々むづかしいでせう、實はこゝにゐる此の人が一しよについて行きますから、よく覺えてもらつたらゆへませうか。」

「エ、く、もうそれは私共へいらつしやつて二三回お教へすれば、きつとお覺えに成ります。あの市村羽左衛門——あの人の奥さんも洋行する時、中々髪が六ヶしくて——何かの拍子で私が口を滑らせると、そんな事だつたら一しよに行つて貰つたのに——といふ事で一寸時がおくれましたもので——」

中々トリツクに富んだ話だと思つた。ふとその婦人は私の後ろの方に目をやつて「まあくしばらく」と聲をかけた。何氣なくふりかへると、そこにはもうあの無言のおばさんは姿を消して、若い娘風の人と女中らしい中年の婦人が腰かけてゐた。

「まあ、よく入らつしやいました事、今年も又觀櫻の御宴に入らつしやいますの？」

「エ、それで又着付をお願いしやうとおもつて——」と、女中が引きとつて答へた。

眉唾ものだぞ——かう私は心の中であつた。觀櫻の御宴に召される程の家の令嬢が、わざく此美容館をたづねてお願いするまでの事があらうか、要は電話一つですむ事なのだ。是は世にいふ「からくり」の廣告ではあるまいか——かう思つてゐる私の前に、かの婦人は別の附毛を出し、格好をつけて見せた。成程餅は餅やで大變よさうに思へた。私は以前の男に聞いた附毛の小さい方の値段が或はあやまりではなかつたらうか——かう思つて更に聞いた。

「エ、二十圓！これでもせいぐお安く勉強して願つてゐるのでございます——ほんとうに丸ではげた人でともあつたら値段なんぞいつてはゐますまいが——」

「とにかく又それでは用意をしてお頼みませう。」

かういふ言葉尻はもうカアチンの内外に私をへだてた。

「マア何といふこわい人でせう、私とても感じがわるくていやでした」

「さうでせう、私でさへ大分あの目つきにはうんざりしましたもの」

かういつて私はこの老大なビルディングの中に巢くふ多くの商店の上に不安の顔を下して外に出た。文明の暗黒面——ほとんど幾年に何回といふほか、かういふ建物に交渉を持たなかつた私は、ある探偵小説の一場面をさへ考へながら街路に立つた。夕暮の風は快く、しかし薄寒く私の肌を襲つた。かなり汚なくガタ／＼の圓タタは數十分の中に縁濃く花片しきりにおつる林町の宿に私たちをおくつた。

自らを嘲ける如き心地しぬ鏡にむかふけはひの一時

この舊作が又私の心に蘇つた。

あるじは今夜後藤伯の邸に半通夜をつとめるといつて夕飯にはおられなかつた。

四月十八日 晴後小雨 寒

二三日來の暖かさに馴れた皮膚が又今朝の寒さにはひどくこたへる。

昨夜はどうかして又不眠に襲はれた。三時と思ふ頃ゆさ／＼と水平動が中々つゞいた。あの押入を背に私はす江子をよんだ。三人して並んでゐる中、かなりつゞいて止んだ。この時分から殊に寒さを感じて來た。同時に無暗に目が冴へてねつかれない。色々の事が胸に浮き目にちらつく。いくら心をおちつけようと焦つても冴へきつたまふたは容易に合はない。かなり離れてゐる田端驛頭に出入りつする汽笛の音さへあざやかに耳を驚ろかして、世はころ／＼白み初めると共に、騒音が次第にその領域を廣めやうとしてゐる。

今夜は國男と咲枝の爲、大瀧さんと横田さんを夕飯に招待してゐる。そこで仕度をし、銀茶寮とかいふ星ヶ岡の出店へ車を走らせた。

一度も行かない處はどうだかしら——と案じた通り二階のその部屋はひどく狭かつた。お客が配膳の手傳ひをしなければならぬ位——どうも昔から銀釜とか何とかいふ處は酒客の好むところが多いがと——氣になつた通り人を招くには一寸不充分だつた。食べた物もそれに準じて數も少なく淡泊すぎた。たゞいつもの鯉のかわり煮、あいなめの大きいのがかなりうましく又めづらしかつた。私たちのやうな小さいおなかでも少々もの足りない。此品は横田さんあたりには氣の毒な氣がした。もう二度とは——と門を出ながら私は思った。おそろくあるじも同様だつたらう。

つたらう。

北村さんに電話をかけて、國男の齒をなるべくぬかないで——と頼んで同意を得た。

洋酒三本入一箱を同氏に贈つた。

四月十九日 曇 寒

この頃又かういふ事を考へた。それは、この日記をかく事もかなり暇をとり又折々は中々の努力だとも考へられる位だ。それ位なら一そ自叙傳の方に精力を集注した方がいゝのではあるまいか——かう思はれるので、今日も又かきかけの自叙傳の方をつゞけけやうとしたが、生憎東京の金庫にしまつて來た。そこで又これをかきつゞけるのだ。

おけさが今日は歸るといふので何やかや田舎みやげをそろへてやる。あの一郎爺やから始め三代に近いそのしたしみはある特殊なしたしみを感じさせる。次手に市次郎に貸す馬の代二百圓も持たせてやつた。先代の寫眞も薄くはなつたが折角の懸望もだしたがくてかし與へた。途中で食べるやうにと丁度もらひ合せた牛皮の鳥の子やみかんなどもそへて、いつもおばあ様がなさつた通りお茶と梅ぼしを立ちぎわにたべさせた。

田舎ものにしてはかなり頭のいゝところのある彼女は、養子夫婦が生きぬ仲で定めしいろ／＼物足らなさはあらうが、少しもその事について不足がましい事や、亭主の泣言はいはない。これだけはなか／＼田舎ものにはめづらしいとおもつた。やはりおやぢの一郎爺に似てかういふ事はなか／＼わかつてゐた。やはり血筋は争へない——かう感ぜずにはおられない。



水野夫人から電話がかゝつて、同窓會の事につきはなしがあつた。

「大磯へ泊つては——思ひ出に成りますわ。」

かうやさしくいはれたが、自分のからだが変わりやすいので皆さんにめいわくをおかけしても——いつそ今度は皆さんの多数決にして暇があつたら私一人で御泊りもさせていたゞきませう——かういつて電話を切つた。三越に行き夏半襟やおめし類をかつた。

#### 四月二十日 雨 寒

久しぶりに坪内博士の力作された中央公論所載の「良寛と子守」と題する戯曲を江子によませた。かういふ人生を超越した世界——それにも或力があつてかく百幾十年の後、尙かく人に平和と超凡の味を感じしめる。

#### 四月廿一日 晴 暴風

夜來の雨は晴れて暴風と變つた。海岸に近い漁村は一體に雨戸を閉ちて森閑としてゐる。

沖には白帆の影もなく、どす黒い浪が高く唸つてゐる。午後三時頃、電線が切れたと見へて水も出ず電燈もつかなくなつた。江子一人歸京させる事が心もとない程風はますます吹きすすんでゐる。

こちらへ來る時齒醫者へ行かなかつたので、夜中齒から藥の臭氣が洩れ、且つ粘り氣のある唾液で困つてしまつた。

毎日ロシアから西野博士の電報があるかと心待ちにしてゐる。もう手紙などまだるいやうな氣かしてかく氣もし

ない。

仕度の中一番氣になつてゐる洋装の第一がオーキ商店の失敗でウンザリしてゐる處へ、林さんの御はなしで、いよく日本服ときめてからよほど氣分がかるく成つた。もうあとには僅かの不足品と頭髮の工夫さへつけばすぐつめるばかりだ。どうか西野博士からのいゝ便りを得て、かねての願望を果したいものだと思ふ。

#### 四月二十三日 晴 寒

やつと旅行券を願ひ出る書類がそろつて、明日は一同出頭して寫眞通り相違ないといふ事に成り、許可を得るのださうだ。

#### 四月廿四日 晴 稍暖

朝九時頃事務所へあてとらう待ち切つた電報が來たさうだ——これはあとできいたが「タテ、ニシノ」といふ誠によろこばしい電報だつた。やつとこれで目的がきまつた。

府廳へあるじと一しよに行つて旅券をもらう手続きをすませた。

#### 四月廿五日 晴 暖

事務所から西野氏へあて

「ゴアンチャクオノデトウ、ゴシンサツチカンシヤス」と打電した。

百合子より「カアルスバアドヘタツ、ウキンコウシカンキツケ千エンボンドデスグタノム」かういつて来たので、すぐその取計らひをして、金を送り「ロンドンマワリミツビシギンコウデンボウガワセ、ウキンコーシカンアテオクツタチウヂウ」の電報を出した。

國男のお祝ひに井上誠夫氏御夫婦が見へた。そしてさびないスプーンとナイフをおくられた。

四月廿九日 晴 冷

今日は大層おだやかな天気で二日つゞきの休みなのだ。その時を利用して國男と咲枝の御披露につれて歩かうと午後から出かける。

旦那が大瀧さんへのお祝ひの軸物をもつて行かれた。旦那が今村繁三氏にすゝめられ、齒醫者に通ひ初めた。

五月四日 雨 寒

今日は又非常に寒い。大瀧さんの結婚式があるといふのでそれ／＼その用意をする。

生憎朝から雨で氣候がむやみに寒い。午後三時半までに——といふ事で、旦那と一しよに飯田町へ行つた。もうそれ／＼お客が来てゐて混雑してゐた。ひろ子さんが例になく萌黄色のほかしのお振袖に帯の形もよく、見ちがへるやうに奇麗になつて出て来た。高ちゃんや皆それ／＼盛装してゐる。やがて時刻が来て二階の新築で式が初められた。媒酌人は今城子御夫婦で、かの日比谷の通り白い着物に緋の袴の若い人が三人と、年増の黒紋付が一人で萬事を指揮してゐる。神官が二人床の間に例の二柱の神の掛物をかけ、いろ／＼とり揃へられてゐる。日比谷や東

京會館のやうにそれ／＼式を終つた。

新郎新婦——それにはあまり年老ひた此二人の伉儷に對したゞ感慨深く何といふべき詞もない。

旅券がやつと下りた。方向が定まつた様な気がする。

五月七日 雨 寒

今日のはかたて書いておいた坪内先生への手紙をまとめたといふので、八十島の披露をも断つて朝から二階へ上つた。いろ／＼不満なところも訂正して切手も三枚はる位の長文の手紙をかいた。かの役行者の演技について、又ハムレットを通して英男の性格その他についていろ／＼の事をかいた。そして序幕から紅一點を交へない森嚴な演出法について、藝術の權威をさへ感じた事をのべたのだつた。そして家族一同で通路の旅に上るべき覺悟をも報じた。そしてかの弘道一冊をおくつてお覽を乞ふ旨に終つた。

饗宴をさへ断つた代りに私は今日はかなり努力した。そして英男の石碑の横に刻すべき英男の歌「物事にびくともせざる男あり動くといふは歩く時だけ」の彼の歌と私の「濁りたる水にうつさん影ならすそはいや高いや清くして」の歌を淨書した。明日は是で送り出される事になりやゝ安心出來た。

五月八日 小雨 稍寒

麻布のマリールイズの門を訪れた。別宅にゐた同女は、よびよせられて自動車の中の私と應接した。すつかり日本化してゐる彼女は、いかにも物なれた日本語と態度で——遊ばせ詞——でいろ／＼簡単な結髪法をはなした。

「船の上ではペールをかぶる事とか或はまたそのまゝで佛國の本場でおなはしに成つては——」など、いひ、流石は交際なれた如才な事で利口らしく、自分も半頭のつけ毛でこんなにして——とまで無難作にほめて見せたりした。結局午後五時過からは誰もゐないから、是非一度は結髪して見ては——といった。

家へ歸ると根本さんからの電話で、來たいとの事をして、泊る事にしていろ／＼夜話をした。湯治場であつた老人のはなしや、いろ／＼と聞く處が多かつた。讀書するめがねを、村田の店員が來てきめた。

#### 五月十三日 曇 稍暖

大瀧潤家さんから兼て約束の救急箱とか衛生箱とかいふものを事務所へ届けてもらつた。大變いろ／＼なものはいつてとつてゐる。

高松政雄氏が久しぶりで訪問して見へた。饒別にきぬのぬいとりの手巾二打を貰つた。久しぶりであつたのでいろ／＼のはなしが出る。しかもこの人の歸つたあとで感ずる事は「あゝなぜ私はこんなに何もかもぶちまけてはなしてしまつたらう」といふ後悔の念がいつもおこる。私も一寸お調子にのる點があるらしい。注意したいものだ。

#### 五月十五日 雨 暖

今朝届いた坪内博士の書簡——それは誠に私の期待に反したものだつた。

あゝ、やつぱり子を亡つたものでなくてはだめだ——いくら老博士が文學者であり、大家であつても、この人情

の機微は、生み——育てそして——失つたものでなくてはわかるまい。それを私は彼博士が追々年老いられるにつれ、一種老翁に通有ないろ／＼の動作や態度から亡父に對する思慕の情からひいて他人と思へないなつかし味をさへ感じてゐるのだ。それが今この一生に刻み込まれた深い／＼悲しみに而して。幾分悲しみを訴へたいといふ様な甘へ心から、私は包まずかくさず、この目のわるい體を督して丈餘にあまる手紙をさへかいたのだ。しかし、實に／＼あまり常識的であり、子を持たぬ——一種の心の硬さからこの私の氣持も酌み得られない事が私にとつては何といふ失望であり意外だつた事だらう。

大下春子さんが見へた。御饒別にうちはや扇子を貰つた。洋行するものにはいゝ思ひつきだとおもつた。

電話で都合を聞いてから野上彌生さんが見へた。兼て此夫人の持つ甘つたるい調子——舌たるい語調に——ひどく文學者として想像した私の期待を裏切られてゐた私だつたが、今しばらくぶりであつた此人には、其當時——去年か一昨年頃——よりも尙一層の甘たるさ舌たるさを感じて、初めの中は聞くにたへないやうな氣持ちさへした。しかし馴れるといふ事は恐ろしいもので、話してゐる中に追々そのいやな感じは取れてかなりおだやかにはなす事も聞く事も出來た。

「いやなおはなしを申上げる様ですが、百合子さんの御病氣は大分およろしくないように聞いております。何しろ今度で三度目ですもの——」オヤ／＼と私は思つた、丸で初耳だもの——

「死にでもしてはつまりませんから——」

かうむき出しの詞は私の胸にひびいた。何といふやさしさのない詞だらう。英男の事などにもこの夫人の高い理想のない事がほゞわかゞわられてがっかりした。

五月十八日 晴 後曇

午前十一時頃井上眼科院長が見へられた。あの多忙のからだで——と恐縮におもふ。先日の遠視の方の眼鏡が工合がわるいので、それを更に直して下さるといふ事なのだ。

富樫の女房やいねが来た。稲の頭髮は半分眞白だ。それがごましほより更に老人らしく見へる。若い時は江戸ッ子らしくすつきりした形でゐた此女が、相撲のやうに太り、この白髪を見ると、家庭にはいり切つて他を省みない心理もわかつてかへつて幸福だともおもはれる。若い時は夜々ようちやんに本など習ひ、かなり智識的にもはれたが——しかしこの方が幸福かもしれない。

朝俄に安積からおけさがヒョッコリ一人でやつて来た。

藤巻善助が靴下をもつて暇乞ひに来た。

五月十九日 晴

扱いよく、明日は私の一生の記念となるべき海外行脚の旅路に出る第一日だ。

何しろ朝が大分早いので、ね忘れては大變だと思ふと全く安眠第一でなければならぬ。

取次の者に命じて今日は御婦人の外一切の訪問客を謝した。そして、どうか事なく立つやうにしたいと努力した。しかし親類の人たちは代々く来てくれた。河合の春江さんが子供をつれて来たが、大さう二人とも丈夫らしく見へた。同期卒業の久保、永井両夫人が玄關から暇乞ひに見へ、何といつても上らさずに歸られた。大瀧基さんと、あとから大瀧夫妻が見へた。

齒科の北村さんがあの小さい體に袴をはいてチヨコナンと應接間に立つた時は、それを見下す體にあいさつをするのがきの毒に思はれる。いつも此方が齒を療治される場合は腰をかけてゐるせいでもあらうが、しみなく小さいと思ふ。

十一月十五日 晴 暖

國府津の今朝はほんとうの小春日和だ。春風胎蕩ともいへるやうに風さへ物和らかだ。

今日は倉知がわれわれの歸朝祝ひのため花月に宴を催した。それに列席すべく午後一時過の汽車で歸京する事にした。

蒲鉾を倉知と河合宅へと買った。例によつて例の如く汽車は走つて四時近く東京驛についた。

それから着物を社交服にとりかへて事務所により更に新橋の花月に行つた。倉知、大瀧先着、俊夫、ひい子ちゃんがお供として出席してゐた。久しぶりに純日本式の料理はうまかつた。

十一月十九日 快晴

今朝も旦那はだるいとしきりにいふ。しかし出て行つた方がかへつてまぎれるかもしれないと出かける。

十二月四日 晴 寒

今夜の借樂園の親類會では、本田老人、西村一彰、大瀧夫妻、基、倉知父子、津川竹次郎、河合夫妻、横田、徳

岡道之、小田切直行、下島、松平、他にわれ／＼三人の一團だつた。金解禁のためかこの借樂園もしづかだつた。自動車もわれ／＼だけのみで女中たちもひまのせいが多勢玄關に列をなしてゐた。これではこの大伽藍をひかへて營業も容易ではあるまい。皆がかういつてゐた。しかしこの内輪同志氣のおけない會食は不相變愉快だつた。しかしその樂しさに一抹のかげを投げるのはロシアにゐる彼女の事だ——

杉山不二さんから結婚が成立したのでその披露をするといふ通知があつた。

十二月五日 晴 寒

今日は朝から曇つてゐる。

めづらしくす江子も油がのつたか一生懸命油畫をかいてゐる。どうかこの調子で好む道に精進させたい。

今夜は星ヶ岡へ俵兄弟、野本さんを招いて大臣任官のお祝をした。

十二月十三日 曇 暖

倉知の俊ちやんと緑郎さんが來た。何でも紀さんが風を引いて三田にねてゐる。そしてレコードが聞きたいといふので兼てかしてあるのをとりに來たのだといふ。そして自動車待つてゐるから大いそぎだ——「何といふ坊ちやんたちだらうと私は思つた

す江子が家の附近を寫生した。近代人はかういふ事はうまい。どうかこの勢ひがつゞけばいゝが——

十二月十六日 曇 雨

今朝國男から手紙が來て電報は賀茂丸のちがひらしい。それだと二月十二日頃横濱着らしい。シベリアよりは日數も金もかゝるが、しかしあの人たちにはこの方がむしろ安全でいゝかもしれない。あの恐ろしい浦鹽埠頭の思ひ出は今考へてもぞつとす——まゝいゝこの方が安全第一だ。

十二月十八日 晴 後雨

彼はある時——それは彼が盛んに花に熱中した頃だつた。どういふ折だつたか、私はかう云つた。

「ねー英男さん、おかあ様はすゐぶん澤山の子もちだつたがどういふ不幸なまわりあはせか皆早く死んで——その度々の悲しさはとう／＼こんなにお母さまを弱くしてしまつたの」

「おかあ様、まあ御覽なさい、僕がかうして丹精して蒔く花の種でさへいゝのは中々出ないで、雜草はかまはないでもたくさん生へるの、おかあさま、少しでもいゝのならよかないの？ ねおかあさま——」

かういつて慰めてくれた。

丁度それは高等學校の受験を前にした夏休みの終り頃の事であつた。

「日光を見なければ結構といふな」とさへ人々が推賞する——それをまだ知らない私たちをつれて、あるじも大學以來久しぶりに日光見物を企てた。私共夫婦に子供三人、行きは自動車、歸りは汽車、代りばんこといふ事で、折からもろ／＼初秋で天高く氣清い日光の山さして出かける事になつた。折からの土曜日曜に近郷にゆく事はあつても、中々皆揃つて——といふ機會はなかつた。物よろこびをする——直情經行の彼英男は「愉快だなあ——」

といひつゝあの大きなからだにふさわしい大声で怒鳴つては手を振りつゝにこ／＼してゐた。金谷ホテルへ着いたのは——時頃もうそろ／＼紅葉しはじめた山々の錦にてりはへて、此のホテルの紅が際だつて目についた。めづらしく二間を占領してゆつくりくつろいだわれ／＼は少憩するとすぐ——以下空白——

十二月十九日 晴 稍冷

今日は江井がオートバイと衝突したといふめづらしい事件が起つてかなり皆を驚ろかした。それは何でもあるじはのつてゐないで彼一人の時であつたさうだ。丁度日本橋へんでいきたり横あひから一臺のオートバイが現れた。横腹へあてられては大變だといふので全速力で江井がかけた。それで泥よけにあたつて曲つてしまひ、はづみをつくつて相手ははふり出されて失心してしまつたさうだ。それで近所の病院へかつきこんで治療をたのんださうだ。意外の事もあるものだ。被害者は何でも兄が民政黨の暴力團だと傲語してものにしやうとするらしい、いやな世の中だ——しかしいゝあんばいに裏に横田巡査がゐるので此人に萬事相談する事とした。

井上眼科病院長夫人からわざ／＼御使で鳴とかつぶしを到来した。親切な手紙がついてゐた。

十二月二十日 雨 冷

今日は開成山の關さんから意外の報を得た。それは昨夜盗賊が雨戸の錠を破つて侵入し長持から蚊帳やいろ／＼のものを盗み去つたとの事だ。やはりあんな寒村まで不景氣の風——

十二月廿一日 寒 晴

二三日前から少し秘結してゐたがとう／＼また下痢がはじまつた。

今日は向島と龍太郎が来る筈だつた。果して午後二時過相伴つて來訪、私は病床で彼らと話した。龍太郎もいろ／＼はなしをする。——窮迫の状態を——何しろ見ると非常に焦すいしきつた面貌だ。煙草もすはず、以前よりもつと／＼耳も遠くなつて、ほとんどどなる程度でなければ聞へない。何といふ親と子——私は何といふ事も出来ないやうな感情が胸を襲つた。この人を親として生れた子——それが私の甥と成つたのだ——私はその母をさへしらないのだ。哀憐と憤懣——嵐のやうな感情が私の胸を過ぎた。しかし兄が先へかへり、あとに龍太郎が居残つて涙片手に哀訴する。それも亦愚ではあるが眞實さが私を優しくし、彼英男の博愛の精神を想起させた。私は彼のうけた運命のあまりのいたまじさに涙ぐんだ。そして今一度彼のため最善の努力をつくさうと決心した。彼が要求を容れて金五十圓をあとからおくり、又彼の妻にあつて相當の人ならば此家にもその子とも引とつて世話をしやうと決心した。私は長時間にわたる此二人の話に疲労して、夜に入り眠れなかつた。

今日は全く浮腫がとれて輕快だ。しかしこれが下痢のためだとすると又々ねてゐなければならぬが——  
下島の俊ちやんから數の子一樽發送のしらせがあつた。

十二月廿九日 小雨 冷

今朝は大變に冷へる。

新聞で見るとアムンゼン翁の大なる足跡を南極で発見した事がかいてある。何でもそれはピラミッド型の小さい

石の積み上げたもので、中にマチツや日記の一節があつたとの事だ。発見した一行の驚喜は言外のありさまで、犬までおどりを上つたとかいてあつた。噫偉なるかな——

書生たちが来て年賀状のかくのを手傳ふ。

十二月三十日 曇 小雨

昨今は何處でも賣出しのかき入れ日だのに心ない雨だれの音が寝耳にひびく。——あゝ氣の毒だ——かう思ひながら私は此頃のならひでやはり早く床を出た。

やつと待ちに待つたトランクがついたといふ報を得た。郵船の好意によりほとんど無税で着いた。何でも郵船の重役島村さんから一寸聲をかけてもらつた爲らしい。何でも縁故が必要な世の中だ。これでまあ待ちに待つてゐたおみやげが出来たのだ。

十二月三十一日 雨 寒

いよく今日は大晦日だ。今年の一年は何といふあはたゞしい年だつたか。外遊——是が最も大なるわれわれの企圖で、それでもともかく遂行してしまつた。半年間の旅路、外遊としては實に僅かな時間でほんの足を歐洲の一角に踏み入れたにすぎない。しかし何といふさまざまの試練と、人生の限りなき寂寥さと苦惱の數々を味つた事だらう。

夕方あのサイベリアで一しよだつたOさんが来た玄關でといふのをまあ——といつて客間に導かせた。久しぶり

にあつた此人はかの旅中の時よりは大分おちついて紳士らしく見へる。聞いて見るとあの評判の外國婦人とはもう結婚の意志は薄らいだとの事だ。何しろ友人の誰に聞いても外人との同棲は好結果を齎らせない。畢竟自分が獨逸へ行つた時だけの同棲生活——それでいゝのだと思ひますとの事だ。私は例の通りそのいゝかげんな態度をなちつた。しかし三十過ぎての結婚にはもう青年時代の情熱はさめて、お互に打算的たるを免れないのだ——かう明らかになつていふ此人にはどうしやうもない。中老の淋しさがあるのだ。それを私がどういひ得やうか——人生なのだとはばかり。しかしこの人は割合に面白い人だ——靈の世界——それをさへ考へてゐるのだ。私の今度の大旅行によつて全快した宿痼のはなしをして、私が彼の靈の力だといふのにもかなり共鳴し、同意した事などは私にある快さをさへ感ぜしめた。

昭和五年正月一日 寒冷 晴

ふしぎに連日の雨カラリと晴れて、世は春らしい晴天と成つた。うらゝかな日影をうけて南側の縁には輝かしい元旦の朝日の影があたゝかい日ざしを投げてゐる。

小林房次郎が年賀に来た。不相變まじめに口が重い。

Hさんが見へた。が此人の顔を見るとまづ今職に離れた事がいかにも残念に思はれる。そしてとる年につれて子供も多くなり、又追々に生計費もかゝる——元來無口で因循すぎるやうに見える此人が、どうして上の人と争ひなにかしたのだらう。何にしても親は泣きよりといふ——彼が兼ていつた通り——人の爲だ——私は自分のからだがよくなつたら一息微力を盡して見やう。

Tが息子をつれて来た。不相變無法な男だ。自分の事ばかりしやべつてゐる——是も人の事はいへない。狭量なものは自身の事でもう腹袋が一ぱいに成つて他を入れる餘地がないのだ——自分自身も省みるべきだ。あるじはめづらしく休みになつた心安さからか、しきりに腹が微痛で心持ちわるいといつて早く床にはいつた。兼て希望の温泉行を断行してはどうかと考へる。

元旦の夜は中々寒い、底冷へがする。明日は國府津行ときめてゐるのに、す江子が又ぐする——とう／＼疝癪玉を破裂させた——

#### 正月四日 曇 寒

今朝も又朝早く目が覺めた。

この國府津へ來るとやはり東京での疲れが出ると見えて、むやみにながつかりしてだるい。食堂のソーフアーに横になる。それで、氣を利かして東京からチーズの残りが来た。まあこれで助かつた。どういふものか洋行以來妙な好みが出来て、チーズなしのパン食は食べられないやうになつた。ふしぎな事だ。

地下室のぢいやが年頭に來た。何だか仙人の様なあんばいに夜ねると拍子木をたたくだけ、あるじたちが來ても年頭にも來ない。あまりひどいからいひきけて來させたのだ。それでもみかんや何かもつて來た。この男のもつて來たみかんは此土地一番のものらしい。味もよく皮が堅い。私ももとは皮の柔かいのをいゝと思つてゐたが、こつちへ來ていろ／＼のを食べて見るとやはり皮のかたい方が、ほんとうにいゝ質なのだといふ事がしれた。

#### 一月五日 快晴 稍寒

今朝は國府津にめづらしい寒さで、庭には霜柱が深い。けれど南に面したベランダには不相變南國を思はせる様な、暖かい日の光が満ち／＼とあるじはおなかを暖めるのだと半裸體に成つてゐる。私も又誘はれてそこに腰を据へた。

入浴する。國府津の風呂は實に池に近い感じがする。しかし百合子はあのタイル張りではキツトするだらう。想像するのも恐ろしいといふ——巴里ではなしたつた。私はそれは一種の神經衰弱に原因するのではあるまいかと考へる。けふも又しみ／＼とこの暖かな空氣と共にむされる様に快い湯に浸りながら、はるかに遠く雪に埋れてゐるであらうモスコウを思ひやつて、何ともいへない心持ちになつてしまつた。——

#### 一月十八日 晴 暖

Y博士に電話でつがふを伺つて今日午後二時といふ事でおたづねする。用件は兼て私の考へてゐたかの慈善事業について——奇矯でない方法その他を相談したいと思つたからだつた。しかしお目にかゝつた博士はもう最初から單なる洋行談をきく——とでもいふやうな——非常に吞氣さうに——家庭的になつてゐられる氏を見ると、どうしてもつきつめる様に思ひ込んでゐた自分の考へをさへ云ひ出しかねて、いろ／＼のはなしに時を過して歸宅してしまつた。

昨夕おこつたふるへはいつもと非常にちがつて床を離れる事が出来なかつた。何しろ二階から下まで厠に上る事が困難だつた。目がくら／＼する、虚脱したやうになり、それで西野博士を招聘して診察を乞ふ事にした。



とにかく同博士は右の鳩尾の處に肝臓の肥大せるを感じる——といふ事だつた。是はやはり膽石のやうなものらしい。たしかに肝臓が手にふれるし、明日太陽の光でよく見ると或は腫が黄ばんでゐるかもしれないといふ事だつた。しかし翌日見ても目には一寸も黄色を帯びてゐないとの事だつた。

一月廿一日 晴 寒

昨日か今日大寒に入つたといふ事だ。その爲かむやみに寒い。どうも此寒いとおもふと齒の根がガタ／＼しさうになつて不安だ。

今夕はロンドンの軍縮會議に若槻全權の日本語の放送があるといふので、皆待ち望んでゐる。定刻になると妙に緊張した氣持ちで皆ラヂオの前に集つた。アナウンサーの非常な努力と且日本の電波が非常に(二字不明)にあつて放送に困難な事を前提にして運がよければ聞けるが、只僅かに聞けるであらう一語二語でもよく聴取して満足してほしいといふ甚だ心細いやうな話だつた。しかしたゞ單に英京に於ける平和會議の様子、これを想像する事だけでもわれらの血はおどる。ましてかくなると有がたい事には彼地の様子はおぼろげにも私の視界の中に髣髴する——やがて數かぎりない騒音の中に一脈の英語が斷續して聞へた。ソラ——私の聴覚は異常に緊張する。しばらく斷續してこの音もやんだ。しかし人の聲——それだけでも満足しなげばならないのだ。あのわれ／＼が四十餘日を費して漸く着し得た英國——その音波をかうしてわれ／＼は聞き得る事が出来るのもだもの——かう思つてゐると、ふと嘔吐たる西樂を耳にしました。そら皇帝の出御なのだ——かうお互にいひ交してゐすまいを直した。丁度來合せた大瀧さんも聴耳をたてた。かなりしてからそれは何處か他國の音樂だといふアナウンサーのはなしで、皆吹き

出してしまつた。まあしかしそれも聞えないよりいゝだらうなど、いつてゐた。

「今度こそ聞えさうです」といふアナウンサー。成程やがて斷續しつゝもかなりはつきりと壯重な若槻氏の聲が日本語で立派に聞え出した。「何といふすばらしい事だらう。日本開闢以來始めての事だ——」私の目の中には感激の涙さへにじんだ。日本——とか、會議——とかいふ聲が折々聞えるのみであつたが——もうそれで十分私の心は満足させられた。聲をからせて放送に苦心する其人の努力は私にもわかつた。「本郷の一住民より」として私は放送局に感謝のはがきを出した。——あゝ偉なるかな科學の力——更により大なるエヂソン翁の努力!

一月廿五日 晴 暖

關千秋さんからはがきが來た。

横須賀のはなからかきのかひまゝのをよこした。その中にかいてある通り殼まゝあみにのせ、焼いて口のあくのをそのまゝ取り出して三杯酢にひたしてたべた。ほんとうにうまいと思つた。

壽江子に命じてはなに禮狀を出した。

一月廿六日 晴

國男と咲枝から久しぶりにはがきが三通來た。ローマ、フロレンス、ニースを経て遊覽してゐるらしい。中々しやれた事をしてゐる。

一月廿九日 雨

今日はひろ子さんの結婚の日だ。朝からくもりがちの空は今にも雨がふりさうだ。結婚式には雨の降る方がいゝといふ事を聞いてゐるので氣にもならない。何しろその爲大變あたゝかいのが私には何よりだ。ふだんとはちがふからおくれないやうにと少し早めに用意をする。

午後二頃大瀧さんから電話で、もう出かけましたといふ事だ。折よく仕度も出来てゐたのですぐ出かける。事務所へより一しよにホテルへ行く。もう大瀧さんの連中は来てゐる。廣子さんも大變に美しく髪も出来、着物もちよつと變つた模様だ。しかし私はあんまり感心出来ない。例の大彦の苦心らしいが、染に手をかけないので、ほかの無いのがもの足りないやうだつた。しかし(二字不明)がひのぬひなどは一寸目新らしく骨折りが見へる。色直しは古代紅の色でかなりおもしろいと思つた。島田も大變よく出来、よく似合つて小粒ながらとつた花嫁ぶりだつた。

二月六日 大雪

思ひの外の大雪だ——おきて見ると一面に白皚々たる景色には驚ろかされた。偉大なる天の細工だ——

今夕は後藤伯御夫婦や杉浦夫妻、西野さん御夫婦などを星ヶ岡にお呼びしてゐる。暖かなれといのつた甲斐もなく、此意外の景色にはがっかりしてしまつた。

星ヶ岡へ行くと不相變權高い女中が出迎へて二階に通る。この前来た時はかなりおあいそがい、様に覺へたが、又今日はひどくぶつてうだ。いかにも此家の主人らしいしつけかただ。金をとつて商賣をする以上客なのだからも

う少しどうか物やはらかに扱へんものか。婦人客には殊に不あいそな女中かたぎはいやだ。

しかし料理は何といつても一流だ。色彩の工合からとり合せのうまさ何れも流石だと思はせる。今日の集りは又大成効で、後藤伯も、西野さんも、はめを外して滑稽百出、ほんとうに腹の皮をよつて皆泣笑ひの態だつた。隔意ない快さは全く近頃になかつた。量も中々多く、おしまひのおまんぢうには一寸手が出なかつた。

二月七日 快晴

國男から無線が来た。「ウミシズカユカイミナサンイカガ、クニ」としてあつた。これには早速返事を出したいと事務所へたのんだ。

宮島博士——幹之助——夫人が來訪されてからまだあいさつが出来なかつた。今日こそ——かう思ひ立つて出かける。雪どけの道は馬鹿にわるい。折々頭が天井に打付かりさうに成る——さうだつて——日本は道がわるいのだつて——出かけなければよかつた。右の脇腹をおさへながら私はかう思つた。何しろ肝臓の腫張であんなひどい痛みが來ると西野博士はいはれた。それをうっかりこんな道をかけさせて、若し又いたんだらどうしやう——日本の田舎道がこんなまじでわるいといふ事は今やつと思ひ出したのだ——よく洋行した人が歸朝して、やあ日本の道がどうの、やれ日本食がどうの——といふその度に私は憤慨してゐた。何といふ生意氣な——西洋かぶれがして——かう思つた自分を、今裏切つたこの道路の泥濘さ——成ほど人の事はいへない、われながら習慣の力のいかに偉大だかといふ事をしみく、體驗しながら、今更行くも歸るも出来ない泥濘の路に心は右往左往してゐた。しかし車はとうとうとある門前に止つた。見ると大きな石の門柱があつて、こゝでございませう——かういひつゝ江井は兼て用

意の新聞紙を地上に敷いた。こゝは水たまりでございますから——ほつとした私は裾を高くたくり上げてガサ／＼紙上を踏んだ。格子戸を開けて案内を乞ふと、すぐ女中につゞいて夫人が出て請ひ入れられた。關西人らしいやさしい物ごしと如才ない詞はかなり私にいゝ感じを與へた。

狭い階段を上つて二階が客間と見へる。危い足どりでやつと私は上り切つた。ごく中流向な床の間にもさして裝飾もない——改めて私は夫人にあいさつをしつゝ、博士が今度の歐洲旅行に私と共にあつたさま／＼の情景を思ひ出した。巴里、ロンドン——ゼネーブ——豪華な晚餐、腰を埋めたアバートの博士の居室——何も知らぬげの夫人と相語りつゝ私の心は歐洲の一角を對比せざるにたななかつた。留學——外國生活——故郷——家庭——近代人の生活——千熊萬狀の生活の断面に、而して私の心ははちきれさうだ——

### 二月九日 暴風雨

昨夜の暴風雨が益々ふきつづいて近來にない嵐となつた。それでも午前中は少しよかつたが、午後になつて益々暴威を逞くする。沖を通る漁船はみな影をひそめて、波頭ばかりが白く黒い海面にきわだつて見へる。

今日は壽江子が來るといつてゐた。この嵐に何の待ち受けをしないのもあまり無慈悲な氣持ちがする——電話をかけて幾時頃に来るか、富士やの自働車にのつて來るやうにいつてやる。

午後の二時か三時頃、小田原の西村隆一さんと一しよに見へた。この人は大變以前より瘦せて見える——蒲鉾と越後の梨子五個を持つて來てくれた。

壽江子が來る時別府からのかきつけがあつた。それは黒金氏の事と、弘道會の主事から「重大用件に付御相談し

たいが、御留守ゆへ御歸りの上にする」といふ事だつた。

止むだらうとたかをくゝつてゐたあらしが夜に入つて益々ひどい。便所などはしめ切つてあるのに、何處からかさか舞ひこんで面にあたる。こんな事は始めてさびしい事だ。

昨夜から神戸へ行き、次手にキリンビールへ廻つて行かうといつてゐるあるしも、あまりのあらしでやめにする事にした。

### 二月十日 暴風

朝八時すぎあるじは壽江子と一しよに出かけた。自働車を命じて——不相變そゝつかしい彼女は又手袋を忘れた關君が停車場までおつかけて、それでもとう／＼おひついたさうだ。

かうして二人は國男夫婦を迎ひのため、神戸へ向けて出立した。

### 二月十二日 快晴 寒

昨夜は、いよ／＼幾時につくといふ電報があるだらうと、關君と共に待心にかなりおそくまでおきてゐた。けれどもどうしてもその便りもなく、十二時に近くなつたので心を残しながらねてしまつた。

今朝は早くつくだらうと思ふので六時頃にはもう起きてしまつた。物音に關さんもおきてすぐ出かけた。しかしまだ着かれないと、一時は歸つたが又次の汽車にちがひないと、食事後又出かけた。私もその間に髪をゆひ、頭をあらひ、きものまで着かへて出むかへの用意をすませ、何處やらおちつき得ない氣持ちを感じながら、此家からよ

く見通される街路を見下ろしてゐた。何か歓迎の意を表し得る工夫はないか、昨日關君と相談して、仕方がないから國旗を出しておかう、幸ひ前日が紀元節だ「あの家では旗を入れるのを忘れたと見へる——」かう見る人は思ふだらう。さうすれば大けさにもなるまい——かう相談して、此田舎のわれらの軒先にはまた前日の通りに旗がひくゝかゝげられたのだ。

はるかにあるじの大きな聲が聞える様だと思ふと、果してその通りだった。眞先に壽江子、つゞいて咲枝、國男があらはれた。國男はしやれた冬服、咲枝は黒いづくめの服装で、やはり黒いバックを二つさげてゐた。

かわゆい子には旅をさせろといふ通り、二人とも中々物やさしく、うれしげな風だった。咲枝も見たところごく質素な黒づくめの洋装に、派手やかな風も見せず、手提も持つてゐる二つともごく質素な黒いのであつた。髪もろびかけて末端がボザ／＼になつたのを國男の方がしきりに氣にしてゐた。ネツクレースも見へずあまり氣にしない様子は私をほつとさせた。椅子に皆が腰をおろすのを待ちかねたやうに「あの處ではどうの、あそこではかうの」と、聞いたり話したりしてもすぐ納得のゆく度に、かなり難儀をしても一しよに行つた甲斐があつたと思つて嬉しかつた。

ぶりのさしみや、青々した野菜のひたしものに舌づゝみを打ちながら、めづらしく賑やかな晝飯をすませた。

四方八方のはなしに興じながら、とう／＼皆に引きづられて私も一しよに歸る事にした。度々の國府津行ではあやも手傳ひの女もかなり勝手元の用事に馴れた。あまりあはてずにあと片付けを終つて、二臺のタクシーにのつて驛頭にいらした。あまり車はこんでゐないので大勢づれもらくだった。

東京驛には大瀧一家、倉知さん、石井、横田の諸氏が出むかへてゐた。歸宅するとそれでもお赤飯や尾頭付の魚

が用意されてゐた。

今夜は一時近くまではなした。

### 二月十三日 晴 稍暖

西村隆一氏から不相變豆のやうにかいて細やかなはがきが來た。此人も亦西村流にあつてみるより手紙の方がすつとこまやかで意をつくしてあつた。

河合春江さん母子がおもひがけす來た。赤ちやんは急にももの／＼しくかはゆげが見へた。いかにも愛らしさうにあつかふこの若い母親の心持にも涙を誘はれる。あゝ皆母となればこんな玉の様に大切に愛々しく育てる——自分の苦しみも辛さをも忘れて——それがかく別離の悲しみにあはふとは——いくら思ひ定めても私の心は又かき亂される——

つゞいて倉知の主人が皆をつれて來る。しかし一馬さんだけは風を引いたといつて見へなかつた。

### 二月十八日 晴 稍暖

今夜は二人が三田へ行くので、皆して後から夕飯にゆく約束をした。咲枝は壽江子と三越へゆくといつて先へ出てしまつた。それからあとでいろ／＼みやげものゝ用意をし、子供めい／＼にもいろ／＼のみやげをもつて行つた夕飯は例の鰻と一寸したものにぎやかだった。食前に皆に洋行みやげをわけた。中々金のかゝつたものばかりなので何れも大満足。おとうさんには眞鍮のアルコールランプで冷めない鍋テーブルセンター、俊ちやんにはケン

トン夏服、一馬煙草箱澤山と煙草をまく機械、ろく郎には顕微鏡、象の——木彫のおきもの、ビンロージの——萬年筆——たゞしさんの帽子はいかにもしやれものらしくていやだった。みわさんには麻のテーブルカサビエット

二月十九日 曇 暖

新聞に白蓮夫人が夫君の選挙のため和歌を短冊にかいて賣るため街頭に立つてゐるといふのを聞いて、今夜はこの寒いのに——と同情にたへず、別府をやつてその短冊を買はせる事にした。いつもの健康なら自身で行つて買ふのに——と残念にも思はれた。しかし無滞二枚だけ買つて来た。

黒いハンドバッグが國男の荷物の中から出た。大變おもしろくきれいなので私はほしいと思つた。その事を國男にいふと快く承諾した。

今夜も又下痢が始まつた。どうもいろ／＼心の刺戟が多いとこれがはじまる。止めると肝臓にもわるいと思ふので、無理にとめるわけにもゆかない。困つたものだと思ふ。

二月廿日 快晴 温暖

今朝は誠に快い天氣だ。いかにも春らしいほがらかな空に風の音もしない。

今日はいよ／＼投票日だ。昨夜まで何のはなしもなかつたあるじが、急に思ひ立て投票したらしい。あとで聞くと何でも今朝の新聞に、母が病中で子供の當選を案じて云々の記事に同情したとあつて、あの下谷か、市議で醜聲の高い××氏に投票したといふのを聞いた。私は腹が立つてにへくりかへりさうに成つた。あんな奴、あゝいやだ

海軍協會から新造鑑進水式に参列の報があつた。

二月廿一日 晴 暖

戸田利兵衛氏が見えた久しぶりにあつた様な気がしている／＼彼の地の事などはなす。しかしよく考へて見ると既にあつたやうな氣もする。何しろ近來非常に健忘症になつた私は、又以前の話をくりかへしたかもしれない——氣が付いた時にはもう歸つてからよつほどあとの事であつた。

今日は國男、咲枝、壽江子も一しよに方々へあいさつに廻らせる。

江木欣々女史の計を聞く。自決せし彼女の心中感慨無量だ。

戸田氏がかなり長く二時間もゐたかと思ふと、すれちがひに割田氏が来た。持田氏が大學病院に赤痢で入つてゐる事を聞いた。

三月一日 晴 稍暖

明日は××氏御夫婦が見へるといふ事なのでその積りであると、急に今日上るといふ電話だつた。私は今日の英男の御命日が何より大切に思へて、いろ／＼とその準備をしてゐる處へ此電話でうんざりしてしまふ。けれどもしかたがない。初めての來客なのでそちこちの仕度を始める。

兼て大變かつぎやだと聞いてゐるので、お菓子も長生殿を用意したり、いろ／＼心づかひをする。午後三時過來られたが、やはり實業界で成功する人はちがふ——かのお目出度の時あまりなまでいんぎんに見へた此主人は、今

日は應接間であらうはなしをしてから表二階へ案内したが、入るとすぐ正面きつた上座にむんずとおしなほつて更に會釋する客子もない。あんなにうつむきかげんに見へた夫人も、どうして中々一人でしゃべりまくる。——といふ風で、成程これなくてはこの社會で成功し難いのだらうとしみじみ考へられる。

### 三月三日 雨 稍暖

今日は夕方からどういふかげんかひどい悲觀狀態に陥つた。こんな事は今まで覺へないほどだ。一步を誤れば、——とまでつきつめた氣がした。どうにもかうにもならない——やる方ない悲しさだ——訴ふる處もなく語る人もないこの淋しさわびしさ——あゝ英男もこんなにして、私の安積へ行つたあとは——しかし彼は遂に總てを飛びこえて靈の世界に飛躍した。今私にもし何事かあつたなら、この衆俗の世界に誰かその眞の心をしり得やう——ふるひ立て——辛ふじて私は神前に己れをとり返し得た。

### 二月四日 雨 暖

地震がこの二三日折々ゆれる。昨夜も二回ばかりあつたが、しかし中央氣象臺の報する處ではもつと頻繁にあるらしい。特に伊豆方面がひどいさうだ。この時ならない溫氣や何かこゝから來るものではないか。とにかく此大なる手のはたらきをどうしやうにもしかたがない——

今夜あるじは大理石を見るため、岐阜の矢橋大理石店の山へ行くのださうだ。生憎雨はふつてゐるが大變暖かいのが何よりだ。しかしかうやつて夜汽車で出張しやうとするあるじの勞力を思ふと、もう物慾などはよそに、暇の

ある生活に入らせたいとおもふ。

### 三月五日 雨 寒

どうも此頃の天氣はひどく不調だ。暖かくなつていゝあんなばいで——と喜ぶ間もなく又この通りだ。四五日前の溫氣にすっかりひよりのゆるんだからだは又此寒い風にゾツとする様だ——このひよりのゆるむといふ詞はどういふ字に該當するのであらうか。自分にもよくわからない。たゞ私の實母がかういひならはしてゐたのが、今日ふつと出たのだ。テツペロリン、とか、ゾータイとか——文字にあてはまらない俗語が、江戸ツ子獨得の口調ではき出される——自分でも氣がつくとおかしい位だ。

三越へ行く——かうやつて三人づれで此店へ來たのは洋行前——一寸の間に半年はたつたのだ。めづらしく店はこのしけぶりですいてゐた。しかし緊縮も何處へやら——不相變いろくの催しものはにぎやかに復興祭をあてこみいらし。

逸品會が中々いゝものを見せてゐる。

「もう二十年も若返らなければ——」

案内に立つた岩堀を顧みてかういつた。半襟を一つだけ買つて、あとは例の通りコマ／＼しいものを買ひ、壽江子は咲枝にもらつた玉でブローチを二つ作る事を頼んだ。

「プラチナで——」などゝお生ちゃんをいふ。

「それでは玉がまける——」と私は拒んだ。そしてとう／＼銀にした。

店の中で三橋さんにあひ、此人の口から水野夫人の風で臥床中の事を聞いた。西野さわ子夫人、根岸の春江さんとお姑さんにあつた。たまさへ丈の高いのに足駄をはいた此人の姿は大きく見へた。歸ると電報があるじから來てゐて、八時につくから迎へを頼むといふのだつた。すぐ江井に電報を渡し、むかへにさしむけた。

大瀧さんから六人の靈位——鷹子ちゃん、きく子夫人、松琴女史、潤身、眸さん、赤ちゃんのそれ〴〵供養を營む案内状、且夕飯を借樂園であげるといふ事だつた。しかし私は行かれるかどうか、此頃の健康ではと氣遣はれた夏目漱石のロンドン塔を買つて見る。私の感じたロンドン塔——夏目氏のはどうか——かう思つて買つてみた。私の感じたそれに比して著しい相違を夏目氏のそれに見る。

### 三月六日 曇 小雨

咲枝と壽江子は春江さんから子供の誕生日に請ぜられたとの事、何か心ばかりの祝品でも——と三越へ行く。ぬひぐるみの動物のおもちやがよからうと私がいつたのでその計畫で行つた。

夕方から杉山さんが同伴で見へた。何だか黒ずんだなりのふけたお嫁さんだつた。食堂でいろ〴〵取よせた夕飯の饗應をした。細君はひどくはにかんで何も食べない。

夜の十一時頃であつた。難波さんから電話で、三越が今焼けてゐます、といふ事であつた。驚いたあるじはすぐ出動の準備をし、別府に自轉車をとばして江井を呼ばせた。その間にもあるじは非常に氣をもんだ。私になるべく心を静めやうと、往年われ〴〵が安積で受けたかの震災當時の事をはなした。あの可驚報を得た時、常から神経質

の自分をよくしつてゐた私は、先づ精神をおちつけやうと皆を勝手に待たせて、上段の障子を明け放した。十里に近い遠望の大なる自然の前に私は靜かに相對した。瞑目する事暫時、私の心には一道の明らかなる光りを見た。そして、我ながらよくかくまで氣がついたと思はれるまで、總ての處置をなし得た。

その持たせた品々の中特に蠟燭とマツチ、向島母上のカンフルチンキまで——非常の時には非常の才の廻るもの——かういふ事をはなし〴〵してゐる中あるじも追々心が靜まつたやうだ。

十二時一寸前關を伴つて出かけた。行きちがひに又電話で鎮火した電話があり、少し安心したがやはり現場へ行つた。十二時過る事三十分許りで關から電話で、火災は四階の足場——床の一小部分をやいたのみで夜警が見出したのだ。そして恐らく漏電だらうといふ事だといふので、建築上の失態のない事をきゝ大安心した。しかしこれはいゝいませめとして、是からは一層總ての注意を怠らないやうにしないでは——と思つた。

この夜寒に出かけたあるじの心勞を思つて私も、歸るまで起きてゐるやうと努力したが、例のふるへが來さうになつた。しかたがなくいろ〴〵のものをとゝのへて床に入つた。

### 三月十一日 晴 風寒

あるじも今日はめづらしく早起きして熨あとを見聞にゆく。

今日の新聞で鎮海灣に於ける同胞、殊に幼ない子供たちの百をこへた大人數が、活動映寫中フィルムから發火して、いたましくもその犠牲になつた事が報導されてゐた。何といふ事だらう——まだ詳報はわからないが——

根本さんがお風呂に入りたいといつて夜見へた。英男がゐたなら、と是も亦思ひ出の種だ——涙をのみながら私

は石けんやタオル、手拭は新しいのと、いろ／＼心を遣ふ。

### 三月十六日 晴後雷雨

早朝から變な空もやうだと思つてゐたが、とう／＼遠雷の音をきくやうに成つた。何しろ變な陽氣だ。炬燵部屋に電鈴がなく不便なので、今日の日曜で書生の手があるのを幸ひ電鈴をつけさせる。此間から氣になつてゐた永島さんのおとうさんへ手紙をかく。

咲枝、富永さんの結婚式に行く。

けふは日本ではかなり目立つやうな赤いマントを羽おつたイブニングドレスを着た。あとで聞くと此日の花嫁さんは非常に美人なさうだそれでは若い女心に、あんなものも着たかつたのだなとうなづけた。

### 三月十八日 晴 暖

久しぶりに坪内さんを訪問しやうと丁度「今日は上京するから午後には在宅」とのはがきがあつたので出かけ博士の邸は此前上つた時は柿色と黒のんだらにぬられた板塀が街路の中にひどく目立ち、又それが芝居のかきわりに見る色彩を思はせたのだ。

この目標を見馴れた私は、今日見るとすつかり滌色の一色にぬりかへられて顔ちがひのした感じがした。玄關のくつぬぎには男下駄が二足ばかり揃へられて、來客のある事がうなづけた。すぐ女中が二階の客間へ案内する。まだ春浅いのでかなり寒い風の通る窓の障子はカラリ放たれてゐた。

「寒い——」思はず口の中につぶやきながら私は女中が下へおりの間大いそぎでその障子をしめた。

例の通り達者らしいトン／＼といふ足音を立て、上つて來られた博士は、洋行前よりいくらか小さくやゝふけて見へた。

はなしにつれて博士は赤化の思想について、只無智に抗激せず「天皇とプロレタリア」といふ本をよんだり、一方田中智學氏に話しを聞くやう、同氏の偉大なる人格者らしい事まで賞揚された。

### 三月二十一日 晴 温暖

目のさめたのが午前七時半。からりと晴れた空は微風もなく、此の風ぎの間にとり出す船の数が海面に列をなしてゐる。

今日見ると隣りの佐藤さんの地境の樹々が中々丈が高く、二子山の眺めはとだへがらに見へる。

今日はあまりいゝ日和なので地下室の池の前に椅子を持ち出して、はれやかな日光の直射の裡に體をさらした。手も足も芯からあつたまつて懐爐以上だ。そして數十分の間からだが軽くなつた様な氣がする。

地震が又頻發しました。特に伊豆方面からこの國府津あたりに多い。今村氏は大震の餘波だといひ、他の學者は別の地震によるといひ、今日あたりはかなり相争つてゐるらしい。軍縮問題いよ／＼難局に直面したらしい。英佛の國交六ヶしく、既に大使は引上げたとの事だ。新聞紙の報ずる處によると、英國の態度に非難する處があるらしい。——われ／＼局外者には何が何だか分らない。

失業者數萬、それによつておこる悲劇頻々しかも復興の祭典の爲人は熱狂し、市も亦その爲に金をおしまない様



だ。矛盾の裡に生きんとする民衆は災なる哉の觀がある——

三月廿四日 晴 暖

此間中から、もう日記はやめてもつと特殊のもの——英男の傳記——でもかきたいと不細思ひながら習慣の力は大きい——夜になるとどうしても又日記が齒ぬけに成るのがおしい氣がして、又してもこれをかく氣になる。要するに安易にかき得る事が今の私にとつて書かないよりは——といふ氣持ちに引づられてゐるらしい。とにかく曲亭馬琴などの日記を見ると、實に稠密にかゝれてゐる。そしてそれはほんの大創作のみま／＼の仕事であつても、中々我々の及ばない精密さなのだ。晩年に眼を病んで、八大傳の終りに近くなつてからは、嫁の手でかゝれたこの事だ。今時とちがひ、あの時分の女性——日に一丁字のないのが普通であつた時代に、創作を口うつしでかゝせる。——連も尋常人の企及し能はない事だ。その上に日記まで——私はこゝにどうしても天才の頭腦のいかに超凡的であるかを羨ますにあられない。晩年の彼がいかに氣六づケしく、いかに神経過敏だつたか——むりもない事だ——私は二子の眺望をさへぎつた隣家の高い木について考へた。そして中村が丁度来たので、その事を老人の口からうまくはなして下さい、何しろ奥さんの爲にいゝ地所を世話する——かういつて買させたこの土地が、ひどい地價を低下させる事はよくないと私は思ふ。あなたから御話して下さい——かういつて中村氏が歸つたが、間もなく丁度居合せた植木屋に命じて、とう／＼最も邪魔になる木を引きつてしまつたとの事で見下さいとの事——成程大變さつぱりとした。庭から二子は又私の目の中に其姿をあらはしたのだつた。今朝あるじはいつもの汽車で歸京した。

いつもの魚屋に昨日命じた干物をもつて来る——こんな海邊の魚や——新らしいのが此土地の誇りでもあるのに——何といふ、きをひ肌のない田舎ツ平だらう——人を馬鹿にしてゐる——朝あげた魚を聞いてしほにしたのに、たべて見るとしほからくおまけにすつかり色がからびてゐる——こんなものを新しいといつてよこす——いくら商賣でもあんまりだ——歸る前にうんといつてやらうと思つて待つてゐてもとう／＼來なかつた。

三月二十七日 曇 暖

兼てから心がりのひろ子さんの兩親を訪問すべく電話をかけて都合をきく。明日か明後日でも行かうと思つてゐると、偶然向ふからかつ／＼つて來た。そして今日なら——といふ様な語調なので又外しては——と思つて、氣分のわるいのを冒險的に斷行する。

XXさんでは中々款待してくれた。いかにも如才ない——お母さんがすぐ玄關に現れて、おあいそといふ事／＼新夫婦の方は洋式で別間らしく、私の通つたのはこれも新築の二階建の方——器具什器中々整つて、いかにも三井式實業家の型を遺憾なくあらはしてゐた。二間つゞきの客室には金屏風、置もの等飯田町よりは、はるか贅をつくして見へる、お茶よ菓子よとおもてなしの中へ出て來たヒ子ちゃん、兼てあるじから聞いてゐた通り、おつくりもこつてりときれいに今日はハイカラのウェーヴした髪が似合つてゐる。飯田町にゐた頃とちがひひどく小笠原流な物腰で、かねてこゝの姑がすきだと聞いてゐたしほりの大もやう——紫地の縮緬か何かの羽織に、是も大きい／＼かすりのきもの——昔なら何といふだらう——今の年になつてさへまだじみな位なみなりで花嫁時代を過した自分の事が、いろ／＼心に浮んだ。黒地のメリンスに處々桃色の菊の花のついた片側帯——それさへ派手だとなが

められた事がふと私の胸に浮んだ。

「大層おぐしがきれいに出来ました事」

「え、今日私が結びにやりました、私はするぶん姑で苦勞をしつくしたので、今度は嫁を大事にする事を自慢にして——」

とかいひくこの花嫁姿をあからめせず穴のあくほど見守つてゐる——可愛い息子のお嫁さん——素直で役に立つ——それはかはゆくて見とれてゐるのなら、この姑の心にかわゆさをさへ認める。しかし己れのもてあそびもの、やうに、ほんの文字通り頭のとつべんから爪先まで、何もかも己れの心の通り飾り立て、ゆひたて、眺める、——私には辛抱出来まい——

茶菓のもてなしのあと更に「おすきだと聞きましたので——」とおすしの御馳走があつた。これは飯田町のおかあさんが、あなたのお出での一寸前來られてのおみやげ——おすきだと聞いて——とすゝめられる。成程それで今日来てくれる様に電話があつたのか——と考へるのは思ひすこしだらうか。

「今度は朝早くから夜までゆつくり——」と上機嫌で自働車で送りかへされた。

### 三月二十九日 曇 暖

昨日はどうかしてむやみに話をきたく思つた。そしてふと、かの根本さんのかなり信仰してゐる〇〇〇〇氏にあはふかと思ひ立つた。そしてまづ電話で面會日の都合を聞いた。初め小南に頼んだがあまりはつきりしないし、それに意外な事は「代々木さんの御親戚の中條さんですか」といふ詞を冒頭に、しきりにいろくいな事を問ひたす。

す。しまひにはどんな御用で——とまでいふ。たまらなくなつた私はとうく小南の手から受話機を取つた。そしてこのくどいまで問ひたす。人に、私は代つて答へた。間もなく變つた聲で出て、

「私は〇〇です」との事だ。

「それは恐れ入りました。御取次で結構でございましたのに——」

「あなたは何かおつしやる？」

「私の名で御座いますか、私は中條よし江と申します」

「いや御主人の御名で——」俗僧らしい聲がかういふ。

「あゝもういやだ——」かう考へながら尙私は引ずられる様にあるじの名を答へた。更にどういふ御用で——と、くどく問ひたす——かういふ時なぜ「もうそんなに御面倒ならよろしうございます」とはつきりいひ得なかつたらうか。愚直な私は又つひ自分の大なる悲しみの一端を洩して、そして自分はその事も御話しをしたり伺ひもしたりしたいと思つて——

「はあ、それは御愁傷な事で、はあ」と、聲調から押して見てもいかにもその俗悪な坊主姿が目に見ゆる様な、悪感が背筋を走る様だつた——そして、これからすぐ御こしなさいませ、私の家は——といふのかぶせて、「番地をうかゞつて居りますから大抵は見當がつくと存じます」といつても聞かずに「あのそれ森川町のな——」を行つて、鐵筋コンクリートの三階がござります、そこがそれ私の宅でな、説法も日曜日毎にやりおります」

「私また一向不信心で御説教は伺つても急にのみこめないと存じます、もし今日おさしつかへがないなら勝手にござりますが伺はせていただき度う存じます——」又かういつてしまつた。しかし私の心はかう考へた。——今すぐ

それは私には間にあはない、少くも一時間位用意が入る——實は只今客が参つてかうやつて御はなし中——一時間かそこいらかゝりませうから、その後で願ひませうか、

「はあ成ほどな——それでは一二時間あとにな——コートと、それでは又此次あなたから御つがふのえい時お電話願ひまするな——」瞬間私は救はれた様な気がした。矛盾——私は自己を省みてかういはずには居られない。そしてこの矛盾がある者に於ては現世に尙生き得る可能性の一つでなければならぬやうな気がして、私は更に高く天空を仰いで感慨にたへない気がした。あゝ——

#### 四月十一日 晴 暑し

今日からいよ／＼壽江子の學校がはじまる日だ。前日まで誰か外の人にしようといつてゐたが、どうしても不安心なのでとう／＼私がゆく事になつたのだ。躬行實踐——これより外導くべき最善はないのだから——かう思つて早くふんばつて起き出した。——まだ午前五時、ほの白い光りが上の窓から洩れて来る。めづらしくおだやかに晴れさうな朝だつた。壽江子もめづらしく一人でおきる。いろ／＼仕度をして六時半頃ベルをならして女中をおこす——こんな風でゆつくり用意も出来、あるじもそれなら一しよに——と大あはてと同車する。九段に向ふ街路はかなり快い。

「石井先生はまだお見へになりません」といふ。

以前お目にかゝつた○○○○さん！あの人の後影が見へる。近づいて北間の御禮や、又おせわになる事などをのべる——湯淺さんタイプの此人は、以前とちがひ甚だよそ／＼しい。——細かく考へ通す自己を省みて、私はもう

多くを此人に望むまいと思つた。

與謝野さんの顔も見へる。今日は紫色の御紋付。私が最初この人の著作を——論文めいた——よんだ時、窮乏の爲目をわづらひ更に病弱な苦惱を歎くその文字は、いかに私を興奮させ又同情のたへがたいものがあつたらう。「どうかしてお金でも何でも私の分に應ずるだけのものを上げたい」

その頃の私はまだ幼い多くの兒女を擁して蓄へも乏しかつたのだつた。けれども私は灼く様な同情にあつい涙さへ流した。そしてどうかして快くお金でも何でも受けて下さる様な方法や、辭令をさへ考へた。牛乳の一ヶ月分、牛肉の——お米の——かうまでいひつゞけてあるじを呆れさせた。そして結局何も上げる事の出来なかつた私は、今この富裕らしく、アリストクラチックにもてあつかつてゐる彼女の姿に驚異の眼をみはらざるを得なかつた。やつぱり餘裕さへあれば平凡のつかひかたをするものだ——かういふ感じがしてならなかつた。そして不相變上方風のコツテリした色彩と、鼻の上をひどくしかめて笑ひ／＼する女史の齒並みのわるいのも氣になつた。しかし何といつても天才的な人にはちがひないが、私は彼女の鬼才に近いものに敬意を感じると共に、まのあたり見る此人のゴテ／＼した容姿にがっかりする——

#### 四月十二日 雨 稍寒

今日は午後一時半から會祖祭が執行される日なのだ。しかしどうしても今日は生憎例月のなやみで羽織なしの紋服はなやまされさうだ。いかにも残念だがあるじだけ参列を頼む。

あとで聞くとお供へのお菓子も美事で、且けふはめづらしく松平伯も見へられたさうだ。あんなにいひ暮してゐる

る百合子からのがきがもうとくに壽江子の處へ来てゐたのだつた。それをしらすに、又しらすにおく事は何といふ無情な事だらう。私はこのかたい性情を考へつゝ、遺傳の力のいかに大なるかを考へずにはゐられない。

今日はめづらしく大瀧かちやんにあひたいと、壽江子が電話をかけた。するとしげ子さんもぜひ来たいといつて一しよに來だ。以前よりはおだやかに見へて來たこの子は、かうやつていろ／＼そばで見ると、やはりするどい處が見へる——今日は國男さんがゐるので子供たち大よろこび、大さわぎで、夜おそくハイヤーで送つた。

#### 四月十七日 晴 稍寒

今日はやつとさつぱりして入浴する。案外気分がいい。従つて夕飯も大變うまかつたが、しかし此頃のたべものはいやにお上品ぶつた味で誠に困る。私はやつぱり江戸ツ子式にピリツとした味がほしいのだ。何だか薄ぼんやりしたものばかりでは味覺が満たされない。

いろ／＼と此頃は自分のからだを觀察して見ると、今度の様に貧血して體温が急に五度臺に低下する——總ての機能が鈍くなつて、下痢、食慾不振等をおこすらしい。何かこれに、對抗する醫藥の力はないものか——かう書きながら私は信仰の力——是が絶對のものである事を信じたい。今度の糖尿の全癒など全くそれを裏書きする第一の現象ではあるまいか——

#### 四月二十日 晴後雨

電車總罷業の爲自動車が無據す江子のおくりむかへをする事にした。困つたものだ。

大瀧夫妻が見へた。あとで咲枝が

「おかあ様、お氣がつきませんでしたか、奥さんはお目出度らしい御座いましたわ」

羽織をきて坐つてばかりゐた彼女の姿態は近眼の私には何も注意を喚起しなかつたのだつた——

四谷の佐藤院長夫人が見へた。いつもながら極平民的にとりつくるはなげな様子には此人のもつ美點の一つともいへやう。ちまきを大籠に一ぱい到來した。

#### 四月二十一日 晴 稍冷

今日はめづらしく夜歌舞伎座にある大阪城を見たいと、す江子と共に行く。彼地に於けるオペラを知つてゐるす江子は、兼て少しもあつかひ氣味の紅いドレスを今日こそと思つて着て出たが、やはり行つて見ると黒色や灰色の中にあまり目立つといふので、外套を着たまゝぬがない。

今日は坪内博士後援會の名の下に集まつた人々が多いためか、いかにも芝居ものらしい人たちが多く、子供たちなどは足袋なしの素足のまゝ右往左往にはせちがつては鬼ごつこなどしてゐる。前だれがけのもの、黒襟をかけた婦人などが殊に多く、中流以上の人らしいのは丸で見へない。いつもこのかぶきには花柳界のものが多く——これもあんまり私は好かないが、もう少し何とかありたい氣がする——

大阪落城の光景はいつ見ても悲劇中の悲劇——無慘の極だ——かうして大なる悪ゆへの波紋を考へて見ると、善必ずしも榮へ、惡必ずしも亡滅するものか。徳川氏は新田氏のあととなるがために盛んなりとすれば、楠家のあとのあまり淋しく此豊臣の後裔今何處？ 秀吉の千の利久に對する横暴殘虐は遂にその後を絶滅せしむる因をなしたし

たるか——片桐の孤忠——果して眞個の忠なりしものか。豊臣氏絶滅の悲運を大阪城に見て悶絶せんとせし大忠臣よく笹山に其生涯を完ふせし事これ疑問——或は大奸忠に倒れしにあらざるか——

四月廿三日 晴 稍冷

今日かねて三越へ頼んでおいた仕立直しの毛皮裏のコートを、自身行つて寸法を見せたいと思つてゐた處へ開成山に居住する人で、國男の現場監督主任をしてゐるといふ——人がたづねて來た。不相變取次の小南がうつかり居るといつてしまつたのだ。そこで斷るのもあんまりだと思つて奮發してあふ——一寸不快だから長くは——と斷つて。すると先生中々一寸歸らない。とう／＼それが保険の勸誘員だといふ事をして、私はいづれ又お目にかゝるからと立つてしまつた。

四月廿五日 曇 暴風

昨夜あるじは入浴後西洋間にうたゝねした。心配して子供らもゆき私も注意したが、ひどく不機嫌で腹を立てた生憎私もはげしい睡魔に襲はれて、まだ宵の口だのに目が明かない。かういふ時はやはり眠る方がいゝ。折角この奇蹟になほつたからだを又こわしてはと、二階へ上つてねてしまつた。すると明方からあるじが咳嗽の聲とクンヤミの頻發するので目が覺めた。やつぱり昨夜うたゝねの爲だつたなと思つたが、あんまりひどくならない中にと合掌祈願する——しかもあるじには感激の大なるものが來ないように見へた。私はその熱意の足りないのが不満だつた。一寸した事に感動して涙を流すくせに——

四月二十八日 晴 後雨

昨日は丁度午後三時といふ汽車にのつた。案外すいてゐてらくだつた。下りるとすぐ夕食の間があるのでいつもの茶亭でお茶をのみトーストを命じた。いゝあんばいに雨もやんでこの前來た時の櫻の花も、桃の花或ははほらし梨の花も残りなく散りはてゝ、一眸たゞ緑の中を歩いて家へつく。入口の蔦の葉が一寸の間に美事に葉をしげらせて幽邃な家居の様子は匆忙とした都會生活者の心を先づ慰はせる。

四月廿九日 曇 稍冷

昨日は佐藤さんが家を案内するといふので午後からその心構へをする。果して三時頃おむかへに見へた。ふだん着のまゝ私は伴つて例の足場のわるい山道に行く。手をひくためにとしづをつれて行く。

流石に樹木の好きだけに、私のすきな色々な花が以前見た時より咲きみちてゐる。

心臓がわるいのです——とかういひながらこんな山道を上下する佐藤さんの氣持ちがわからない。しかし上りきつて見ると我家とは又趣がちがつて、成ほど「こゝで終るんだ」といつたこゝの主人公の心もわかる位、誠に眺望はいゝ。周囲を眼下に見下した暴君ぶりを憤慨した私も、この病弱な人の覺悟をきいては、一味の寂寥さと同情を禁じ得ない。

「あなたの家で一番傑作なのは荒神様かと思つたら、あなたの寫眞が高いところに飾られてある事です」と私がいつた通り、臺所の高い所に小さい神棚があり、その中に此家のあるじ自身の寫眞がはいつてゐた事だ。「おもしろい」と私は思つた。しかし妙に變つた事を求めて中途はんばな二階の手すり、コルクの床などは座るには不適當だ

とおもつた。どうしても私の一番いゝと思つたのは、花が四季絶へぬ様植へられてある事と眺望のいゝ事——

五月一日 曇 寒

割田峯二氏にて、今度自分が雑誌「弘道」へ出す紀行文の題名を早く知りたといつて來たので、「旅日記の中より」としてもらふ事にした。何しろ大した筆でもないのに、あまり大きな題名は却つていやだとおもつたので——

五月二日 冷 雨

昨日の割田氏の電話で、今朝八時に印刷所の職工を原稿とりに來させるといつたので、朝早く起きて不十分だと思はれる原稿の整理をする。いつまでたつても不十分なところがあとから出て來て我ながら呆れてしまふ。やうやく一わたりすんだかすまない中、もう使の人が來た。仕方がないから不十分なまゝ渡して心付けをやつた。何しろ約束の時より早かつたので待たせても仕方がない點もあつた。

午後二時頃約をたがへずとう／＼校正刷が出來た。何といふ迅速なのだらう。あるじさへ本氣にしない位、全く割田氏の好意的な骨折りにもよる事と感謝にたへない。すぐ自分でと思つたが、情けない事にこの印刷の文字があまり細かでどうしやうもない。——幸ひ咬枝がゐるので手傳つてもらひ、私が原文をよみ、赤インクで校正してもらつた。何しろ始めての事なのでおしへるのにかなり骨が折れる。

五月九日 曇 夜大雨

夜になつてスエ子と粘土をいちつて見る。あるじが少しはわかるかと思つてゐたが、聞いて見ると全く習はないといふのだ。それぢやしかたがない——こんなには自分は一生懸命になつてゐるのに、何といふはりあひのない事だらう。國男に聞くと、同窓生でかなりもう出來上つて展覽會へ立派に入選した人か近所にあるといふ。——此年になつて——このからだで——と思ふが、かういふ躊躇するといふ事が禁物だ。私の力の足りないところは二人が、りで——と、堅い信念のもとに發意したのではないか——金石をも逆す精神力——と相まつて——

五月十日 曇 あつし

倉知のたゞしさんが泊つた。この人はとにかく一番苦しんでゐるだけしつかりもしてゐるし、常識もある。今夜ははなれへ泊る事になつたらしい。かういふところはいかにも純情な新夫婦の生活らしく、私は大變いゝ事だと思はれる——あまり思ひやりのない仕うちさへ見せなければ——

今週は特にあるじの疲労がひどい。私は奮發して國府津に同行しやうと思ひ、その用意をする——午後四時五十分發車。

五月十九日 晴 暖

今朝の新聞でかなり私を驚かせたのは、ある一つの慧屋が地球にぶつかるといふ記事だ。

五月廿日 小雨

又雨だ。流石に春くれんとする雨はしめやかに且青々した色を思はせる。

先月の原稿がおくれた、め大變手数をかけたのに鑑みてなるべくは定日までにと思つて勉強した。何しろかの旅行記はほとんど自分の心持を遺憾なく現さうとしたので、公開しかねる處が多いのは残念だ。

今夜ははなれへ國男同期卒業の大村さんとかいふ人が来てしきりにはなしこんで深夜に及んだ。私はもう長く待つてゐられず先へねてしまつた。

今日ふと右足のおや指が大さう水ぶくれにはれ上つてゐるのに気がついた。何でも女中——とし——のはなしには此間から足袋をはく時變だとは思つてゐたが——といふ事だつた。

夜になつてその様子を國男が見て、どうしても打つちやつておいてはわるさうだ、ぜひ醫者に見せて——といふので、とう／＼明日藤谷さんに見てもらふ事に電話した。私は例の祈念によつてなほして見たいと思つたが、醫學的方法をつくすのも助けになる事と思つて同意したのだ。

#### 五月廿一日 晴 暖

昨夜皆のすゝめによつて、今日はどうしても藤谷さんを迎へる事になつた。午後の二時頃、同氏は久しぶりに來診された。かの不幸以來此人の心の中にはどんな悲しみがひそんでゐるだらうと、しみ／＼同情にたへない。寡言の人は不相變すぐ診察にかゝる。

「あゝ、これはやはり糖尿のためです。そしてこの位ですめばいゝけれど——或はグン／＼ひろがつて行くかもしれない。十分注意して決してむりをしないやうに、そして糖尿病の人はよくかういふものがグン／＼ひろがつてゆ

く事があります。私のかういふ詞がもしむだになればいゝけれど——」

あまりきびしい此詞に私は思はずかふ聞いた。「先生、それはどういふ事なのでございませう。私も少ししたい事があるのでございます。もうどれ位生きられるか、それによつて考へなければなりません」

「マアそれほどではありません」  
私のかういふ詞は單に氣休めのやうに思へた。そしてますます／＼勉強しないではならない——と決心せざるを得な

す。  
今日のかねて永島さんから紹介の保険のお醫者が見へた。兼て相談した通り壽江子を加入させる事にしてゐたので、同人の健康診断を頼む。——不相變ふてくされのやうな態度で、イヤダ——とぐつる。私は本當に心から立腹した。「頼んでもかける事の出来ない親さへあるのにあんまりわがまゝだ、もう決して何でも壽江子のいふ事も聞かない——」かう——私はとう／＼癪癢をさへ起してしまつた。そして例の通り腹痛やら、さまざまの症状が起つて早くねてしまつた。

永島さんから電話で保険加入の御禮があつた。

一馬さんがいよく郵船の社員に合格したといふので、背廣服か何かで意氣揚々とやつて來た。全く文字通り揚々として——

#### 五月二十三日 晴 小雨

今日は思ひがけず四谷の松平伯が來訪され久しぶりにお目通りをした。此の方も亦いつまでも同じ様に見へる、

—そして案外お元氣にさへ見へる。そしていつもより元氣で、いろ／＼おはなしがある。西村の父の事について「先生は學者といつても單なる學者肌でない、愛國者であり、政治家でもある。私も先生の傳記を編纂すべく弘道會に託したが、あまり長びくので此頃自分でやつてゐます。その中原稿をお目にかけるから御遠慮なく訂正されて——」といつて、いろ／＼打ちとけたおはなしがあり、めづらしく一時間ばかりお話しの後歸邸された。今日は横田、藤谷兩氏が診察に見へた。つまり内科と皮膚科の意見が相違したゝめなのだ。

#### 五月二十五日 晴後曇

××夫妻が見へた。初めは若夫婦のつもりで至極のんきに構へて居た所が、お年よりだと聞いて意外な感じがし急にいろ／＼用意をする。

初めの中はFさんの友人の事で×も来たのかと思つてゐると、どうして／＼意外にも此老夫人の口から出る詞は××子攻撃の詞ばかりであつた——朝ねをして××の汽車の間に合はず、おかあさんがはたと箒をもつてほとんど叩き立てるやうにおこすといふ事。

「××子がおつくりが下手であんまり着物をよこします。何しろ肌をぬぐといふ事なしにおつくりをして、どこもかもおしろいだらけ、此間などは私が見兼ねて、皆私がしてやりました。何しろ何事にもあきつほく、三味線のおけいこももういやでしかたがないらしく、おけいこへ行つて歸るともうバチも何もほうり出しはなし——もつとも私を驚かせた事は、あなたまあおふり袖の下のお腰が綿ネル——肌じゆばんも晒木綿が三枚ざり——おまけに三月もお腰を洗はず——」

あゝ恐ろしい詞だ。よく恥かしくもなくこんな事が私たちの前でいへたものだ——恥しらす——おまけにかういふ事をいふ。

「あんまり箆筒がひどいので桑の木にとりかへました」

箆筒と鏡臺、針箱まで——呆れて私は彼女の顔を見た。しかも彼女は尙自慢らしく「この頃はおけいこもあまりしないので、私が三味線をひいてやります」

年老ひたるものゝ心についてゆく垢だ。われながらかう省みずにはゐられない。

#### 五月廿七日 曇後雨 海軍紀念日

今朝おきると女中のはなしで、昨夜から國男の工合がわるいといふ事を聞いた。何でも吐きさうで苦しんだのだといふ——例にない事だ。驚いて咲枝をよんで容子を聞いて見ると、何か胸先がはつて苦しく、その爲吐きさうだつたが、それだけはやんだがやはり苦しいといふ。いろ／＼手當や、吐きさうな時には氷嚢へ水を入れ冷やす事やいろ／＼教へるが、何しろいふそばから忘れるやうな状態でがっかりする。胸をなでる事を教へる。それで病人は大分快くなつたらしい。夕方になると鰻が食べたいなど、子供のやうな事をいふ。——どうしてかういふ事をいふのだらうと考へさせられる。まあ／＼しかしそれもよくなつた兆候といつてもいい。何しろ咲枝があんまり子供らしいので氣がもめて——これから看護の本でも少しよんで見たら——と思ふのでその事をはなした。

#### 五月卅一日 晴 あつし



昨夜はどうかして宵によくねたのに、夜半目が覚めてねつけない。下痢もやんで元氣であるべきのに私の顔はめづらしい程蒼白だ。のみならずだるく疲勞して連も元氣がない。

大瀧基さんが来て此間の××夫人の××子に對するはなしにつきいろ／＼と説明した。何しろ箆筒を桑のに代へたのは事實だといふ事、しかし依然として朝は十分寝る様にといふ——病氣の方はおとうさんに見てもらふ様にといつたとの事——總てが私たちの聞いた事とは正反對——世の中にはこんな恐ろしい人もあるのかと、私は自分の耳を疑ふ位。よくぞ二人で行つて二人で聞いた事だ。これからは絶対に私一人では××氏のはなしは聞かない事にしやうと決心した。まご／＼するとわれ／＼が何かいゝかげんな事をいつて、家庭を紛糾させるやうにあたるから——こわい事／＼。

Kの家内が来た。此婦人は中々小利口でKには過ぎものだと思つてゐたが、今日見ると恐ろしいほどしやれめかしてゐた。鬘は大丸まげ、ぼかしの縮縮細の羽織を着流して、香ひの高いハンケチを手の中につまぐりながら大氣取りでものをいふ——子供にも氣の利いた洋服を着せ、これから少しは財蓄でもしやうといふ年配で、こんな風でどうするだらう——まるで雑誌の口書に見るやう。何といふ事だらう、いくらKが堅くつとめても恐らくこれでは身上にたまるまい——これも一つの時代相で氣の毒なやうに思はれた。

××がいよ／＼北海道へのく事になつたといつて暇乞ひに來た。不相變感謝の詞よりも自分の事ばかりいつてゐる——これだから成功しないのだとなぜ氣がつかないのだらう。やはり一升袋は一升だ。

六月一日 快晴 あつし

私はこの一週間ばかり非常に倦怠を感じ、且非常に元氣がない。もう／＼腹の底から疲れを感じるのだ。

私はとう／＼糖分を取らうと決心した。そして果もの、つゞいて餅菓子、洋菓子など、十分の糖分をとつた。するとふしぎな事には却つて尿意がとれ、尿量もへり、第一非常に氣分がしつかりして、だるくなくなつた。おまけに夜までも尿量がへつて起きなかつた。ふしぎだ。

壽江子をとうから入浴させやうと思つてもいろ／＼逃げて入らない。私は彼女の性質を考へていつも苦しめられる。今日もしかたがなく、とう／＼かういふ歌によつて彼女を入浴せしめる事が出来、又入浴後の返歌を求めた。

○我爲のゆあみにあらず壽江子さん、など病む母をかくわすらはす。

○汝がためにこゝろよかれと希ふ母の心を思ひやれ壽江子さん

とう／＼彼女は女中に命じて入浴の用意にかゝつた——よろこばしい——

六月七日 曇

早朝あるじ北海道から歸る。大變元氣だ。急に家の中が活氣づいた。代りに又むやみに騒々しくなる——おみやげにバタや林檎がある。

××子さんから電話で、母上と二人で來るとの事だ——此度はどんななか、私はつゝしんで聞き手にばかりなる覺悟だ。丁度十一時すぎその人達はやつて來た。××子さんも今日は夏物の衣がへをして「お母様のお見立てがお上手で——」と。

姑は此前とは打つて變つたおとなしい聲と態度は、人がちがふかと思ふ位だつた。そしてむしろお嫁さんの御機

嫌をとるといふ位で、恐ろしいまでのしとやかさだ。用事はかのFさんの友人で、三越にはいりたいとかいふ、その人の世話を頼みたいといふのが主な話の種だった。

#### 六月八日 曇

一昨夜入浴後少し風気味なのであつ着をし、午飯のあとアスピリン半粒のみ午後軽快。  
遣米客禮使、佐藤よし子嬢が母上と共に來訪された。門の多い處を引きとめては——と玄關に出て御あいさつをのべた。

私の患部もいよく繻帯をとり得たので、その心祝ひのため今日は夕方お赤飯をたいた。そして私たちは久しぶりに會芳樓へ行く事にした。關氏をもまじへて。

關氏にはなしてあの人の兄弟たちを弘道會に入會さすべく承知してもらつた。かういふ時は實に彼の天質のよさがはつきり分つて頼もしい気がする。ともかく兄弟は皆入れます——はつきり彼はいつたのだ。  
私もとうとう今日は足袋をはいて出られるやうになつた。まづく萬歳だ。

#### 六月十日 晴後曇

兼て心にかゝつてゐた安達家を訪問しやうと、大奮發で支度をする。ふしぎに今日は總ての調子がいい。

午後三時頃の街路はかなりにぎやかで、そしてかなりきれいだ。常磐松の一刻は大さう物靜かに、しかし案外家ごみで小さい家も多い。以前とちがつて江井が馴れてスラ／＼と街路をドライブして、スラ／＼と安達氏の玄關に

車がついた。一寸玄關をさけて私は下りた。

御留守で案外早く用がすんだので、私は大瀧家へよつた。こゝでも丁度外出しやうとする潤家さんと門前であつた。車を止め、玄關へ請じて潤家さんは更に出て行つた。中々如才ない態度だと思つた。めづらしく基さんを筆頭に、おひささんや小さい人たちがバタ／＼出て來た。一寸近所で買つたおもちや代りのお菓子の一包みを渡した。ひさ子さんはもうこぼれるやうなおなかを抱へて出て來た。「何故羽織でも着ないだらう」と氣が付くほど苦しうだつた。

基さんが如才なく、時間の立つて行く合ひ間／＼、あのX子さんの姑が此間私に話した通りの話を持つてN氏邸へ行つたとの事は、私の耳を驚かすに十分だつた。おまけにそのはなしは私が聞いた通りのはなしで、X X Xさんの奥さんに早速Nさんがはなしたので驚いて基さんをよんだといふ事——一體どういふ氣持ちなのだらう、雨？ 風？ 私はその雲行を案じずにあられない——

#### 七月八日 雨後晴

今日は壽江子が例の兒童劇をする日なので、朝から彼女は夢中になつてほとんどねる目もねずに、いろ／＼のものをと／＼のへる——お面——かざりもの／＼木の子や何か大きな／＼きれ地にかいた背景や何か、自動車に満載して出かけた。あまりに大が／＼りだと國男はいつたし、私も亦一寸さう思つた。しかしかういふ大ものを、ともかく一人でまとめ得る——といふ事に自信を持たせる事は、彼女の將來を啓發せしめる一助とも成らうといふ事で、家内總出といふありさまで、はなれの方は壽江子のお友だちがかなり多勢來て、歌ふやらおどるやら、子供の無遠慮さ

からどこも／＼大き過ぎ。

朝霧江子が出かける時、私たちも是非行きたいといったが、大人は誰も出ないのに困るから——といふので中止のつもりでゐると、やがてひる過、一時頃電話で、歓迎するすぐ来て——といふ。とても私は間にあひさうもないとりあへず咲枝さんでもといふ事で、丁度きものを着かへるだけなので、すぐ黒っぽい洋装で出かける——午後四時頃歸つて来てのはなしには、行くとすぐもうおしまひになり、おとうさまの方が先へ行つていらつしやるといふまあ、せめてよかつた——と思ふ。それから私ももしかしたら出かけやうかとそろ／＼用意にかゝつてゐたので、そのまゝ丸でやめるのも残念だと久しぶりに車をはせて、神宮外苑からあるじをむかへに行く。途中であるじだけ血脇さんによつて、見舞の刺を通じた。

#### 七月廿日 冷 時々驟雨もよう

今日は又秋のやうな風が吹く。何といふ不順なのだらう。此間のひどいあつさから外出も出来ないほど弱つてゐた私も、ほどなく安積へ行かなければならないので、かねて心にかゝつてゐたよし子さんと其娘さんが大病院へ入院してゐるといふのをぜひ見舞つてから立ちたいと思つて、先づ丸ビルの植木會社へよりいろ／＼花を見つくる。何しろこの暑中なので、大底の花ではちきだめだと思ふので、メロンを見たり、いろ／＼したがとう／＼棕櫚のやうな葉の赤い——蘭の種類かとも思はれる鉢植の木を持つて行く事にきめる。ついでに、はいばらによつて書簡箋や何かこま／＼買ひあつめる。霧江子が又ピロードの小さい犬がほしいといふ。なる程バリーのそのやうに中々よく出来てゐるので買つてやる。宅への花も買つてすぐ澁谷に向ふ。

前後したが、その前宅を出るとすぐ、帝大島園内科病室に、よし子さんのお嬢さんが肋膜炎で寝てゐるのをたづねた。大震後初めてこの校庭へ来て見た私は、何だか薬くさい——じめ／＼した周囲に不快をさへ感ずるのだつた。そして私はふと、英男が幼少の時——三つの時——バナナから疫病にかゝつてこの構内の隔離室に一ヶ月餘を暮した過去の思ひ出を、更にはつきり思ひ出さずにはゐられなかつた。あゝ、かうして身命を賭してあの偉大な體軀と健康をかち得させたのに——又しても私は胸を壓するやうな悲しみに、倒れさうにさへなつた。

今夜は久しぶりで支那料理をたべやうといふ事で會芳樓へ行く。丁度關千秋さんも来てゐたのでにぎやかに食卓につく。お腹工合も大變いゝので味が殊に美味い。

#### 七月廿三日 曇 後雨

中々暑い朝になつた。昨日までは曇つてゐたので、是ならば——と思つてゐたのも空だのみになつて、仲々涼しいどころではなささうだ。しかしどうしても今日立たなければ——と思ふので早朝から用意にかゝる。何のかのといつてかなりたくさんの荷物になつた。とう／＼十三個の外に大きなのを二個先へ出す事になつた。それに霧江子の自転車まであつて荷がかさむ。

大瀧、倉知へ電話で行けない申わけをする。倉知へはロータリーの禮をものべる。

午後二時すぎの急行ときめて、かなりゆつくりするつもりだつたが、やはりかうなると同じ様にせわしい。咲枝も今度は大分一生懸命に世話をした。國男もまじめに心づかひして、上野まで荷物の率領やら、近來にない活動ぶりで中々よく活動してくれた。自分のせわをしてくれるうれしさより、この位に働けるかと思ふとそれが母の身

にとつては何より嬉しいのだ。最後まで車中のこつてすつかりさしづをしてくれた。

今日の車内はかなりこんでゐた。貴族院の一團が乗つたとかいつて、私は立たされた。そして荷物は車掌の手で室外へ運び出した。漸くあけた座席の中を満たした一紳士——それは思ひがけない太田×××、清水×××の二氏だつた。しかし間もなくその二人は又席が出来たといつて出て行つた。人を勞する事を何とも思はない紳士——これが所謂當世流なのかもしれない。私は内心不平ながら、仕方なく又そのいやな紳士と列席した。

白河までの車中はむすやうにあつた。しかし流石は東北だ。車がすゝむにつれ、風いよ／＼冷やかに汗も出なくなつた。夕立めいた黒雲が空を領して冷風袂に滿つる午後六時すぎ無事郡山についた。出むかへの留藏夫婦、市次郎の女房おとめ、久一、宇太郎、關八重子さん、などだつた。たゞ私は特に痛感した事は、これまで留藏などは荷物の世話位はしたのに、今度はチツキも何もおき去りに私たちをあとに皆自動車に乗つて行つてしまつた事だつた。

#### 七月廿四日 晴 折々小雨

ひる前あの〇〇の××さんが來た。大變あばれもので手古すつてゐるといふ事を聞いてゐたのに、今あつて見るとすつかり〇〇様になりまして、全くあばれものゝ影もない。恐ろしいものだ、その途に入ればともかくかうして妻子をもつておきまるのだ、あゝ——私はかくして世と妥協し得る人々の生活を思つた。平凡に世に處すべく人は運命づけられたものなのか——聰明なる者——秀でたる人——これこそ苦難の道程を歩すべきものなのか、あゝ。夜になると例の連中がつかけて來た。いろ／＼仕事をもつてゐる私にはもう以前の様に彼等の相手のために、

時を空費する事に安易さを感じられなくなつた。

宅へあてゝ二本の手紙をかく。

月末の月給日になるので、私はあるじにあてゝ國男に支給すべく支出を快くしてほしいといふ事をかいた。

#### 七月二十六日 雨 冷

昨夜はむやみに冷氣で、大きい夜具でも尙涼しい位だつた。

午前新聞と一しよに、宅からののがき二通——あるじと國男のが届く。咲枝の手紙には百合子のも封入されてゐた。久しぶりの彼女の手紙の上不相變親心の變りないあつい涙をさへ流した。やはりなつかしい——迫る様な愛情をさへ感じずにはゐられない。有難い親心だとわれながら思はれる——此手紙ではいよ／＼秋には、十月頃には歸朝するといふ事。流石に壽江子も非常にうれしがる。どうか／＼和らぎのあるいゝ氣持ちであつてほしい——咲枝からの手紙は、國男の病後の容子をしらせてよこしたが、あまり國男々々と呼びすてにかいてあるのがいやだつた。それで私はその手紙の裏にすぐ訂正してかきおくる事にした。

#### 七月二十九日 快晴 清涼

西村屋のおかみさんが來て卵をもつて來たさうだが、生憎私はひるねしてあはなかつた。

有江さんから孫娘をおつかひでとうもろこしを届けてよこした——  
例の通り夜になると留藏夫婦やいろ／＼の人たちがおとづれた。今年はずいともちがひ大分呑むものがへつ